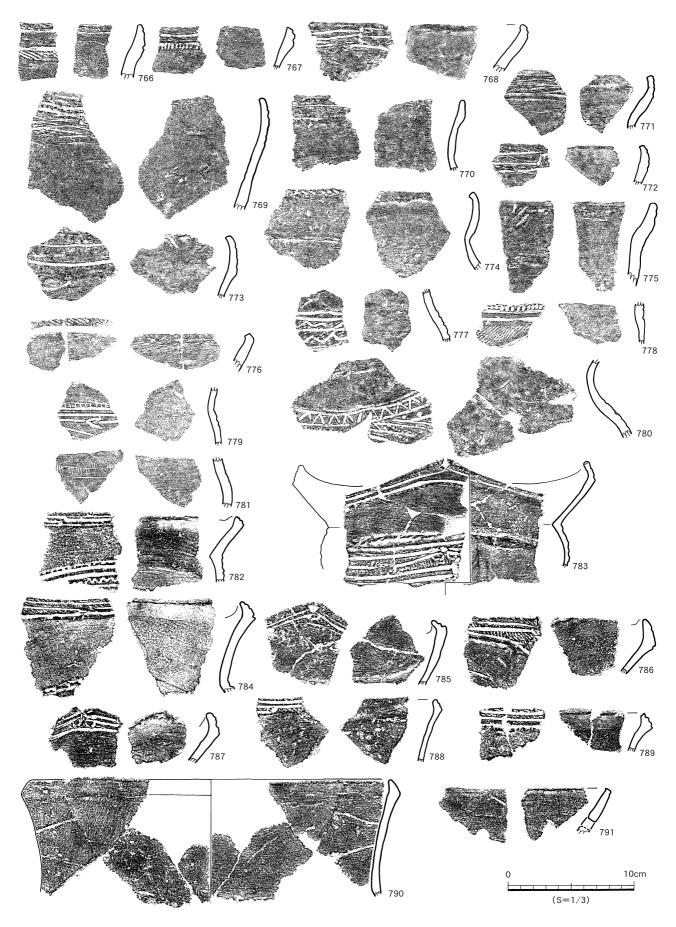
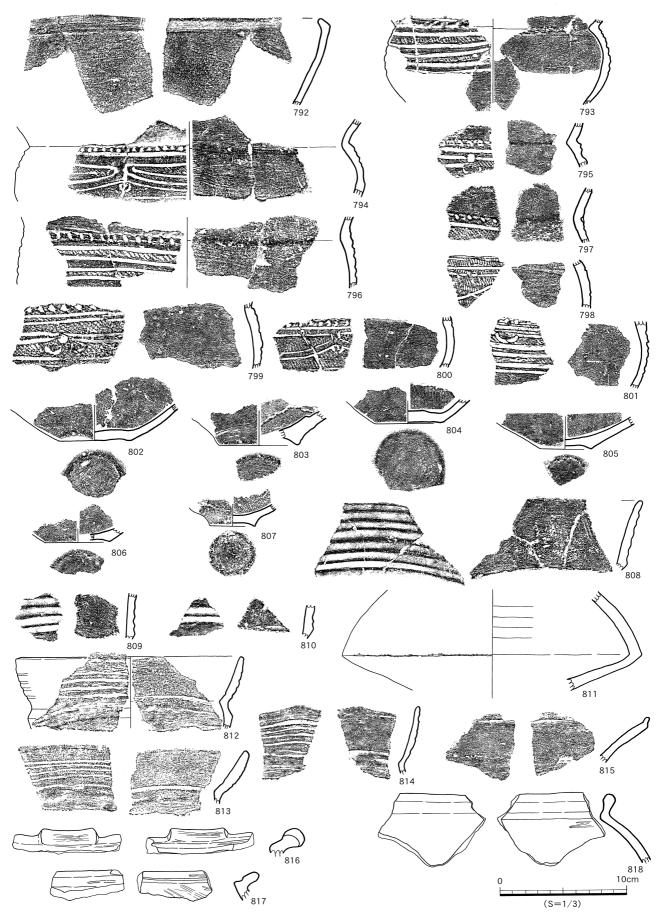


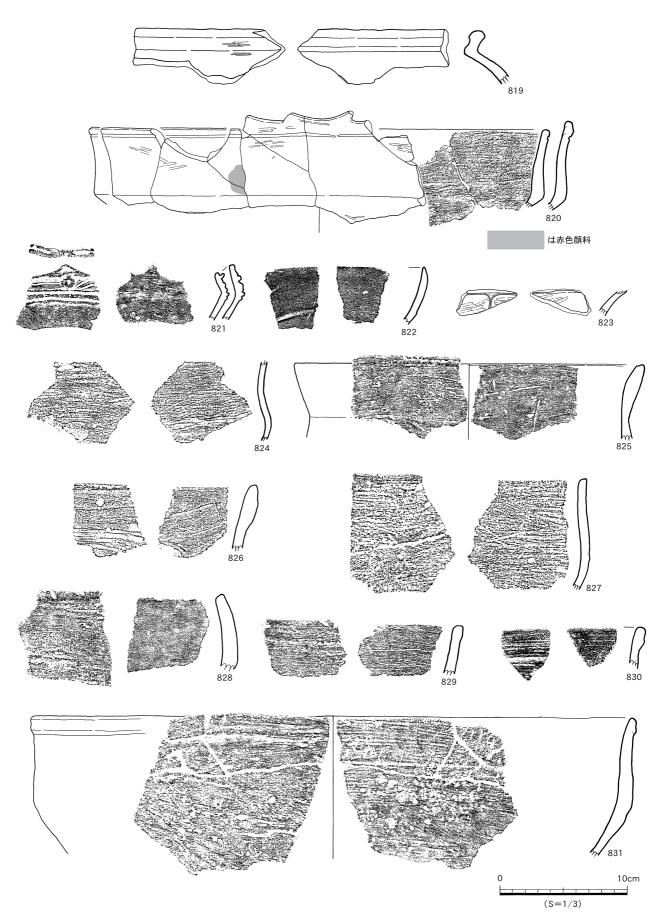
第67図 包含層出土遺物②



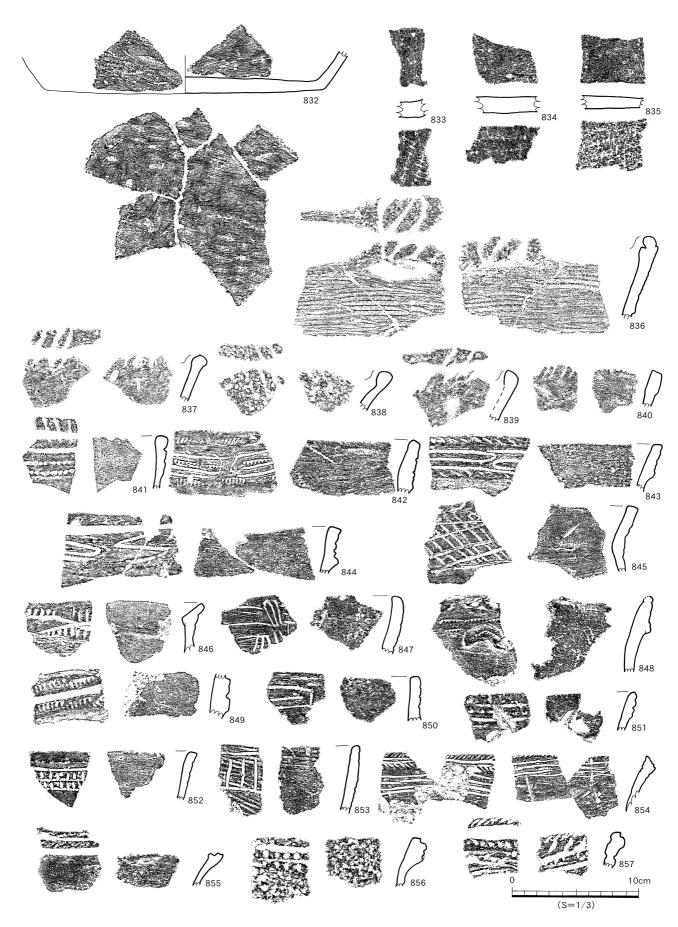
第68図 包含層出土遺物®



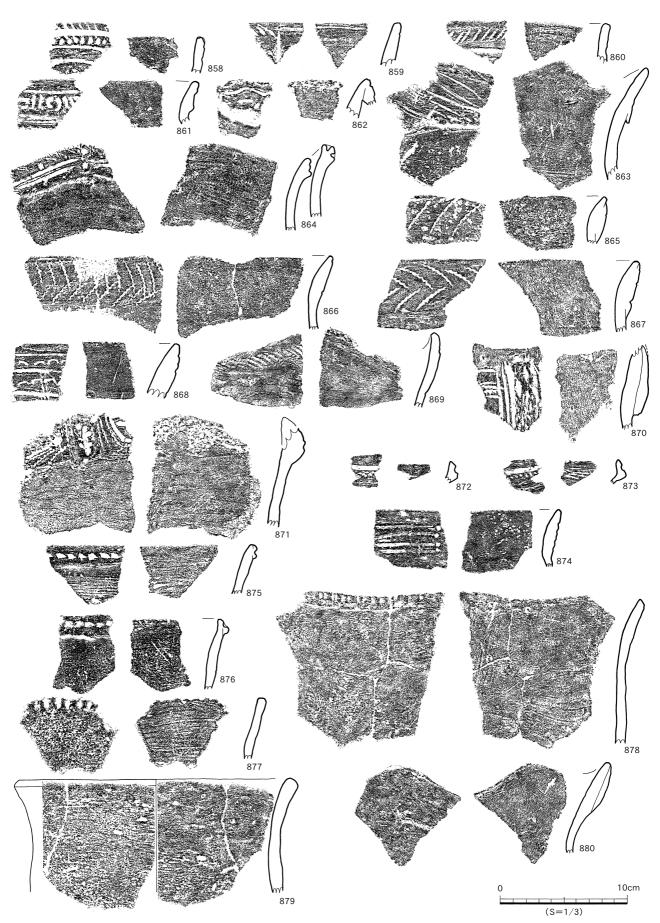
第69図 包含層出土遺物②



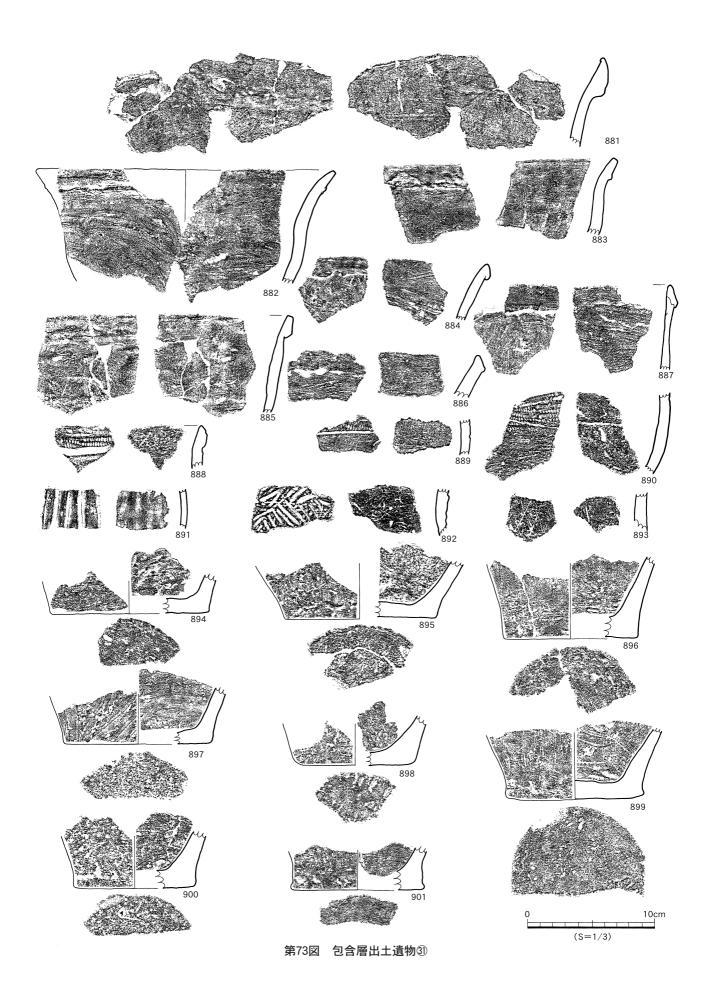
第70図 包含層出土遺物28



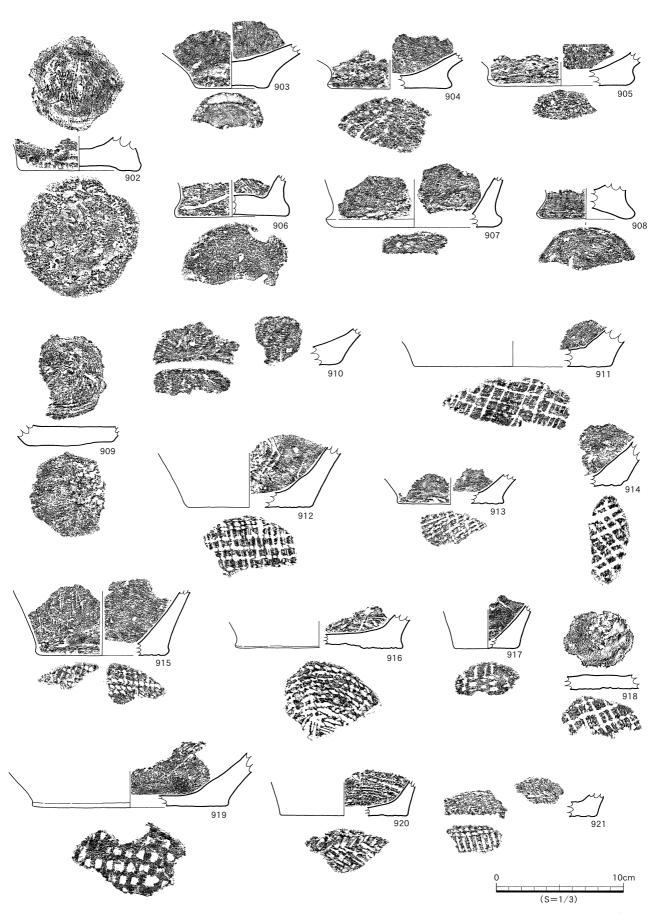
第71図 包含層出土遺物②



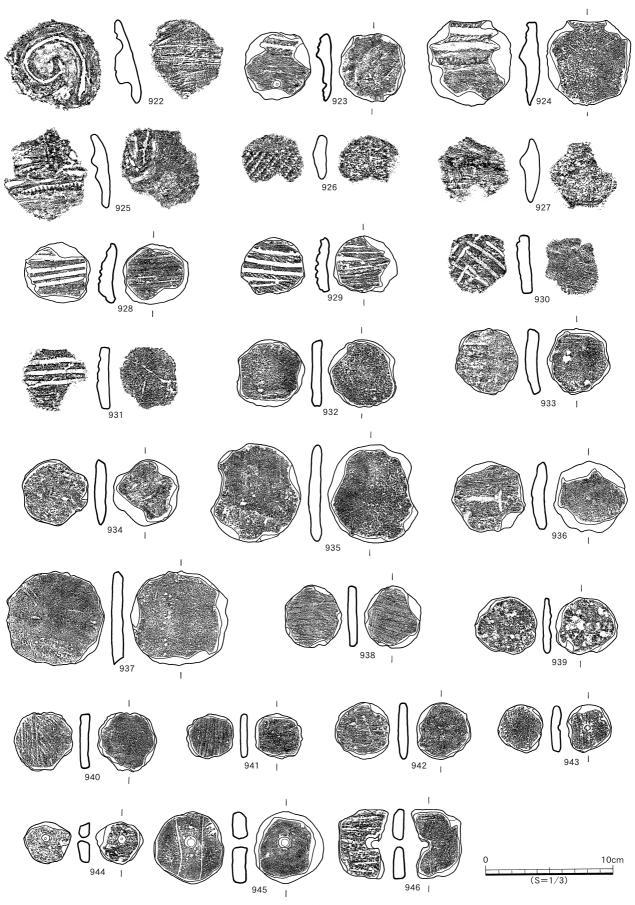
第72図 包含層出土遺物30



- 87 -



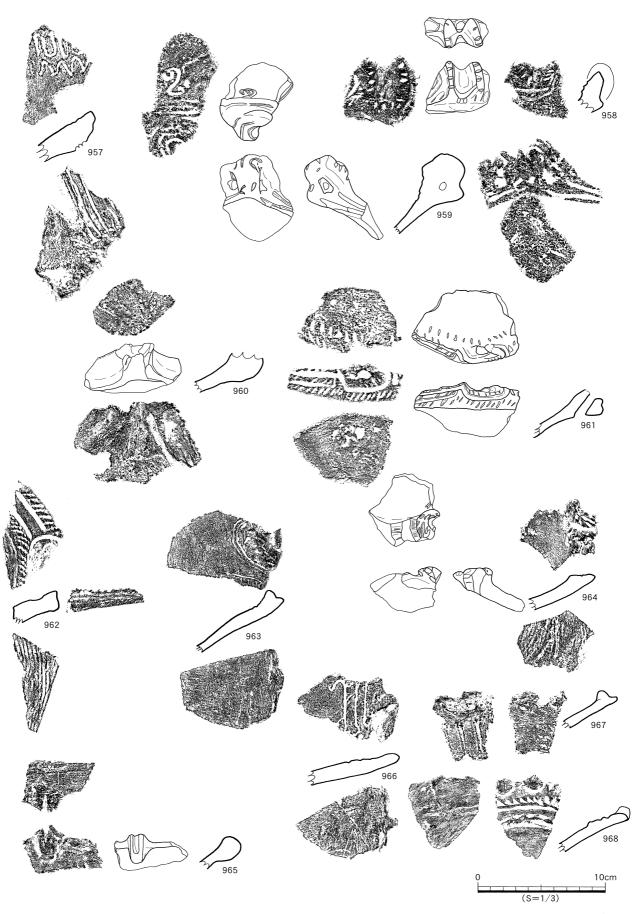
第74図 包含層出土遺物②



第75図 包含層出土遺物③



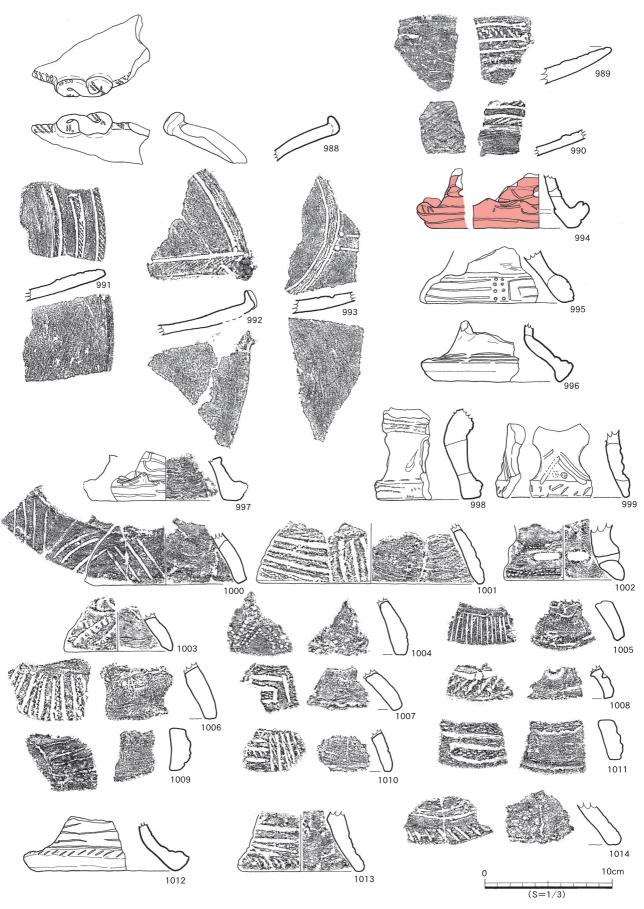
第76図 包含層出土遺物 34



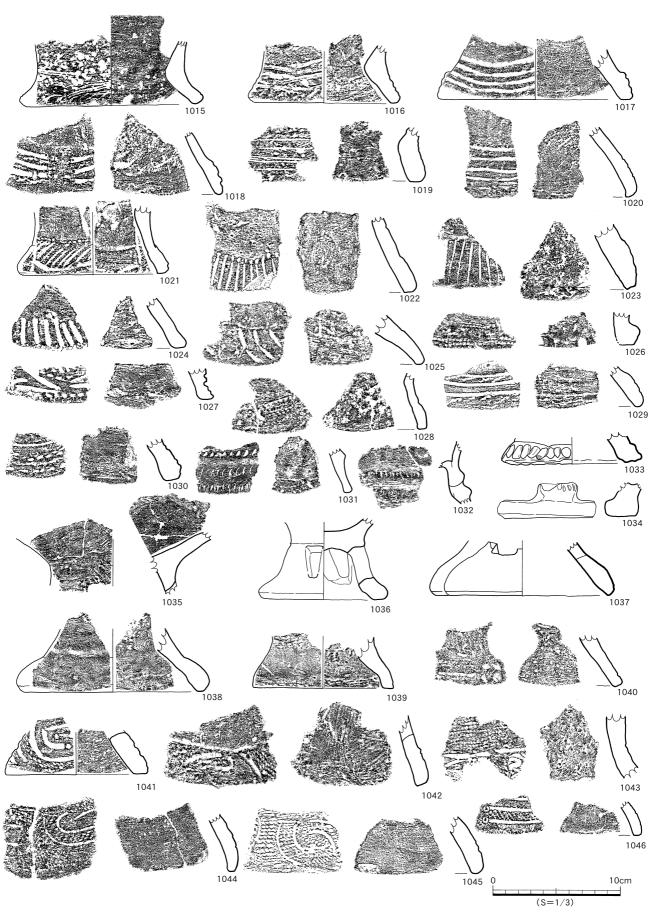
第77図 包含層出土遺物③



第78図 包含層出土遺物®



第79図 包含層出土遺物③



第80図 包含層出土遺物38

概要

縄文時代の石器はⅡ層・Ⅳ層を中心に出土している。出土した石器類は、打製石鏃、両面加工尖頭器、石匙、スクレイパー、石錐、楔形石器、異形石器、二次加工剥片、サイドブレイド、微細剥離痕剥片、石核、磨製石斧、打製石斧、礫器、擦切状石器、石錐、磨石、敲石、石皿類が確認できた。石材の分布を見てみると、黒曜石Ⅱ(日東産)は調査区全体に広がりをもつものの、黒曜石Ⅲ(桑ノ木津留産に類似)、Ⅳ(腰岳産に類似)、Ⅵ(霧島系と思われるものに類似)、安山岩Ⅰ、チャート、めのう系などはF-54、55区などに剥片の集中が見られる。このことから、これらの範囲は石器製作場であった可能性が強いと思われる。

包含層からは、総点数で19570点の石器が出土している。 ツールに関しては2429点で全体の約12.4%を占めている。

打製石鏃 (第87図~第93図 1047~1225)

打製石鏃は形状・長さ・幅の比率(長幅比)・基部の 形態において分類を行った。

形状は三角形 (I)・五角形 (II)・円形 (III),長幅 比は $1\sim1.5$ (ほぼ正三角形 a)・ $1.5\sim2$ 未満 (ほぼ二 等辺三角形 b)・2 以上 (縦長 c),基部は平坦 (1)・ 浅い (2)・深く V字形 (3)・深く U字形 (4) と分類 した。

使用されている石材としては黒曜石が多くを占めるが、 安山岩・チャート・頁岩・玉髄なども用いられている。 他の石器が、在地産である日東の黒曜石を多く用いてい るのに対して、打製石鏃は桑ノ木津留産、腰岳産の資料 に類似する石材を用いて作られたものの割合が比較的高 い。

石鏃と石鏃未製品と考えられるものは遺跡全体から 449点出土し、そのうち179点を図示した。

I-a-1類(34点)

1047~1080が該当する。形状がほぼ正三角形を呈し、 平坦な基部を持つ。石材は日東産と思われる黒曜石が多 くを占めるが、1059と1066は玉髄である。

I − a − 2 類 (44点)

1081~1124が該当する。形状がほぼ正三角形で、基部に浅い抉りが施されているものを分類した。石材は桑ノ木津留産(9点)、腰岳産(8点)に類似する黒曜石が多く使われている。そのうち1124は鋸歯縁鏃である。

I - a - 3類 (16点)

 $1125\sim1140$ が該当する。形状がほぼ正三角形で、基部に深い抉りが施されている。 $1125\cdot1132\cdot1134$ は脚部が全長の約半分をしめる。 $1136\sim1140$ は鋸歯縁鏃である。1140は基部を大きく破損しているため、抉りの状況は不明である。石材はチャートの割合が高い(5点)。

I − b − 1 類 (13点)

1141~1153が該当する。形状がほぼ二等辺三角形を呈し、平坦な基部である。破損しているものが多い。

I − b − 2類 (31点)

1154~1184が該当する。形状がほぼ二等辺三角形で、 基部に浅い抉りが施されている。1172や1176は側縁中央 が狭くなっているため、左右に張り出した脚部を持つ。 そのうち1184は鋸歯縁鏃である。

I − b − 3 類 (15点)

1185~1199が該当する。形状がほぼ二等辺三角形で、 基部に深い抉りが施されている。そのうち1194~1199は 鋸歯縁鏃である。石材は腰岳産に類似するもの(4点)、 チャート(3点)、玉髄(3点)などである。

I-b-4類(9点)

1200~1208が該当する。形状がほぼ二等辺三角形で、 基部に深い抉りが施されU字形を呈している。そのうち 1202~1208は鋸歯縁鏃である。

I-b破損(3点)

I - bのうち、基部が破損しているものを分類した。 $1209 \sim 1211$ が該当する。抉りが施されていたと思われるが、程度は不明である。

I-c-2類(3点)

1212~1214が該当する。全体の形状が二等辺三角形で 縦が幅の2倍以上の長さを呈し、基部に浅い抉りが施さ れている。

I-c-3類(1点)

1215が該当する。全体の形状が二等辺三角形で縦が幅の2倍以上の長さを呈している。基部は破損しているが、深い抉りが施されていたと思われる。

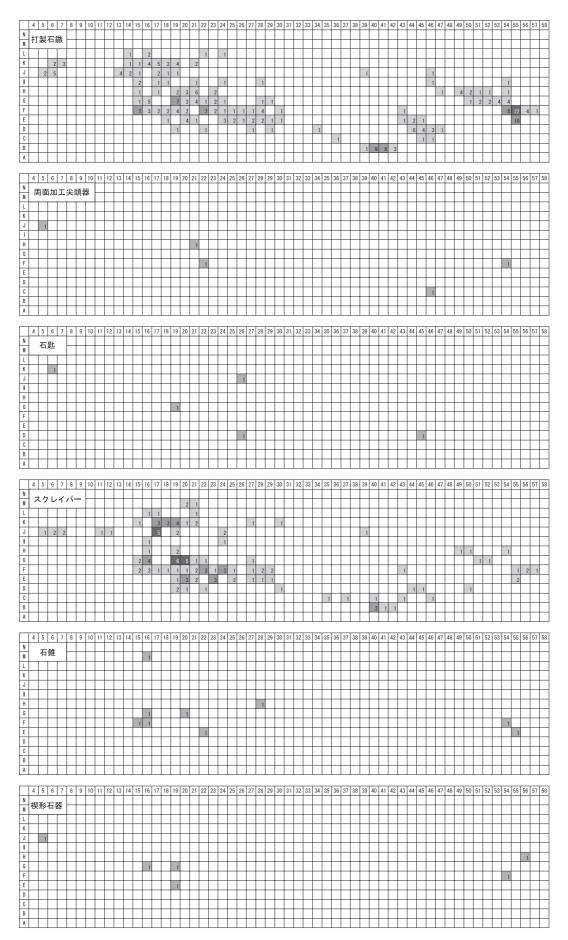
Ⅱ類 (3点)

Ⅱ類は五角形をなすものを分類した。1216~1218が該当し、1216は基部がW字を呈する。1217・1218は抉りが浅い。石材は腰岳産に類似するものとチャートである。Ⅲ類 (6点)

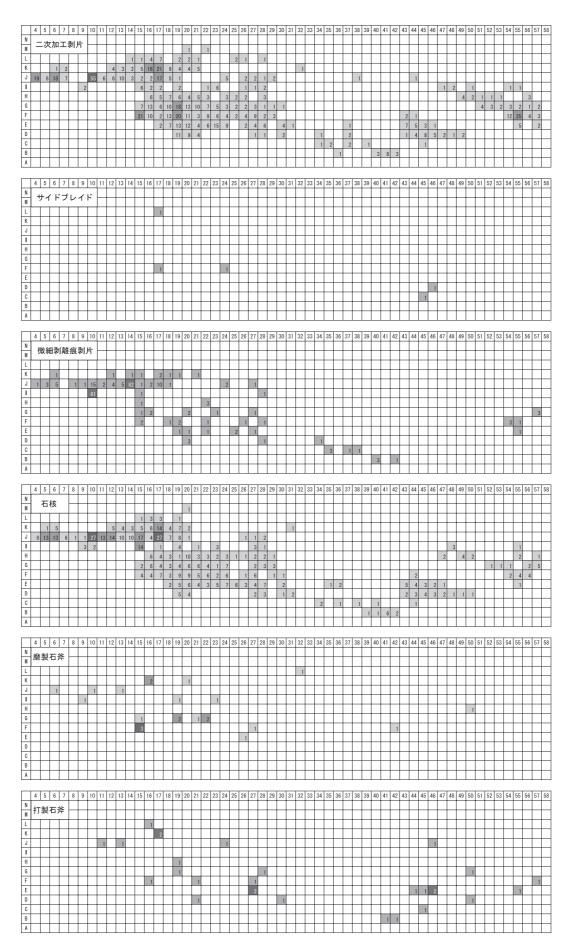
Ⅲ類は丸形をなすものであり、1219~1224が該当する。 1224は縦長の形状である。

石鏃未製品

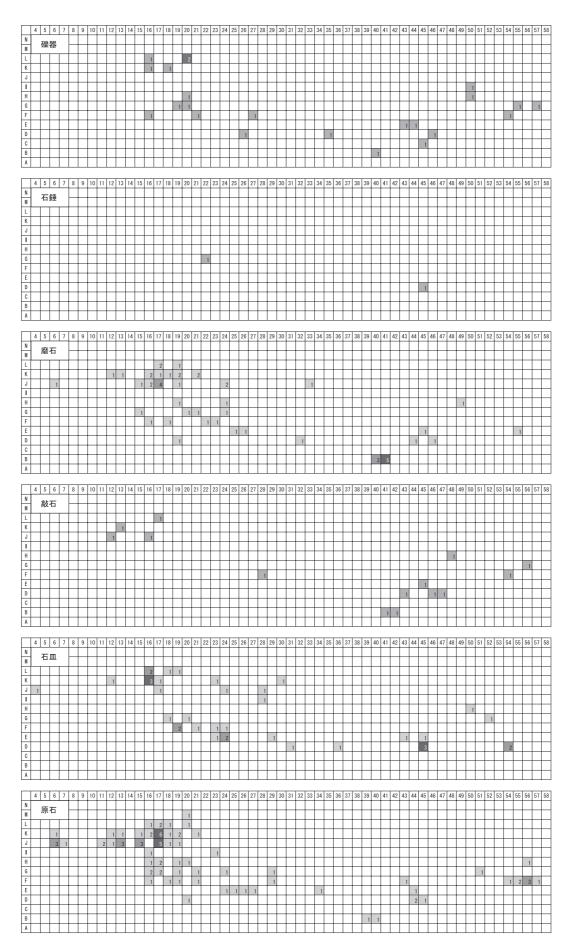
1225が該当する。左側縁部の剥離をあまりおこなっておらず、主要剥離面を残している。



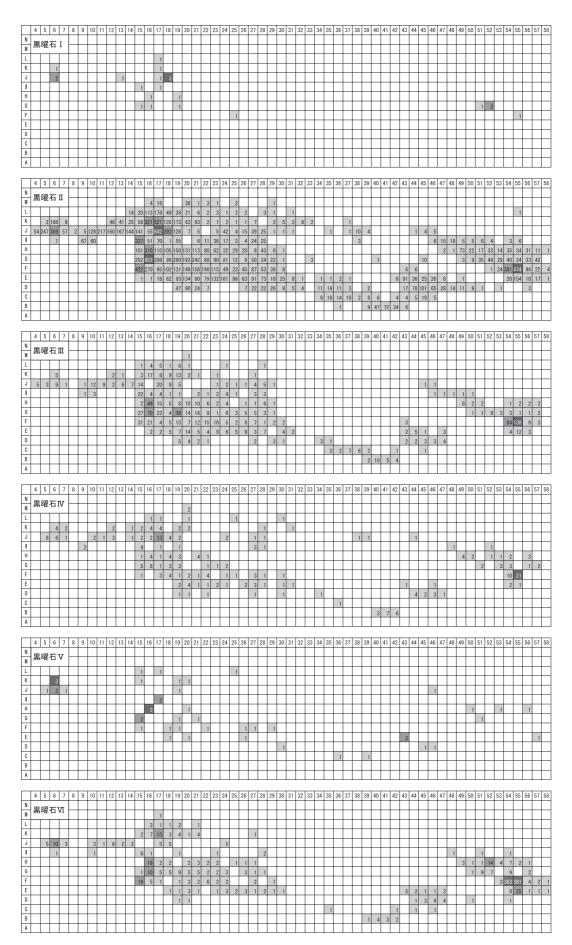
第81図 包含層出土状況①



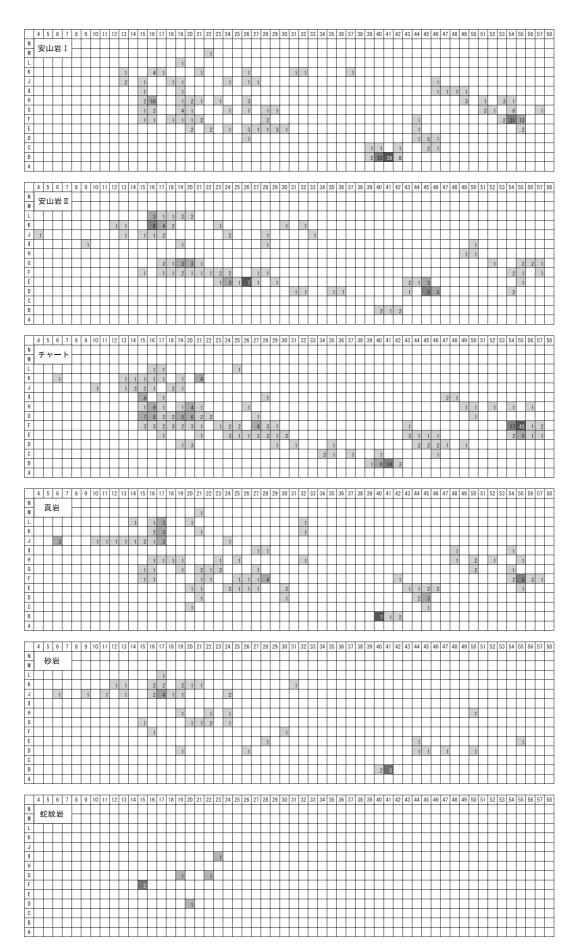
第82図 包含層出土状況②



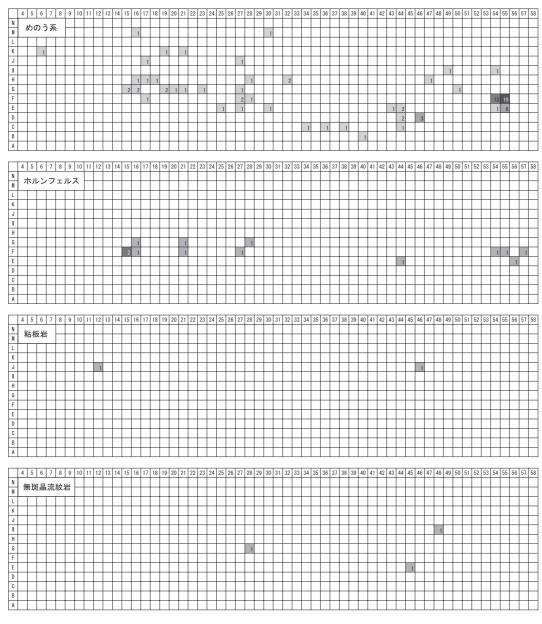
第83図 包含層出土状況③



第84図 包含層出土状況④



第85図 包含層出土遺物⑤

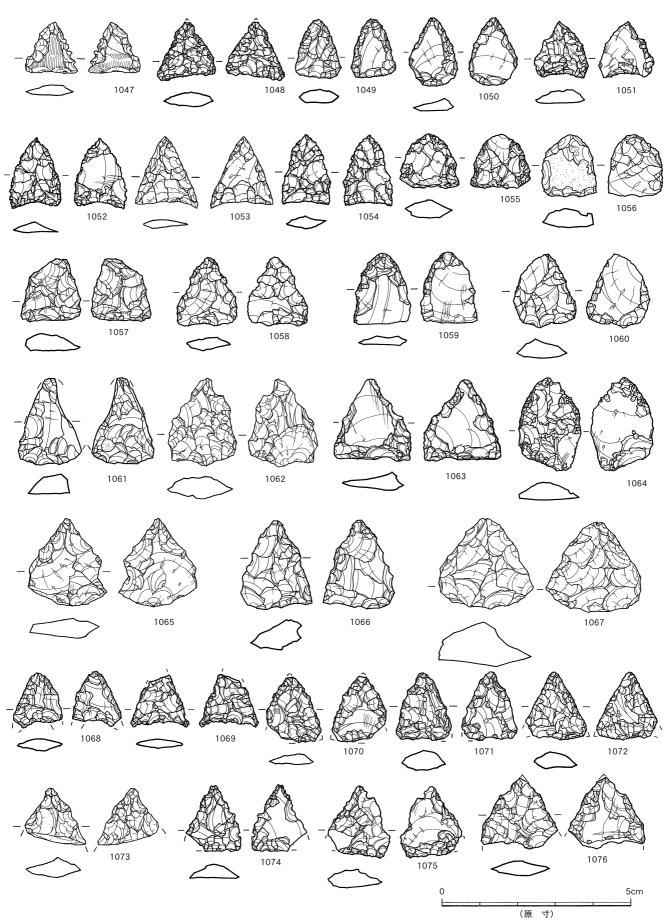


第86図 包含層出土状況⑥

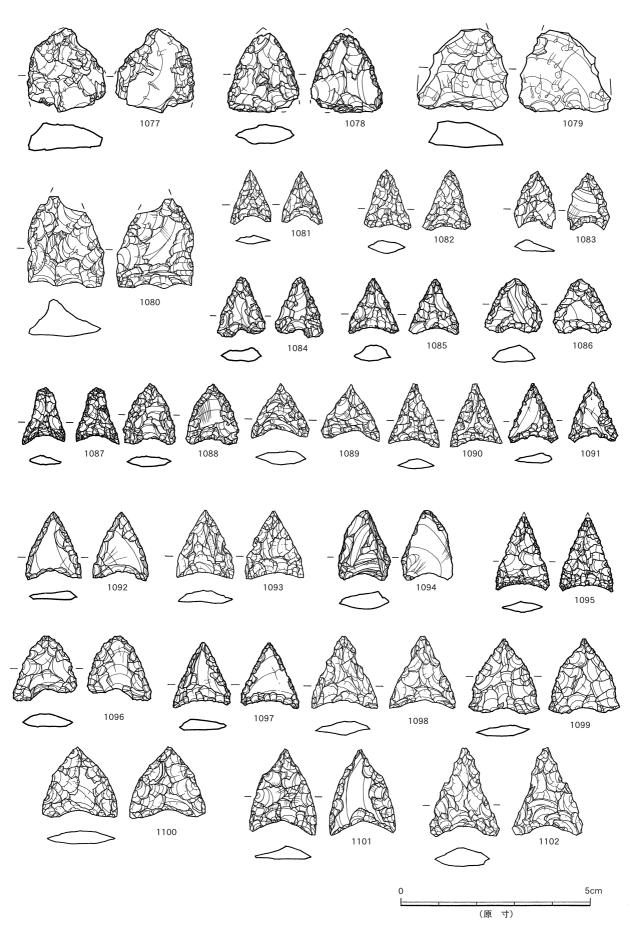
器	剥二	石	打	痕微	パス	原	磨	石	打	礫	磨	敲	石	楔	石	レサ	尖両	石	そ	
	次		製	剥剥	ク				製		製			形		17	頭加		の	計
種	加片工	核	石鏃	一 剥 片離	ロレコイ	石	石	ш	石斧	器	石斧	石	錐	石器	匙	ドブ	器工	錘	他	
1里	ЛЪ	12	列大	刀 附	1.4	11	111	TIIIL	斤	fiir	开	11	班	fiir	ル	r /	前上	亚王	TE	
出土数	831	599	270	255	131	83	52	38	28	23	22	14	9	6	5	5	4	2	48	2425
出土率	34.3	24.7	11.1	10.5	5.4	3.4	2.1	1.6	1.2	0.9	0.9	0.6	0.4	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	2.0	100

石	黒	黒	黒	黒	チ	安	安	頁	め	砂	黒	黒	フホ	蛇	粘	流無	
	曜石	曜石	曜 石	曜石	ヤート	山 岩	山 岩		のう		曜 石	曜 石	ェルル	紋	板	紋斑	計
材	I	I	VI	IV	ŀ	I	I	岩	系	岩	V	I	スン	岩	岩	岩晶	
出土数	16010	1195	1152	272	258	216	117	114	86	54	47	22	13	6	2	2	19566
出土率	81.8	6.1	5.9	1.4	1.3	1.1	0.6	0.6	0.4	0.3	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	100

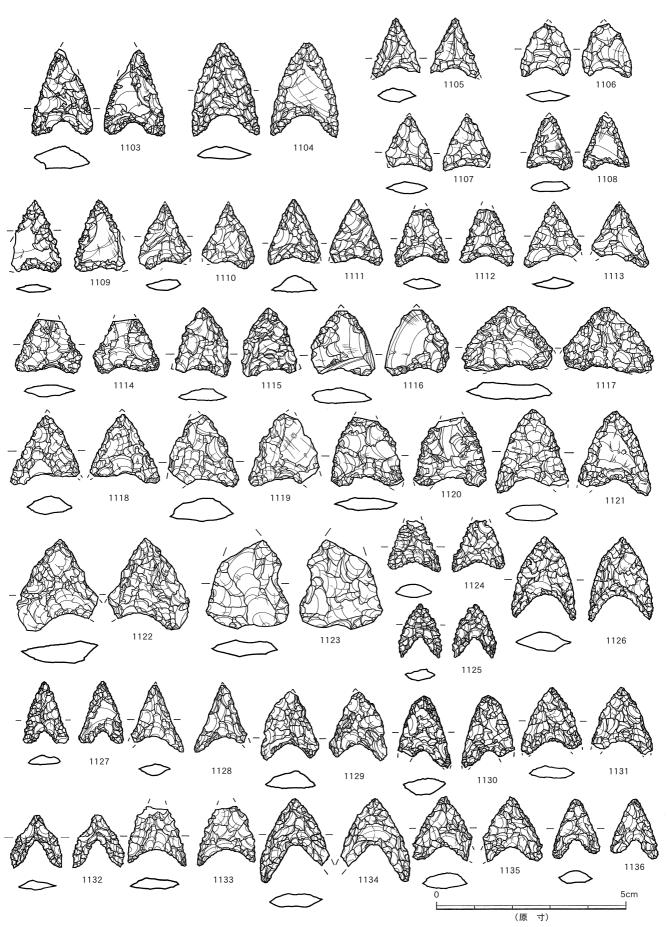
表 4 組成表



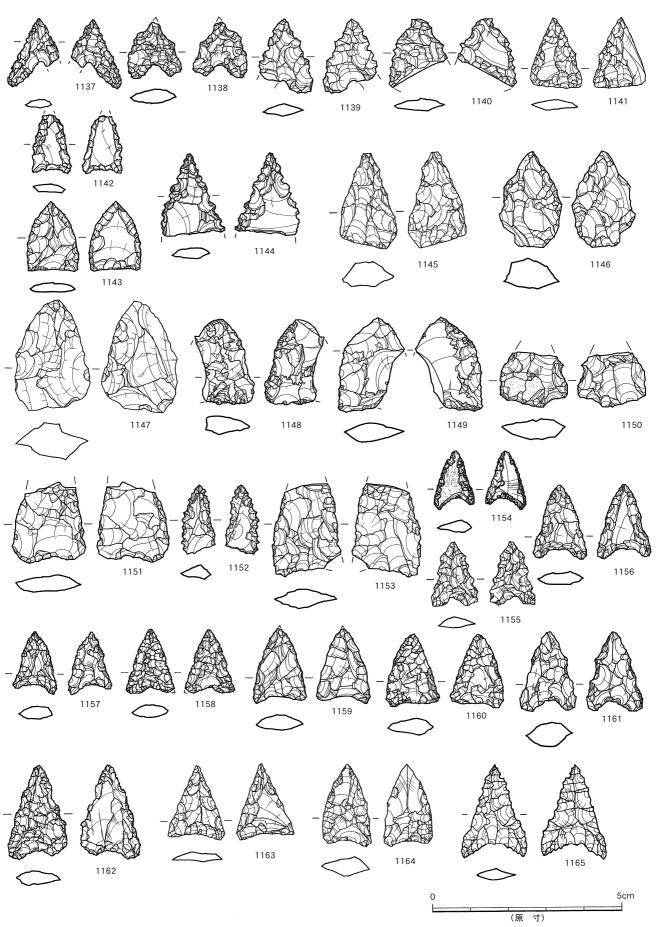
第87図 包含層出土遺物①



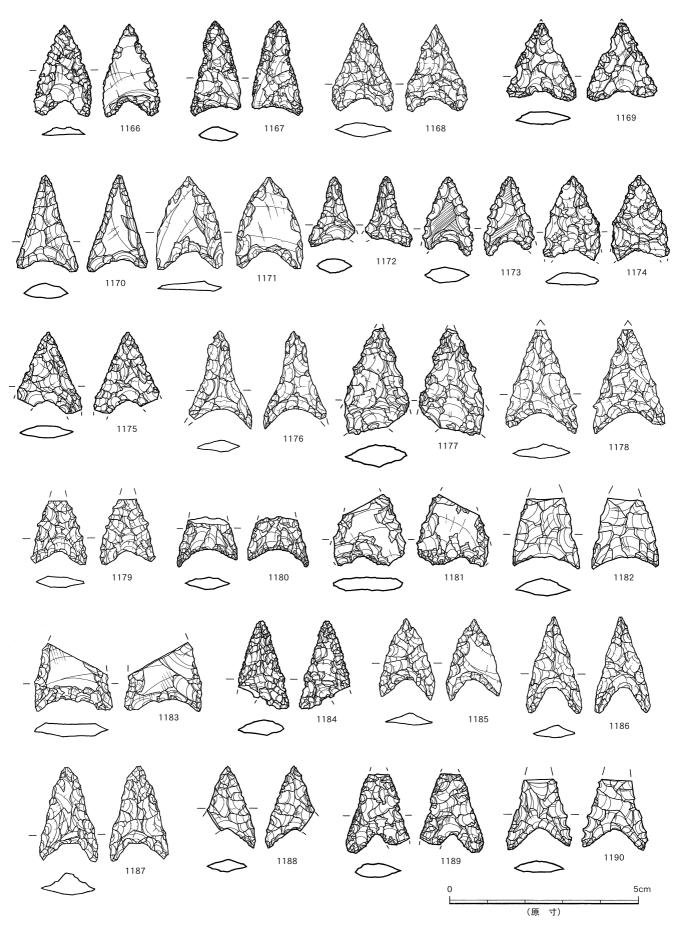
第88図 包含層出土遺物②



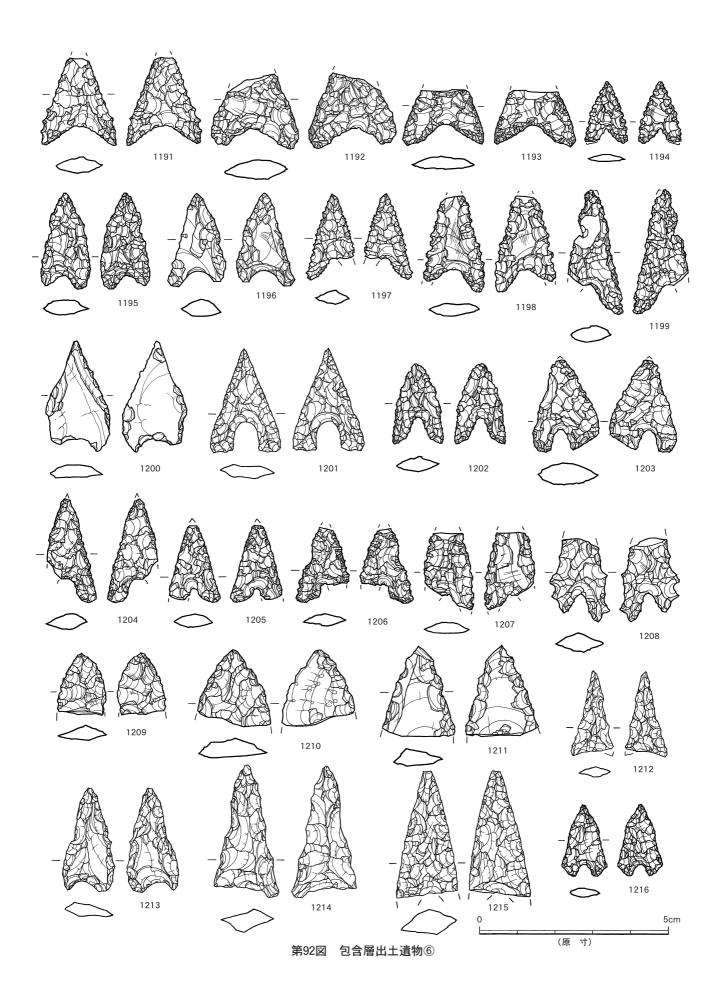
第89図 包含層出土遺物③



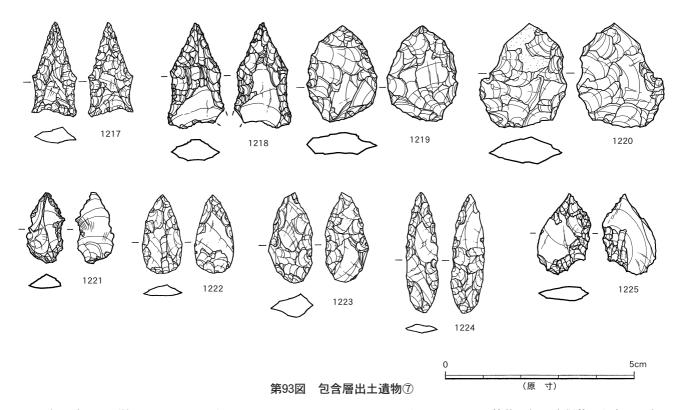
第90図 包含層出土遺物④



第91図 包含層出土遺物⑤



- 107 -



両面加工尖頭器 (第94図1226~1229)

計5点出土し、4点を図化した。図化したものの石材はいずれも日東産の黒曜石である。尖頭部を作り出そうとしているが、1226と1229は先端部が欠損している。

石匙 (第94·95図1230~1234)

計8点出土し、そのうち5点を図化した。1230と1231 はやや斜刃になるものである。1232・1233・1234は比較 的大型の剥片を素材として利用したもので、1232は横方 向の刃部で全体を丁寧な二次加工で整形しており、1234 は縦方向の刃部である。石材はチャート、安山岩、日東 産の黒曜石が使用されている。

スクレイパー (第96図~第100図1235~1263)

計197点出土し、29点を図化した。1235・1236は刃部が丸みを帯びたラウンドスクレイパーと思われ、石材は腰岳産に類似する黒曜石が用いられている。1237・1238は側辺部に丁寧な加工が見られ、桑ノ木津留産に類似する黒曜石が使用されている。1239~1243は縦長の剥片を素材とし、日東産の黒曜石を用いている。1243と1246は刃部がV字状を呈する。1247~1250は比較的厚みのある日東産の黒曜石を素材とし、周辺部に調整を施している。1251~1258は直線的な刃部を持つものが多く、両面からの調整が加えられている。1259~1263は日東産の黒曜石を素材としている。1259~1260・1261・1263は片側から細かい剥離を施しているが、1262は両面から調整を施し、直線的な刃部を形作っている。

石錐(第101図1264~1271)

計13点出土し、8点を図化した。1265には錐部が上下

に2つみられる。1267は棒状に細かく調整したものである。1268~1271は逆三角形を呈したもので、つまみ部を有するものである。1270・1271は錐部近くを丁寧に加工している。

楔形石器 (第101図1272~1276)

計6点出土し、そのうち5点を図化した。上下両端からの両極の剥離痕が表裏両面に認められる特徴を有する。 1275は腰岳産の黒曜石に類似し、残りは日東産の黒曜石である。

異形石器 (第101図1277)

特異な形態をした石器を異形石器として1点分類した。 細かい押圧剥離を施したもので、腰岳産の黒曜石でつく られたものである。

二次加工剥片(第102図~第106図1278~1351)

1391点出土し、そのうち74点を図化した。加工されている部分や形によって、5つの分類を行った。

A類(17点 1278~1294)

縦長の剥片の側辺部に加工があるものを分類した。 B類 (35点 1295~1329)

不定形の剥片の縁辺部に加工があるものを分類した。 C類 (9点 1330~1338)

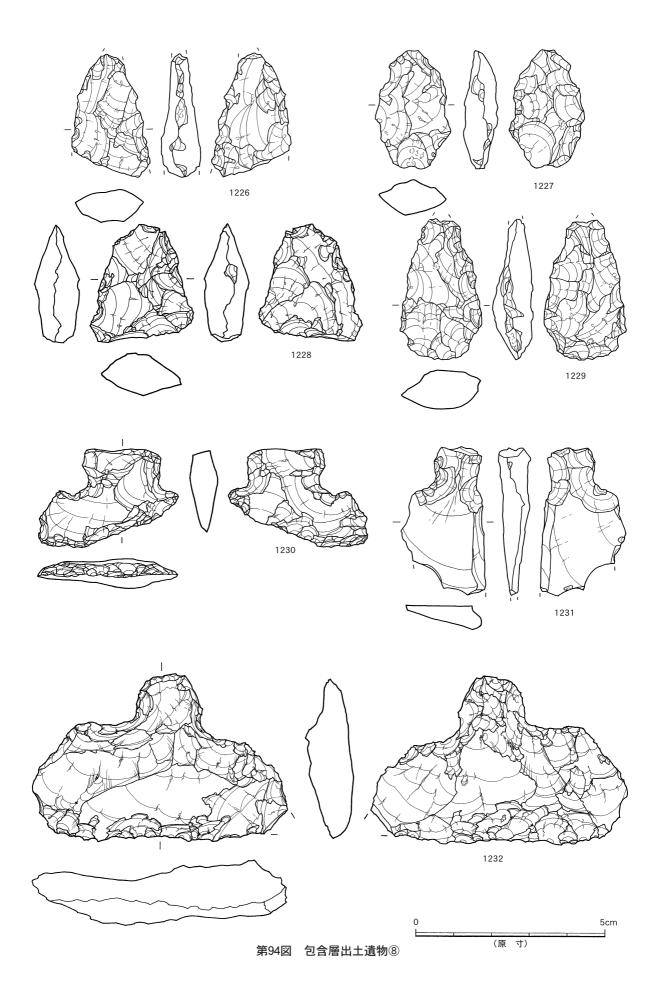
剥片の下端部に調整がみられるものを分類した。

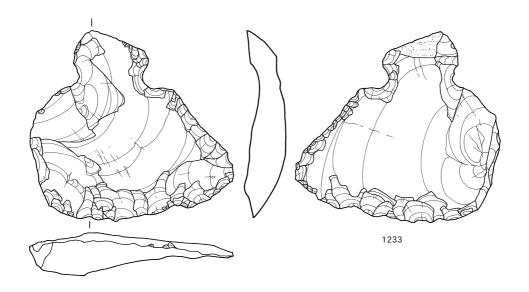
D類 (8点 1339~1346)

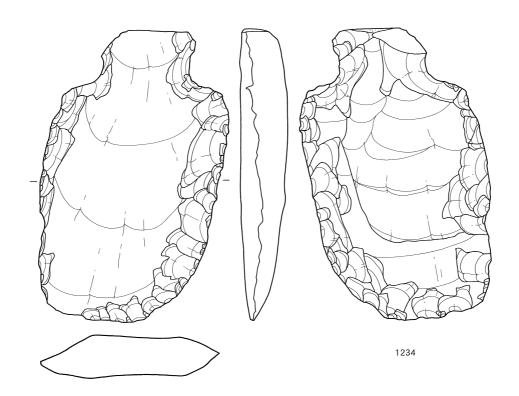
加工が複数の場所にみられるものを分類した。

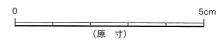
E類(5点 1347~1351)

鋭い先端をもった剥片で, 先端をつくるような調整が みられるものを分類した。

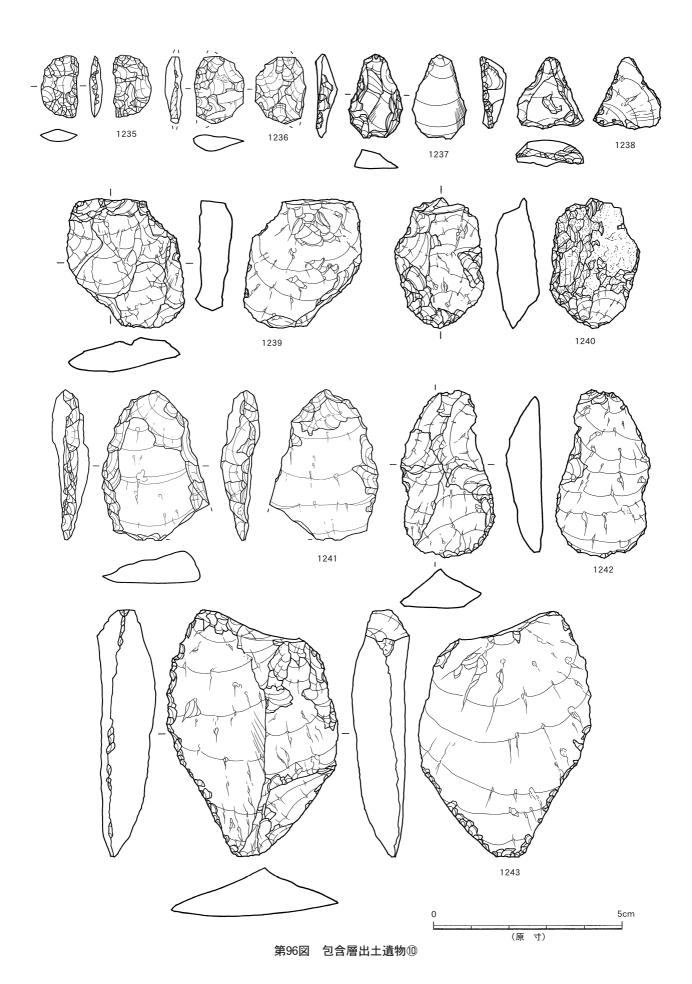




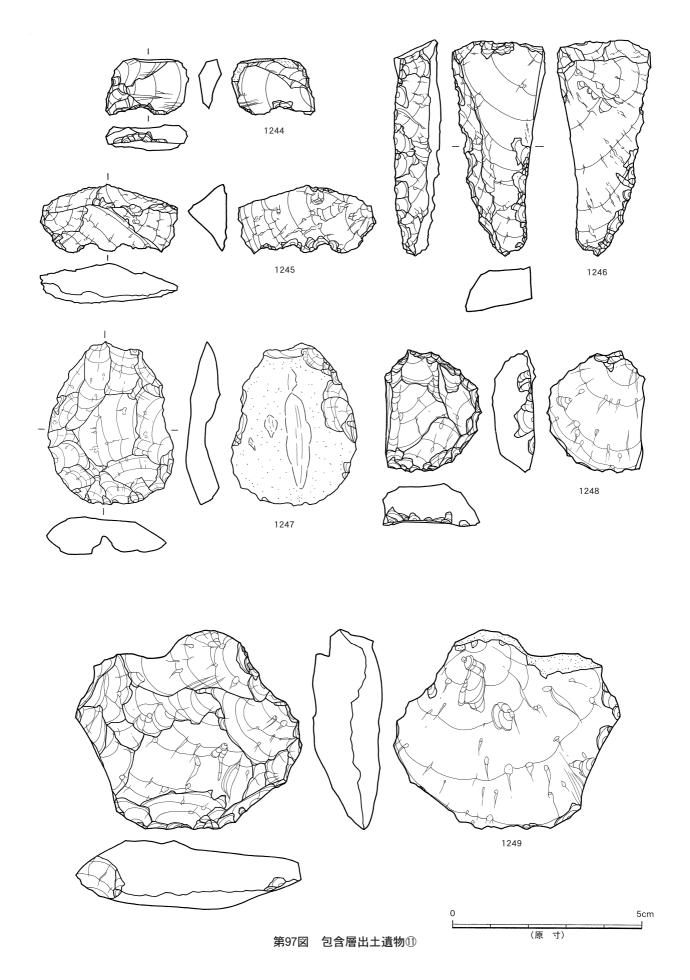


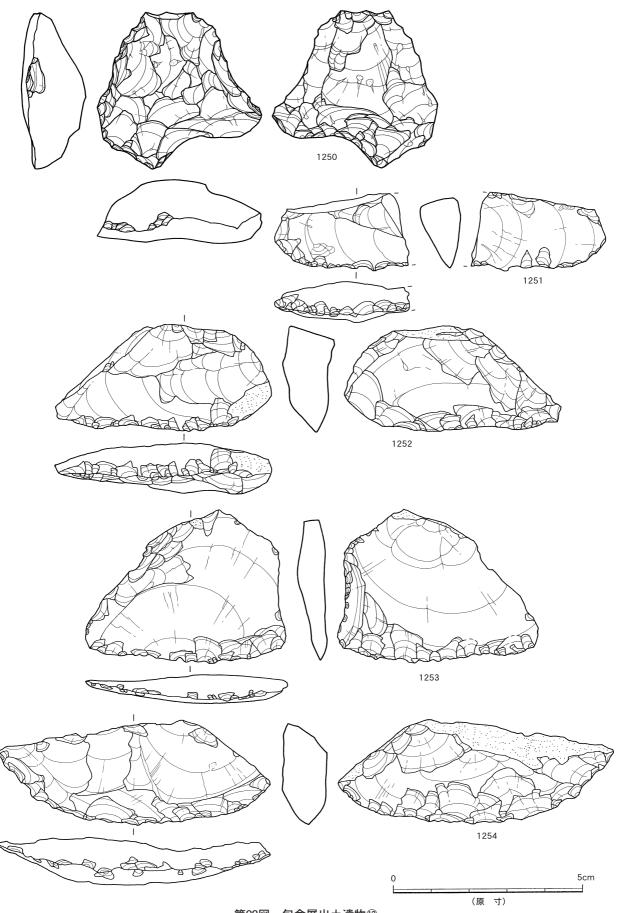


第95図 包含層出土遺物⑨

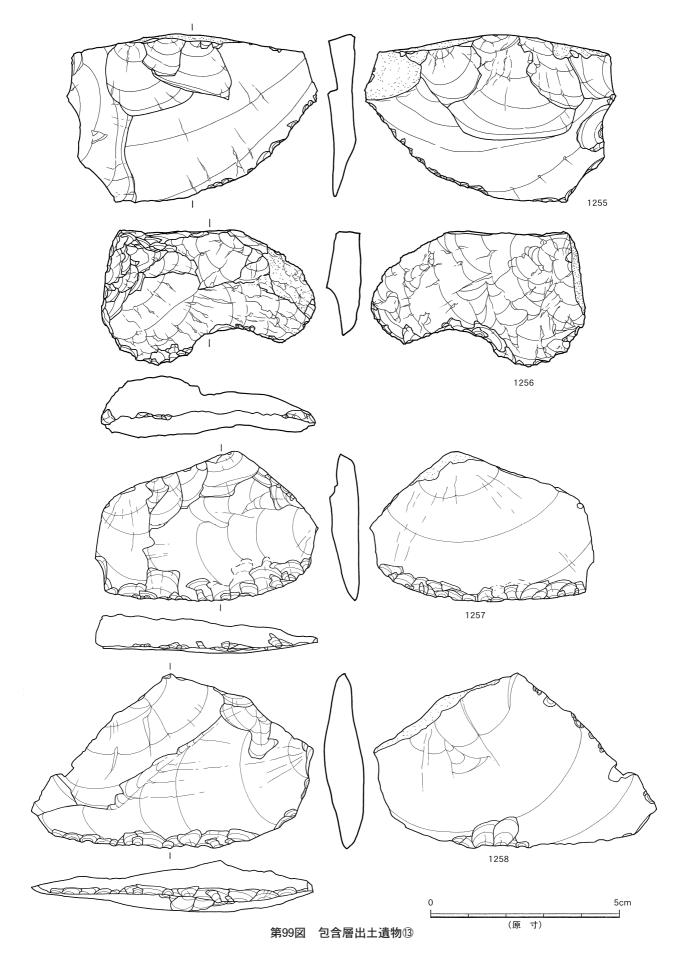


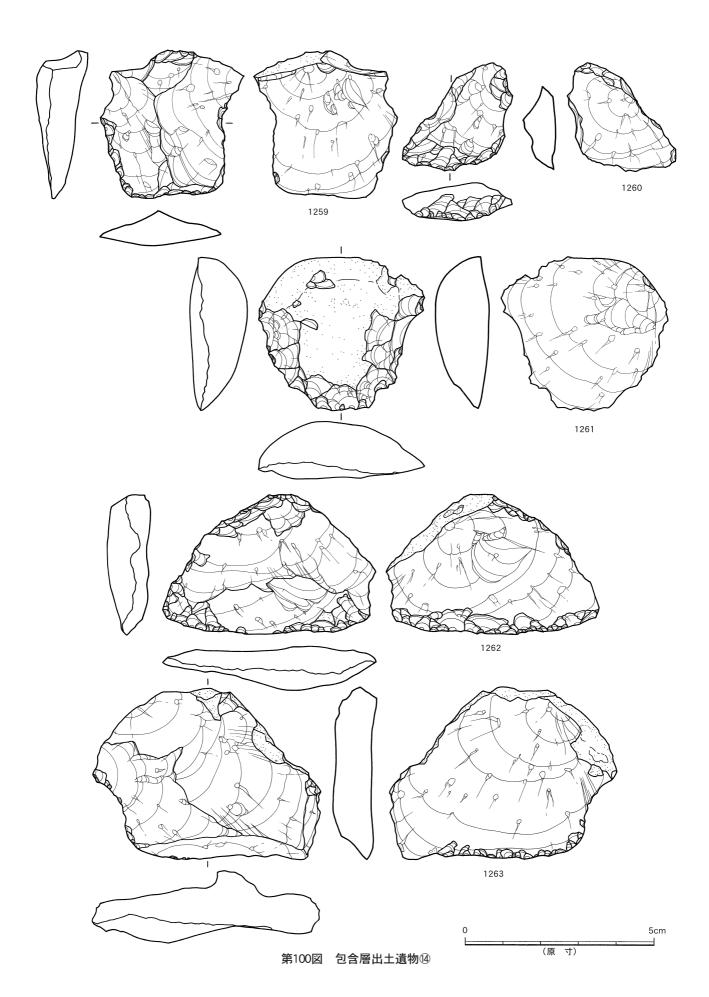
-111-

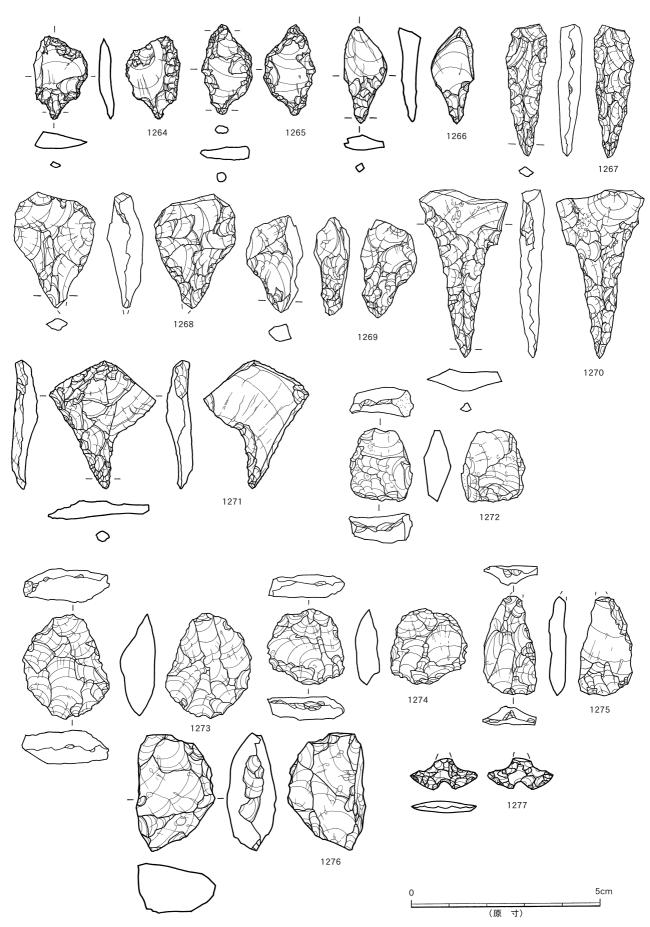




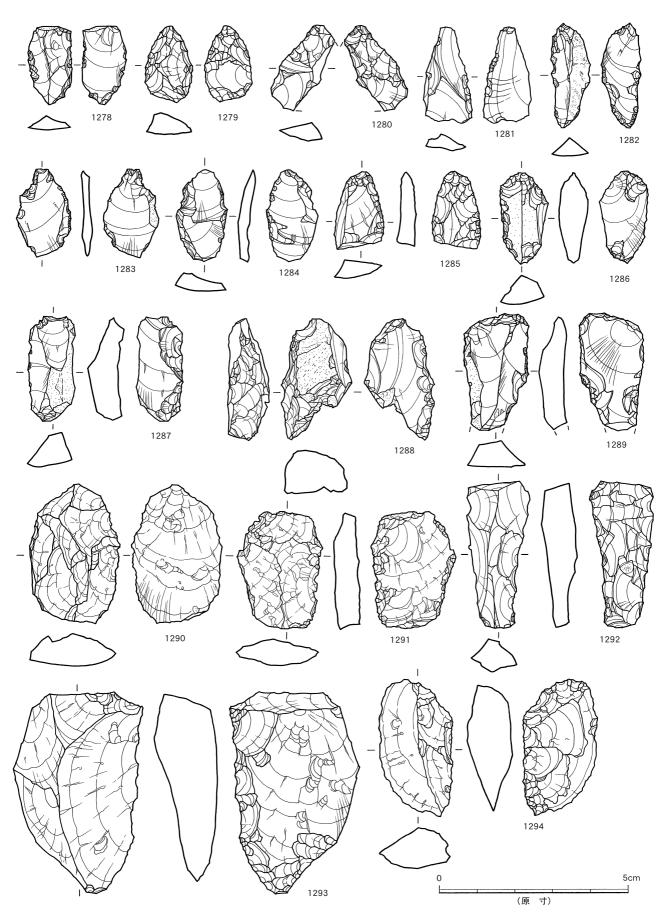
第98図 包含層出土遺物⑫



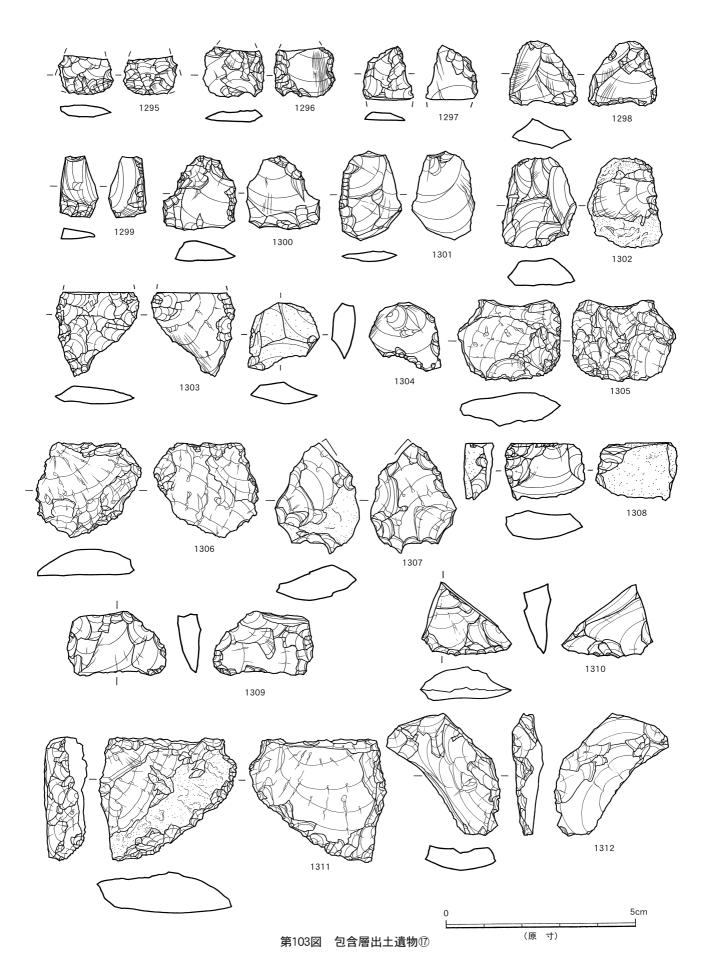


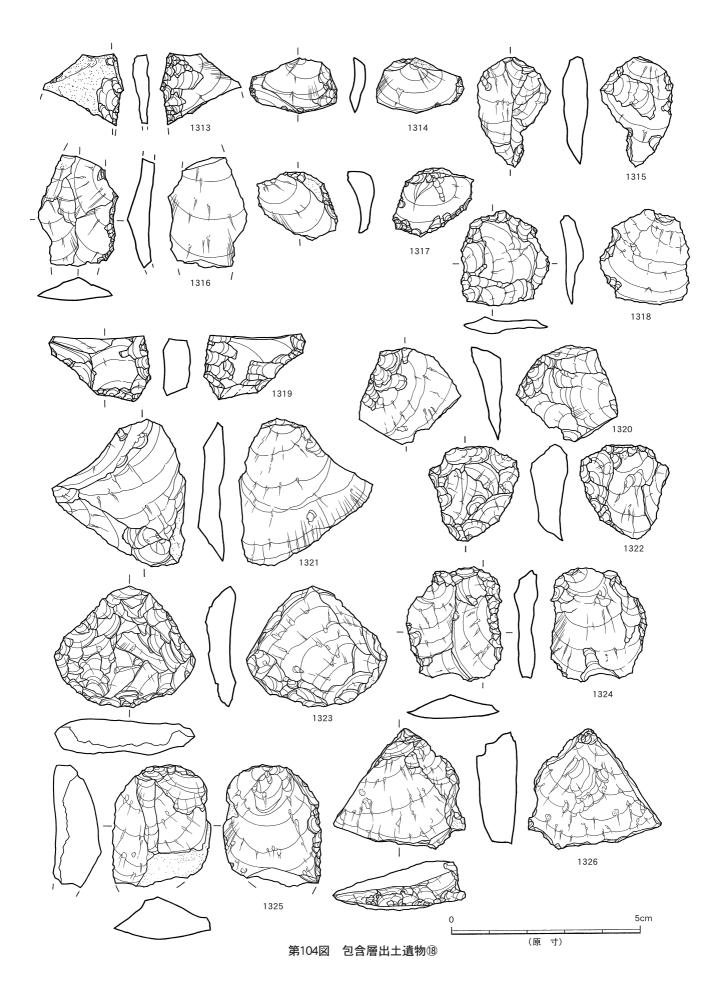


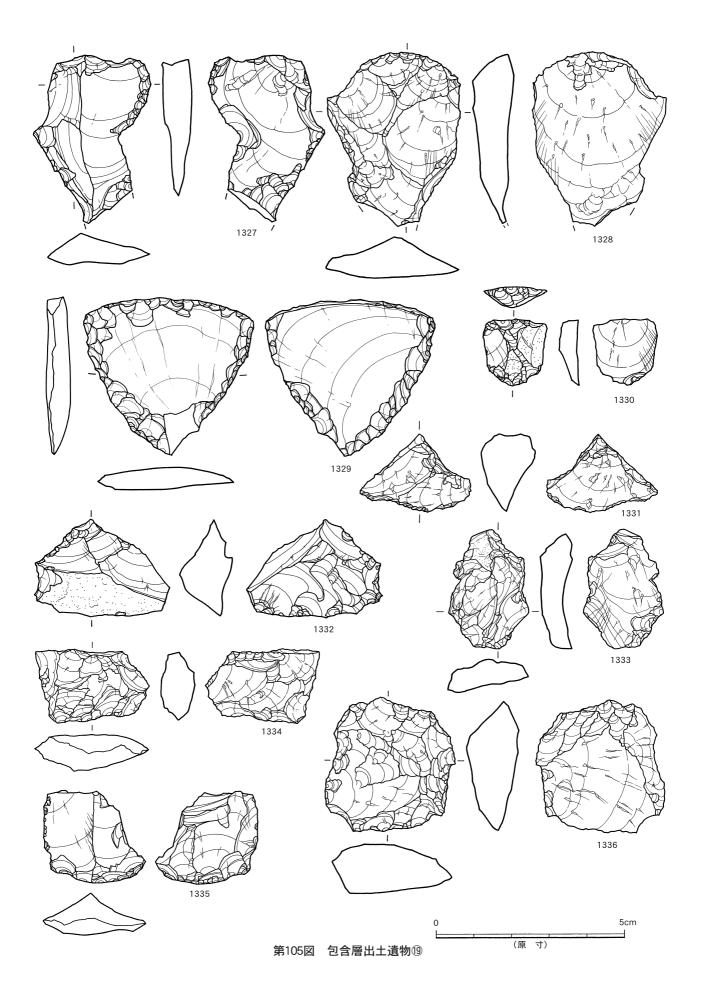
第101図 包含層出土遺物⑤

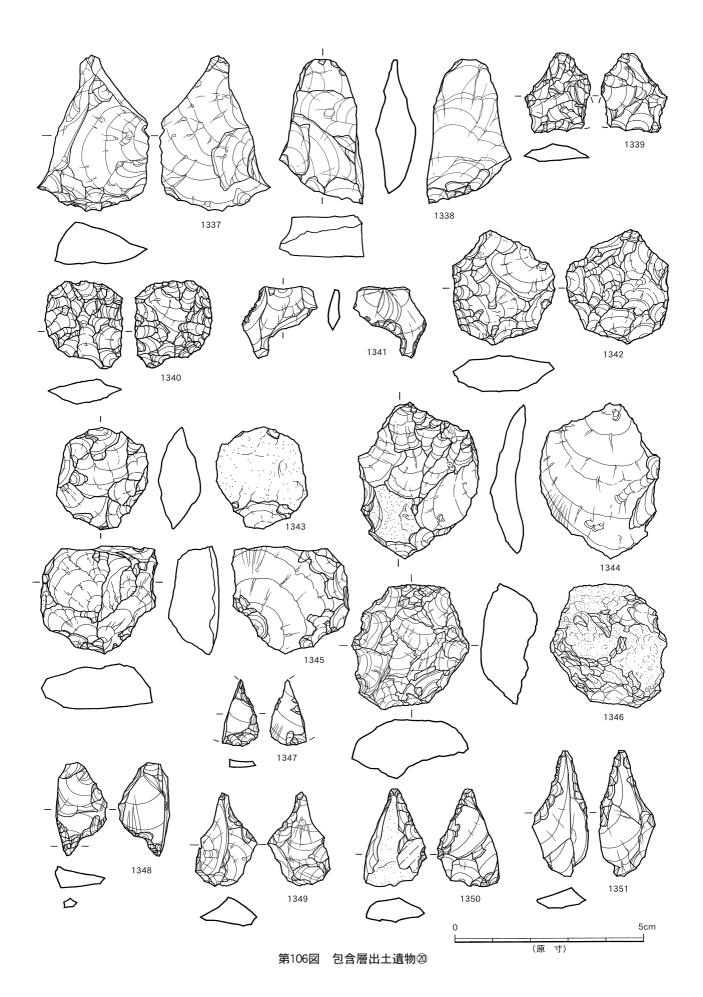


第102図 包含層出土遺物⑩

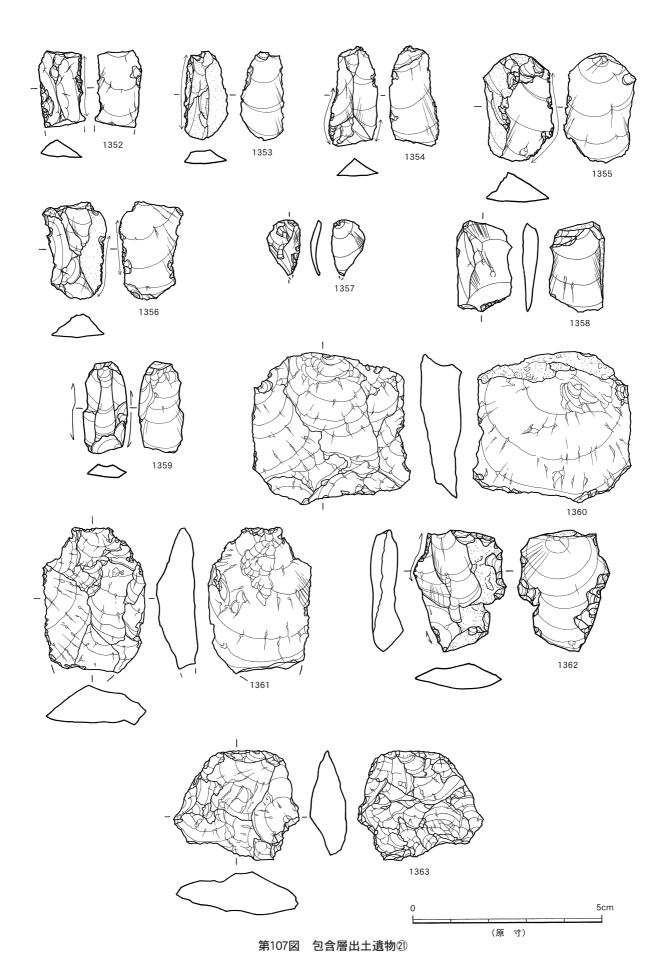




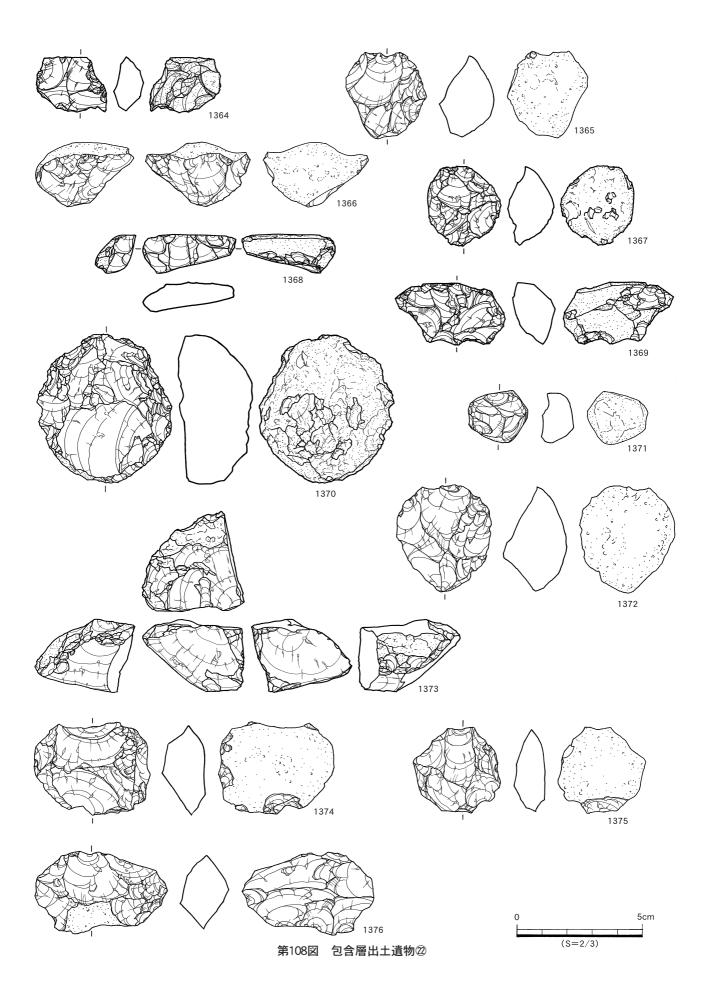


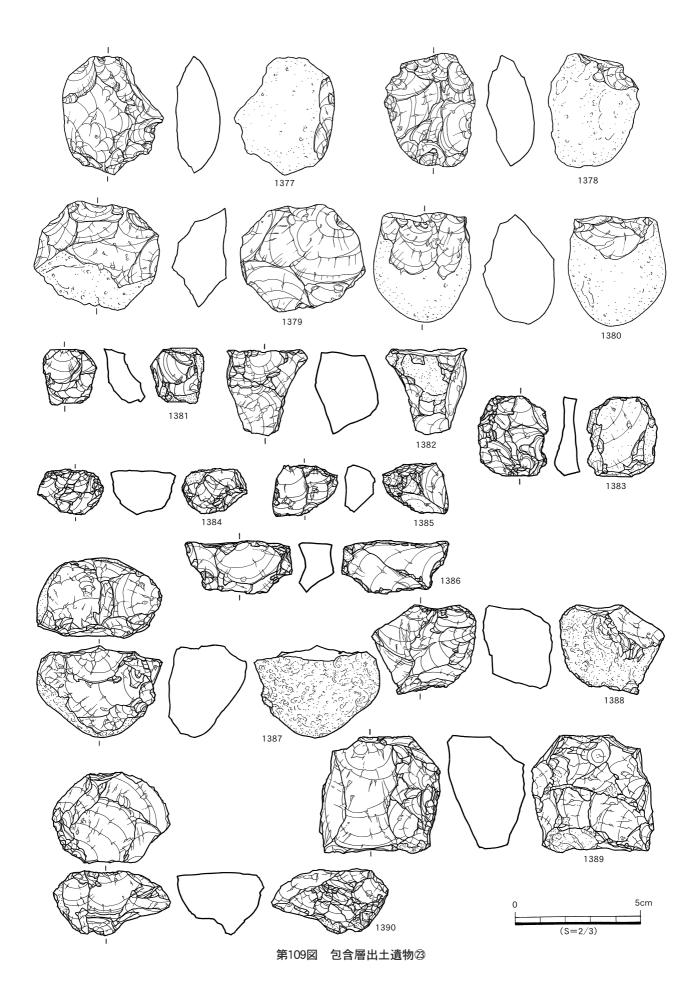


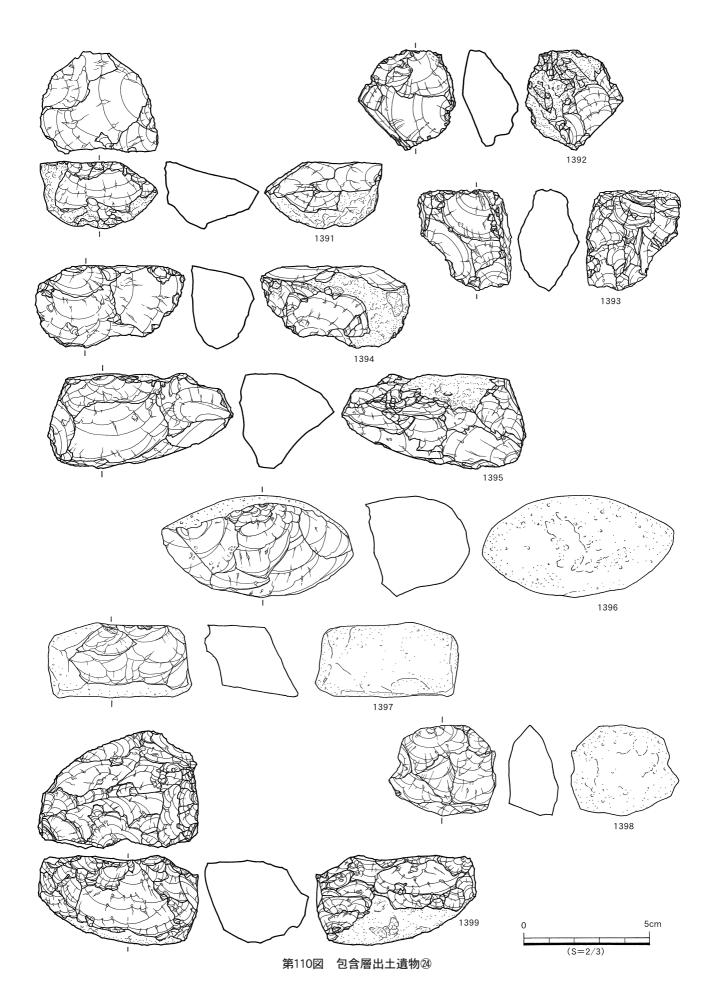
-121-

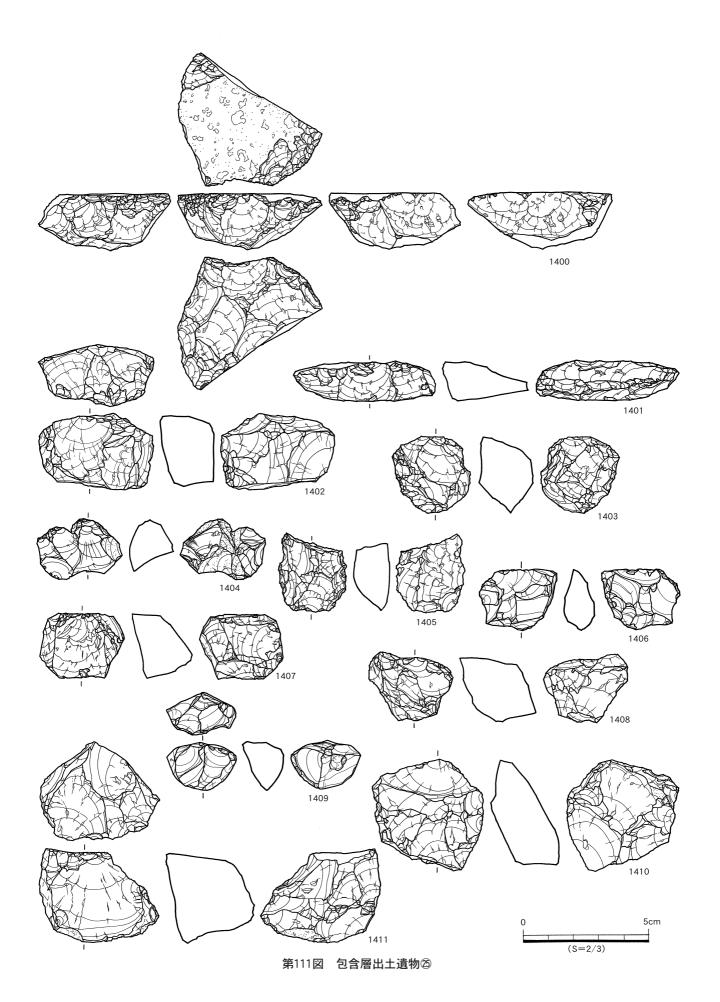


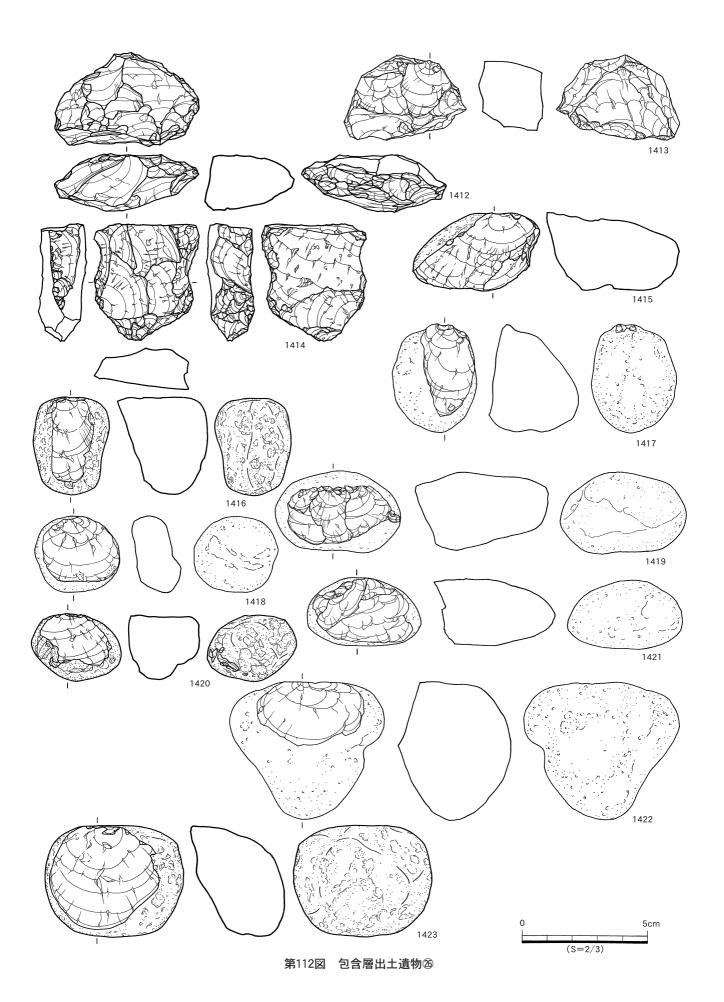
-122-



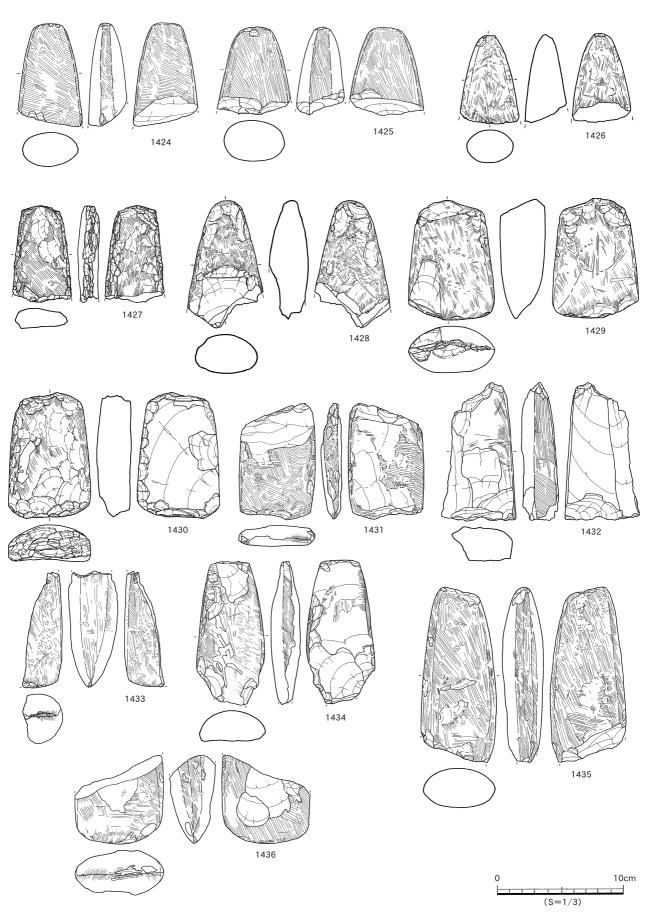




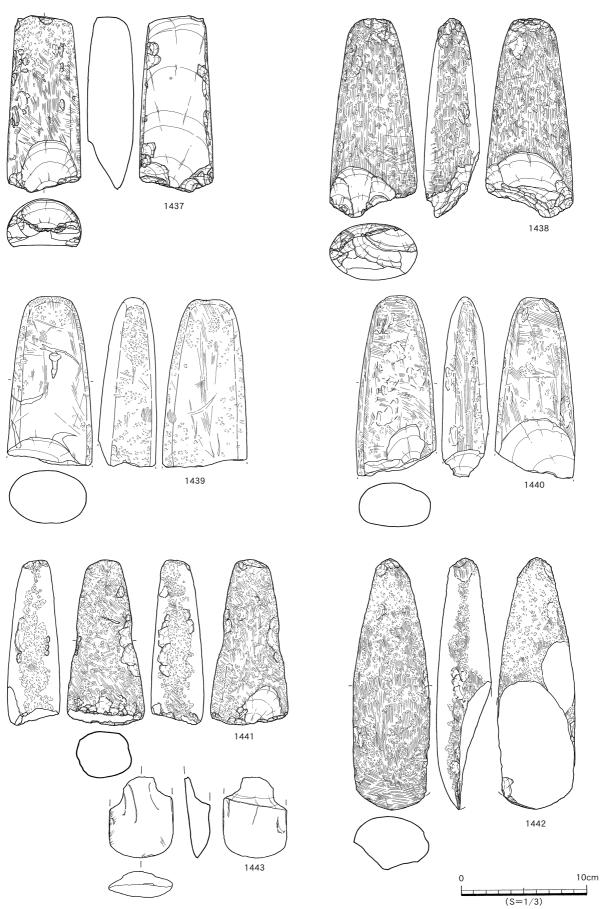




- 127 **-**



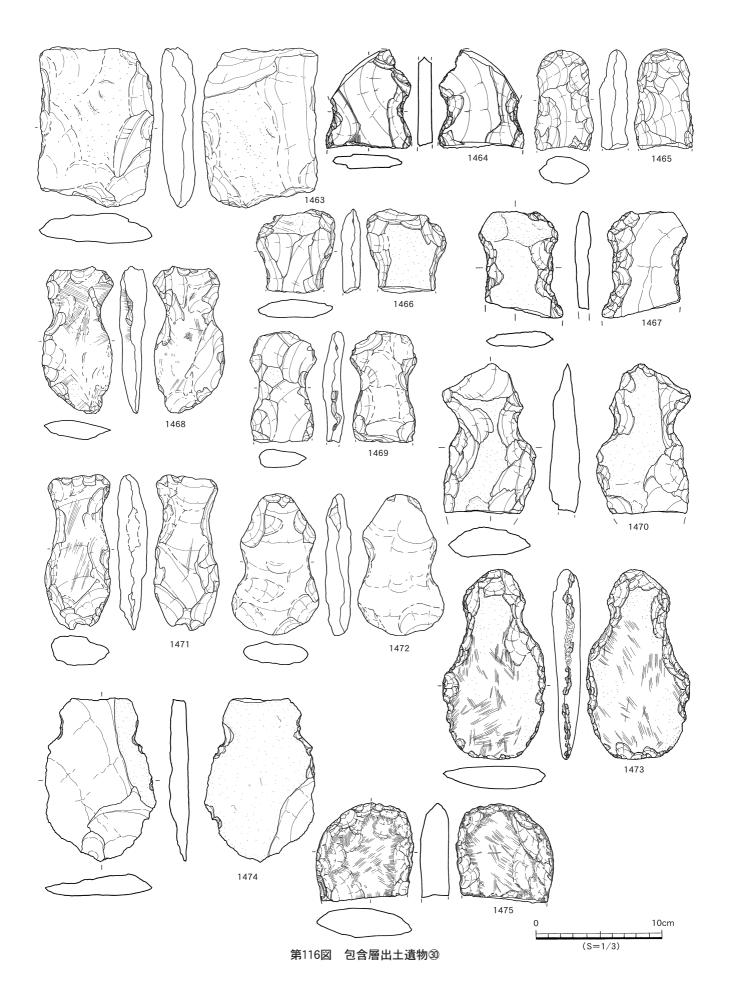
第113図 包含層出土遺物②

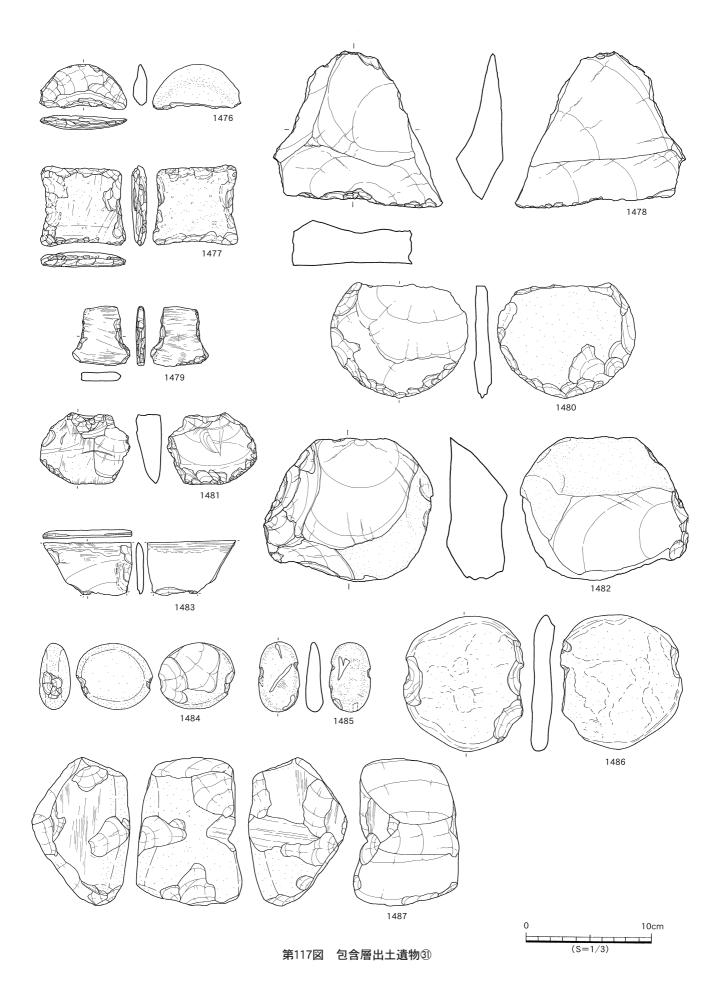


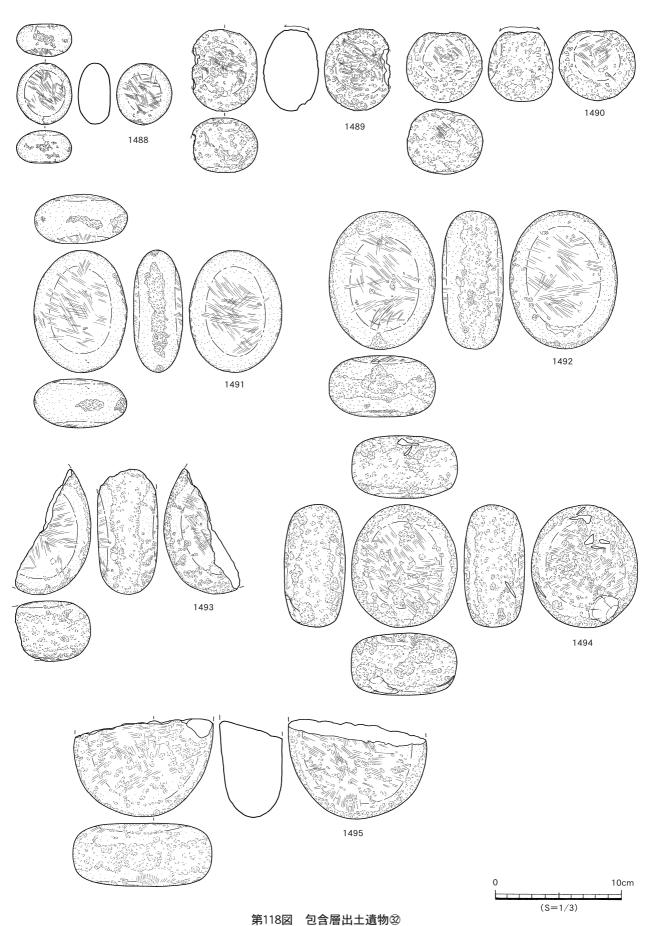
第114図 包含層出土遺物28

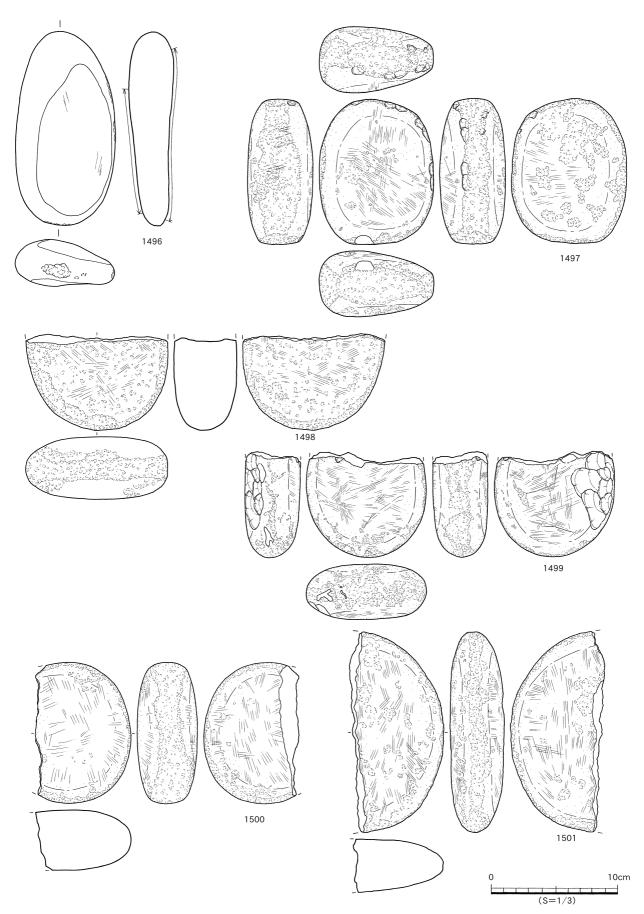


第115図 包含層出土遺物②

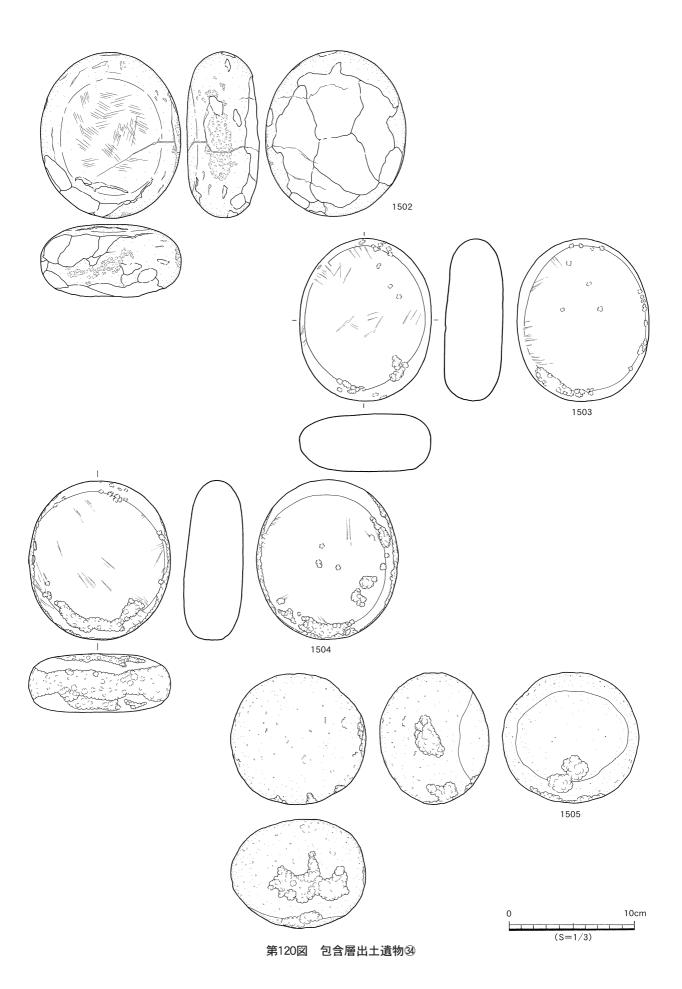




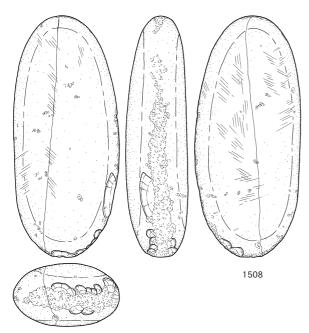


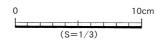


第119図 包含層出土遺物③









サイドブレイド (第107図1352~1356)

5点出土し、図化した。鈴桶技法のように縦長剥片を 作りだしており、それぞれ使用痕と思われる微細剥離痕 がある。石材としては、腰岳産、桑ノ木津留産、霧島系 と思われる黒曜石が使用されている。

微細剥離痕剥片 (第107図1357~1363)

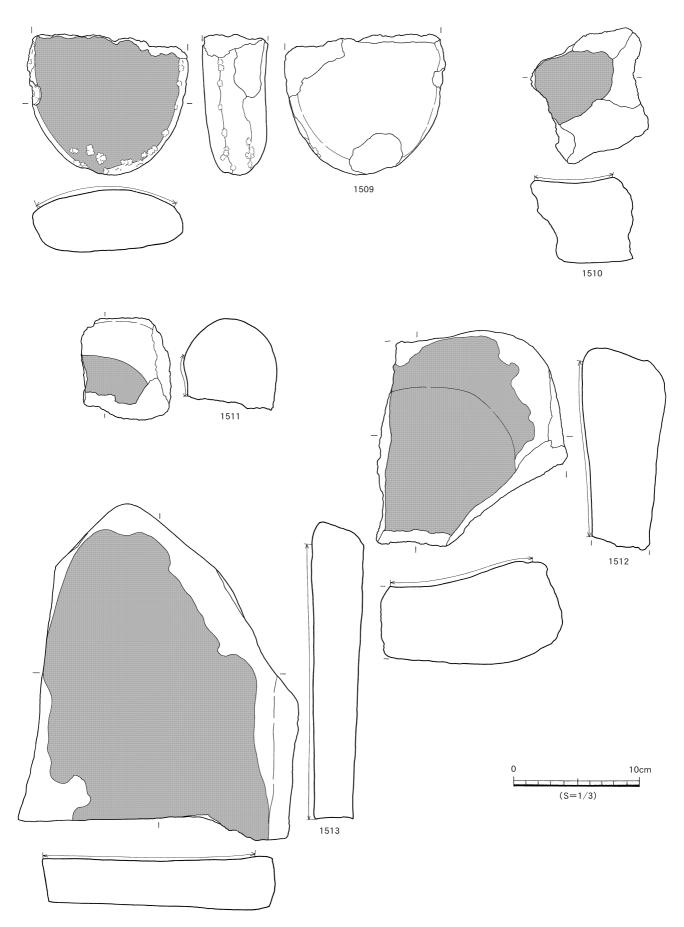
365点出土し、7点図化した。剥片の鋭利な縁辺に使用痕と考えられる微細剥離が認められるものを分類した。1358・1359・1362は先述のサイドブレイドと類似しており、石材も腰岳産や桑ノ木津留産に類似する黒曜石である。

石核 (第108図~第112図1364~1423)

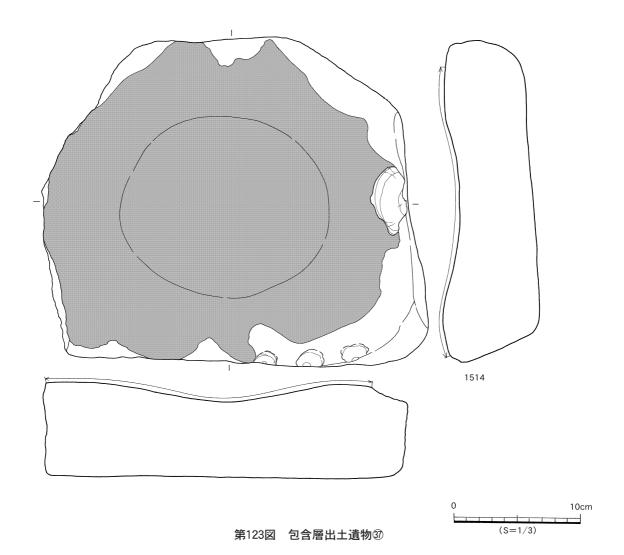
計1108点出土し、60点を図化した。ほとんどが黒曜石で、そのうち日東産のものが大半をしめる。 I 類は自然面を有するもの、Ⅱ類は自然面を有しないもの、Ⅲ類は原石の形状を残すものとし分類した。また剥離の状態をもとに、周辺から中心にむかって剥ぐもの(a)、分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から剥いだもの(b)、剥離方向に法則性が見いだせないもの(c)とし分類した。

I a 類 (7点 1364~1370) I b 類 (1点 1373)
I c 類 (29点 1371, 1372, 1374~1400)
Ⅱ b 類 (2点 1401, 1402) Ⅱ c 類 (12点 1403~1414)
Ⅲ類 (9点 1415~1423)

第121図 包含層出土遺物等



第122図 包含層出土遺物36



磨製石斧(第113図~第115図1424~1450)

38点出土し、そのうち27点を図化した。1424~1443は 器厚が厚く、重量感があるものである。 刃部は蛤の形態を有し、器形は長方形状を呈するものを分類した。1444 は基部がやや細くなっており、 刃部との境に肩を有している。1445~1450は比較的小型で細長く加工されたものである。

打製石斧 (第115・116図1451~1475)

50点出土し、そのうち25点を図化した。1451~1454は 器厚が比較的厚い。1455~1464は明瞭な抉りを持たず長 方形の器形を呈するものを分類した。1465~1474は基部 と刃部を境界作る抉り部を持ち、ラケット状を呈してい る。1475は欠損のため、形は不明である。

礫器 (第117図1476~1482)

32点出土し、そのうち7点を図化した。1476は下縁部に刃部調整が施され、横長長楕円状の器形を呈する。1477は正方形状で、四辺を両面から打ち欠いている。1478は一辺に刃部調整が施され、器形は三角形状を呈しており、刃部整形は直線的である。1480~1482は円形を呈してお

り, 周縁部に調整を施している。

擦切状石器 (第117図1483)

2点出土し、1点を図化した。

石錘 (第117図1484~1487)

4点出土し、図化した。1484~1486は扁平な小型円礫を素材とし、簡単な抉り部を作出している。1487は厚みのある自然礫を素材とし、上下側面に抉り部がある。

磨石類 (第118図~第121図1488~1506)

磨石とみられるものは計108点出土し,19点を図化した。 1488~1490は比較的小礫を素材とし,全面的に磨面を有 するとともに,側縁部には敲打痕も見られる。

敲石 (第121図1507, 1508)

蔵石とみられるものは32点出土し、そのうち2点を図化した。1507は多くの面を磨面・敲面として用いている。1508は棒状の円礫を用いており、下端部に敲打痕が見られる。

石皿 (第122·123図1509~1514)

66点出土し、そのうち6点を図化した。

2 弥生時代の調査

(1)調査の概要

弥生時代の調査は、北側調査区を中心に進めていった。 包含層の調査は、他の時代時期と同様Ⅱ層ないしIV層で 行っているが、層位が良好に堆積残存している部分では、 Ⅲ層から遺物は出土している。

遺構検出は、アカホヤ火山灰層(VI層)で検出を行った。ただし、遺跡北側と南側とでは層の堆積等が異なっており、北側では黄褐色砂礫層(VII層)上面で遺構を捉えている。

遺構の調査は、北側調査区の土坑群を中心に進めて いった。これらの遺構は、検出段階での時期判断は行え ず、農道境で断面上に検出された土坑19号と共に出土し た中期の壺(6)を手がかりに、同一色の埋土のものを 弥生時代と想定して遺構の調査を進めていった。その過 程で、土坑34号から武器形青銅器が出土するなど、遺構 のプランや埋土の状況が類似する密接した土坑群の大半 が当該期に位置づけられることが判明した。このため, これらの土坑群は集団墓の可能性を視野に入れ, 埋土中 に木棺の痕跡等が残されていないか留意していった。床 面に溝状のプランが見られたものについては、遺構を断 ち割るなどして記録作業を進め、また、掘り上げられた 埋土は土嚢袋に入れ、調査期間中及び整理作業の段階で すべてふるいがけを行い、微細遺物の検出に努めていっ た。しかし、人骨や微細遺物の出土は確認できなかった。 なお、2基の土坑 (19号・37号) では、リン・カルシウ ム分析を実施した。

包含層の調査は、大型の破片等はトータルステーションで出土地点の記録を行い、小破片はグリッド毎に一括取り上げを行った。甕や壺等細分ごとの出土状況は、第153図の通りである。包含層中から破砕鏡が出土した点や、抉入柱状片刃石斧が古墳時代の竪穴住居跡内から出土した点など、多くの部分で後世の攪乱あるいは削平を受けていることがわかる。その中でも、甕Ⅳ類はこの地方ならではのもので、口縁部から胴部まで残存している資料等もあり貴重なものとなった。

(2)遺構

土坑

弥生に該当すると思われる土坑については、平面形態と床面への溝状の掘り込みの有無を基に、長方形溝あり(6~9,17,27,34,37,48,49,51),・方形、略方形溝あり(33,39),楕円、略楕円形溝あり(13,35,41・42),長方形(1,3,10~12,19,21・22,24~26,30・31,38,40,44~47,50,52),方形、略方形(18,23,28),楕円、略楕円形(2,5,15,20,32,36),不定形(4,14,29,43),円形(16)の8類に分類した。

土坑 6 号 (第130図)

L-12区、 IMM 上面で検出された。平面形態は長軸 131cm×短軸100cmの長方形を呈する。床面での長軸,短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は,にぶい暗黄褐色砂壌土が主体である。検出面からの深さは35cmで床面はほぼフラットで,壁面はほぼ垂直に立ち上がる。短軸側壁面下部に沿って溝状の浅い掘り込みが見られる。長軸方向は西に88.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑7号(第130図)

土坑8号(第131図)

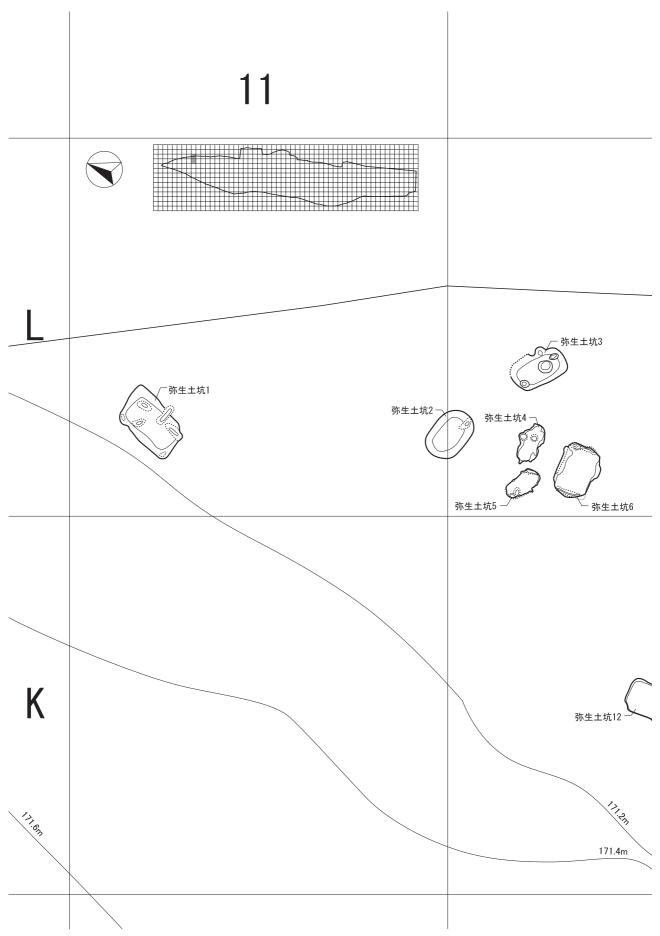
L-12区、 IM層上面で検出された。平面形態は長軸 107cm×短軸75cmの略長方形を呈する。床面での長軸は 83cm, 短軸は63cmを測る。埋土は暗黄褐色砂壌土を主体とする。検出面からの深さは15cmで壁面の立ち上がりははっきりしている。南側短軸側壁下部には浅い溝状の掘り込みが見られ、西側長軸側壁付近には2カ所のピット状の落ち込みが見られる。長軸方向は東に12度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑 9号 (第131図)

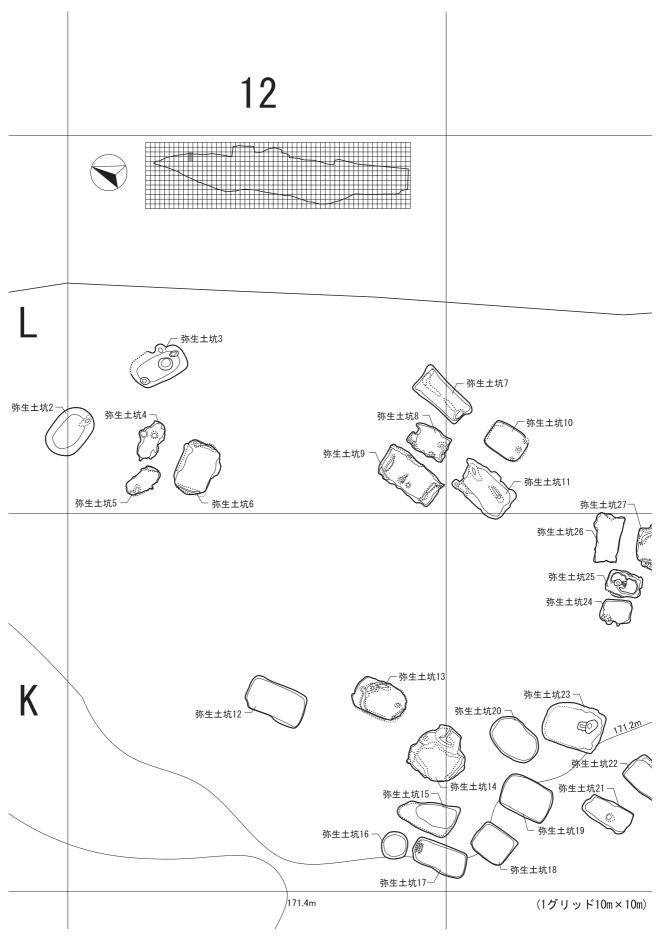
L-12区、個層上面で検出された。平面形態は長軸 172cm×短軸87cmの長方形を呈する。床面での長軸は 160cm,短軸は72cmを測る。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土を主体とし、側壁よりに黒灰色砂壌土が堆積する。検出面からの深さは20cmで立ち上がりははっきりしている。両短軸側壁近くには壁に平行して浅い溝状の掘り込みが見られる。また、床面中央やや西寄りに2カ所のピット状の掘り込みも確認できる。長軸方向は東に16度振れる。遺物が2点出土した。

土坑17号 (第131図)

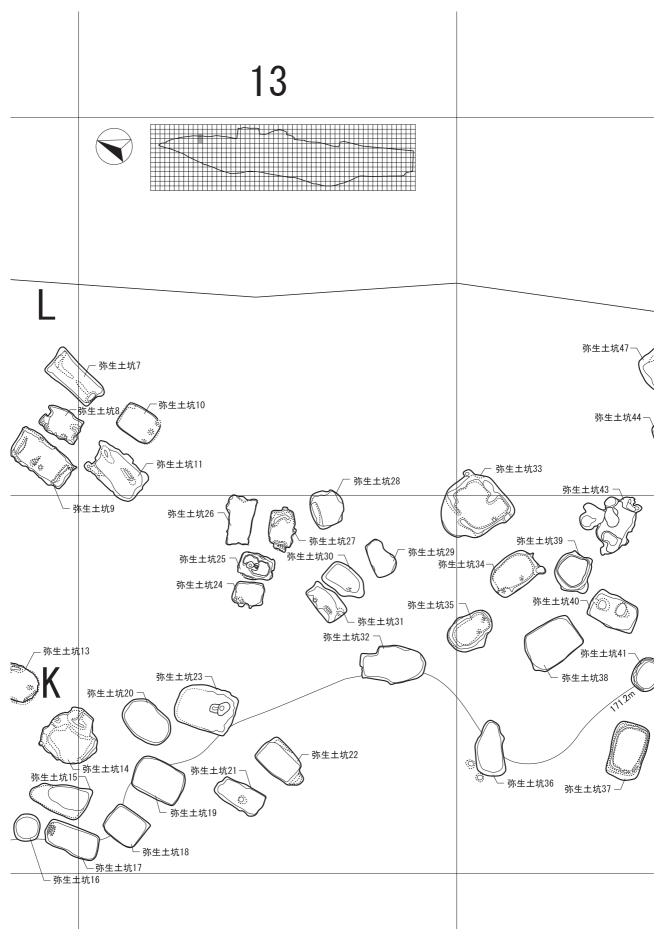




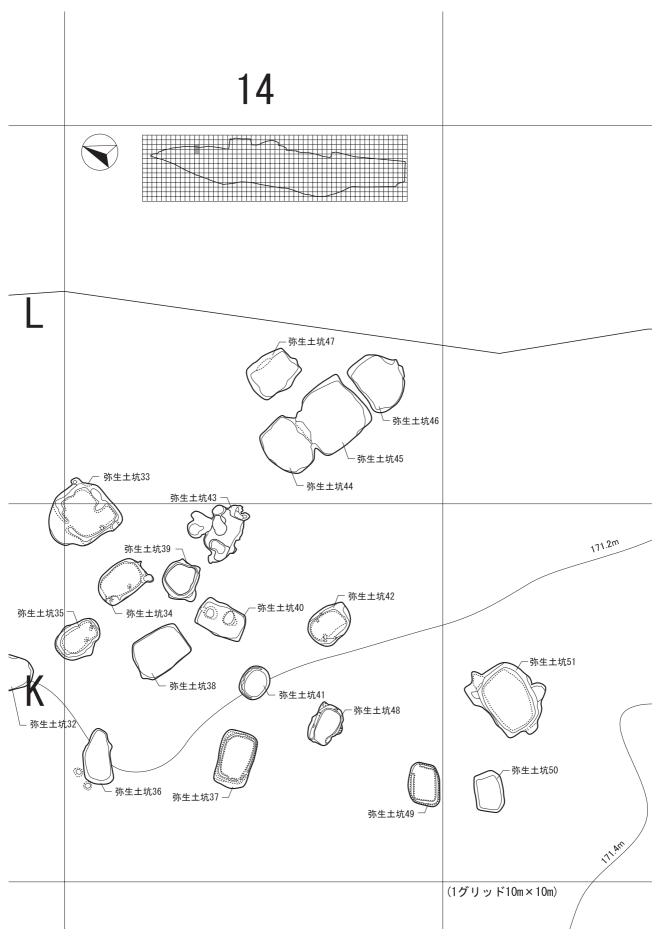
第125図 遺構配置図②



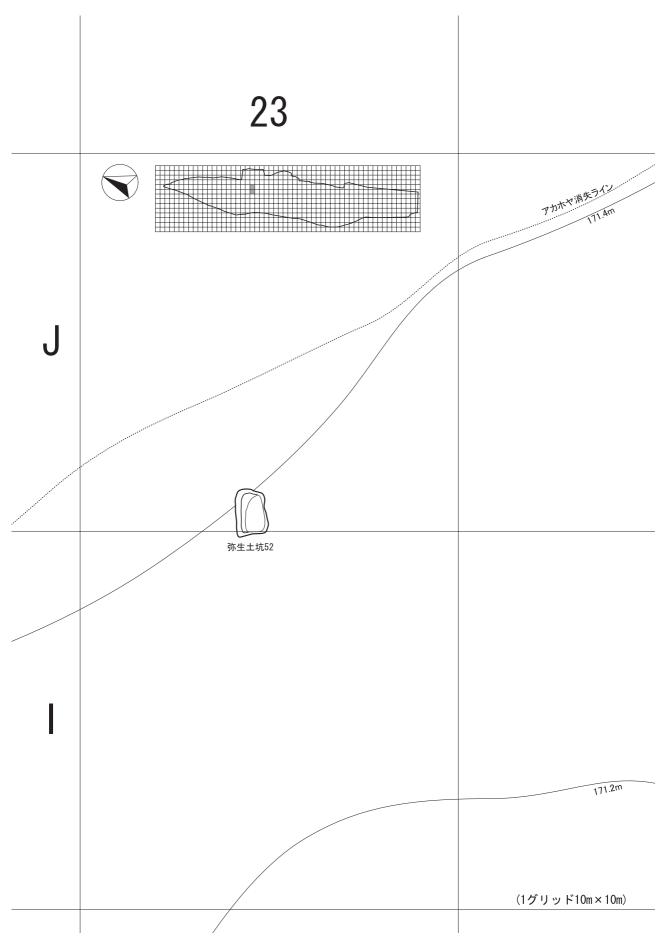
第126図 遺構配置図③



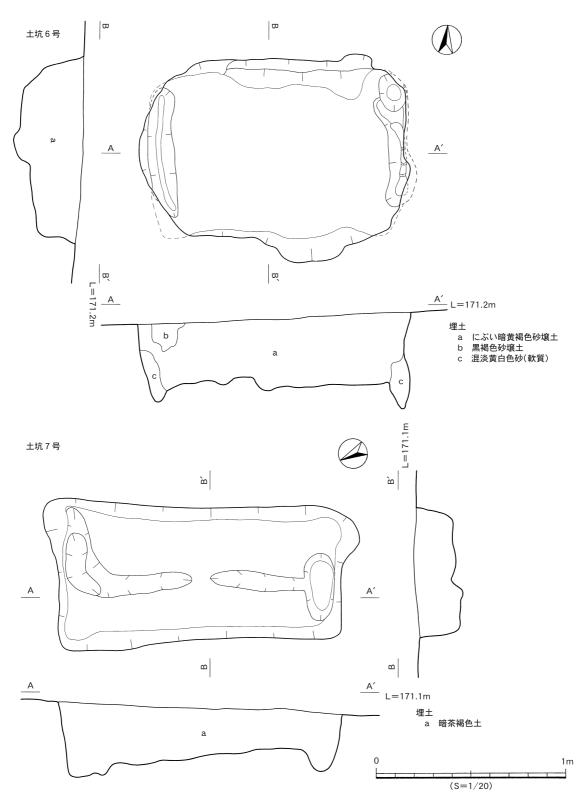
第127図 遺構配置図④



第128図 遺構配置図⑤



第129図 遺構配置図⑥

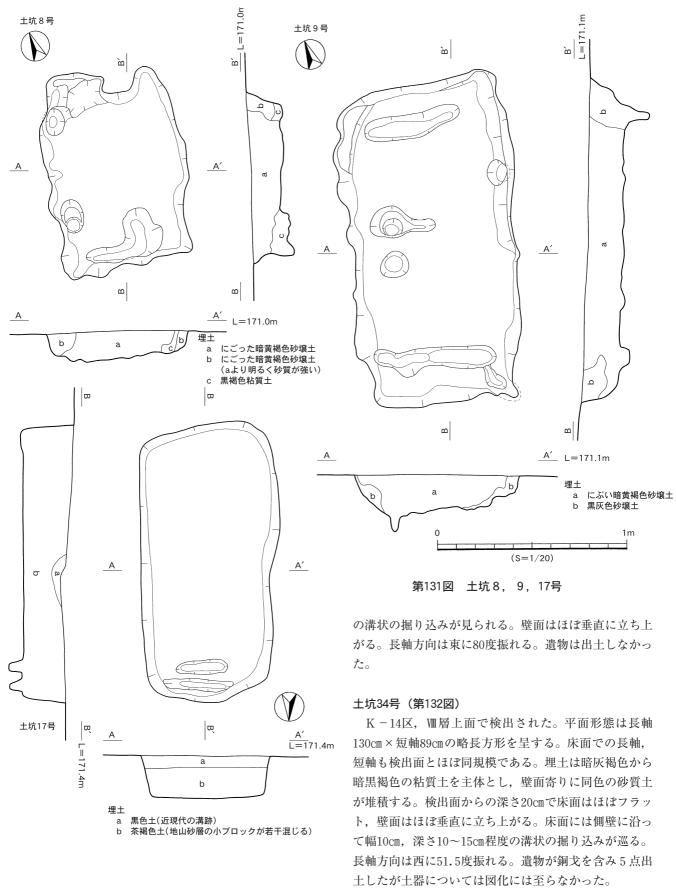


第130図 土坑 6, 7号

り込みが見られる。埋土は茶褐色土の単一である。長軸 方向は東に4度振れる。遺物が7点出土したが図化には 至らなかった。

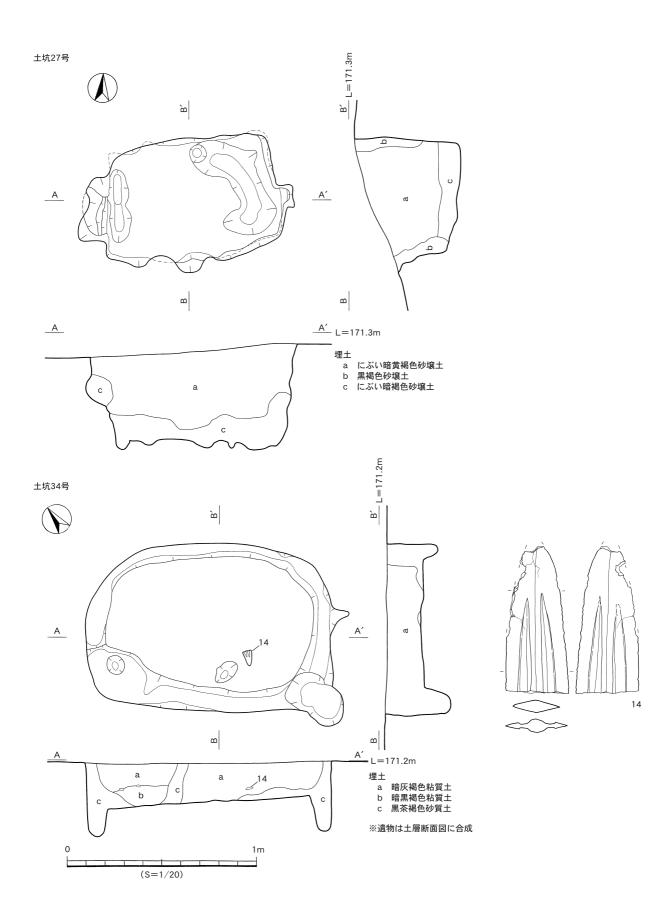
土坑27号 (第132図)

K-13区、 III 層上面で検出された。平面形態は長軸 110cm×短軸71cmの長方形を呈する。床面での長軸,短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はにぶい暗黄褐色砂

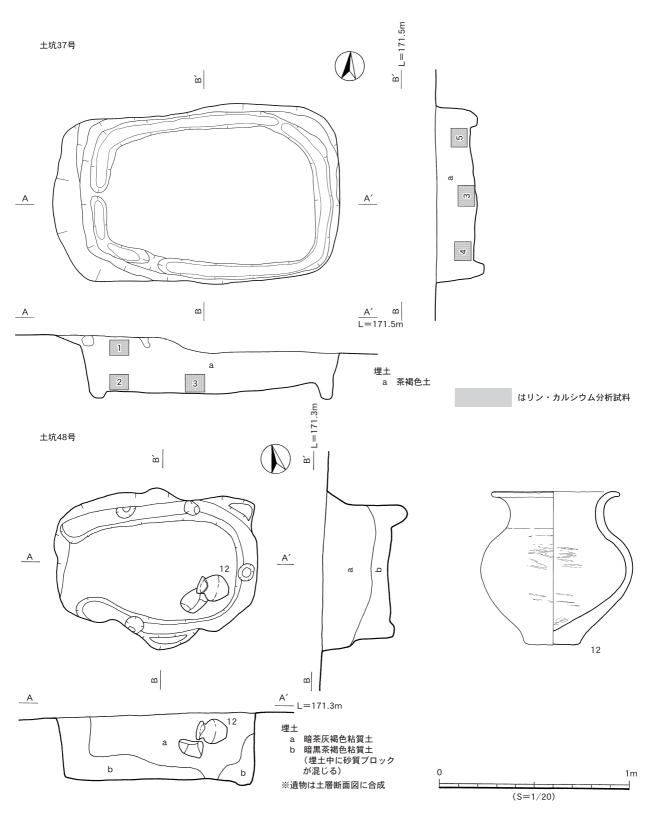


壌土を主体とし長軸側壁よりに黒褐色砂壌土が堆積する。 検出面からの深さ50cmである。床面東よりには不定形の 浅い落ち込み,西側側壁下部には壁に沿って深さ5cm程

銅戈は、床面から6cmほど浮いた位置から、切っ先を 南に向けた状態で出土した。



第132図 土坑27, 34·34号遺物出土状況



第133図 土坑37, 48·48号遺物出土状況

土坑37号 (第133図)

K-14区、W層上面で検出された。平面形態は長軸 152cm×短軸93cmの長方形を呈する。床面での長軸は 128cm、短軸は87cmを測る。埋土は茶褐色土の単一であ る。検出面からの深さ30cm、床面はほぼフラットで壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。床面には側壁に沿って幅10cm,深さ $3\sim8cm$ の溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は東に87度振れる。遺物は出土しなかった。また本土坑については図中 $1\sim5$ において埋土のサンプリングを行いリン・カル分析を行った。詳細は後述する。

土坑48号(第133図)

K-14区、 IIM E上面で検出された。 平面形態は長軸 107cm × 短軸86cm の長方形を呈する。 床面での長軸は 100cm, 短軸69cmを測る。 埋土は暗灰茶褐色粘質土を主体とする。 検出面からの深さ34cmで床面はほぼフラット, 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。 床面には西側を除く側壁下部に、幅10cmほどの浅い溝状の掘り込みが見られる。 また溝状掘り込み内に径8cm程度のピット状の小さな掘り込みが4カ所見られる。 長軸方向は西に81.5度振れる。 遺物は遺構埋土内中位付近に完形に復元できる小ぶりの 壺形土器が出土した。

土坑49号 (第134図)

K-14区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸 110cm×短軸83cmの長方形を呈する。床面での長軸は 104cm,短軸は74cmを測る。埋土は暗黄褐色砂質土の単一である。検出面からの深さ27cmで床面はほぼフラット,壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には北東側コーナーを除き、側壁下部に幅10cm,深さ5cm程度の溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は東に72度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑51号 (第134図)

K-15区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸205cm×短軸139cmの長方形を呈する。床面での長軸は175cm,短軸は118cmを測る。埋土は暗褐色砂質土の単一である。検出面からの深さ12cmで床面はほぼフラットで、壁面はやや緩やかに立ち上がる。床面には側壁下部に幅15cm~20cm,深さ5cm程度の溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は東に38.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑33号(第135図)

L-13/14区、 TMB上面で検出された。平面形態は長軸179cm×短軸152cmの方形から略方形を呈する。 床面での長軸は160cm, 短軸は135cmを測る。 埋土は暗灰褐色から暗黒褐色の粘質土を主体とし、壁面寄りに同色の砂質土が堆積する。 西側を除く側壁下部には深さ10cmほどの溝状の掘り込みが巡る、 西側は側壁から30cmほど内側に溝状の掘り込みが見られる。 検出面からの深さ23cmで床面はほぼフラットで、壁面の立ち上がりははっきりしている。 長軸方向は東に38度振れる。 遺物は出土しなかった。

土坑39号(第135図)

K-14区、W層上面で検出された。平面形態は長軸 106cm×短軸95cmの略方形を呈する。床面での長軸、短軸はともに95cmを測る。埋土は暗茶灰褐色から暗黒茶褐 色の粘質土である。検出面からの深さ35cmで、床面はほぼフラット、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には側壁に沿って幅10cm、深さ $7\sim10$ cmほどの溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は西に63.5度振れる。遺物が4点出土したが図化には至らなかった。

土坑13号 (第136図)

K-12区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸 138cm×短軸92cmの楕円形を呈する。床面での長軸,短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土を主体とし,短軸側壁よりに灰黒褐色砂壌土が堆積する。検出面からの深さ25cmである。北側短軸側壁近くと,西側,南側側壁下部に沿って溝状の浅い掘り込みが見られる。長軸方向は東に4度振れる。遺物が1点出土したが図化には至らなかった。

土坑35号 (第136図)

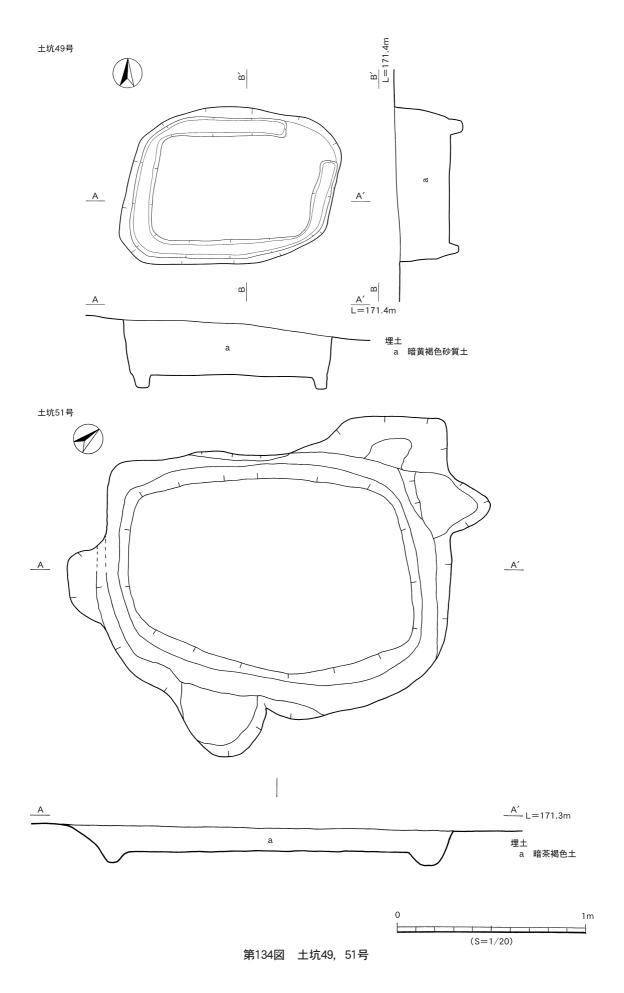
K-14区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸 128cm×短軸98cmの楕円形を呈する。床面での長軸は 114cm,短軸は77cmを測る。埋土は暗茶灰褐色から暗黒茶褐色の粘質土を主体とし、壁面寄りに暗黒褐色砂質土が堆積する。検出面からの深さ32cmで壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼフラットで、側壁に沿って幅10~15cm,深さ5~10cmの溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は西に52度振れる。遺物は2点出土したが図化には至らなかった。

土坑41号 (第136図)

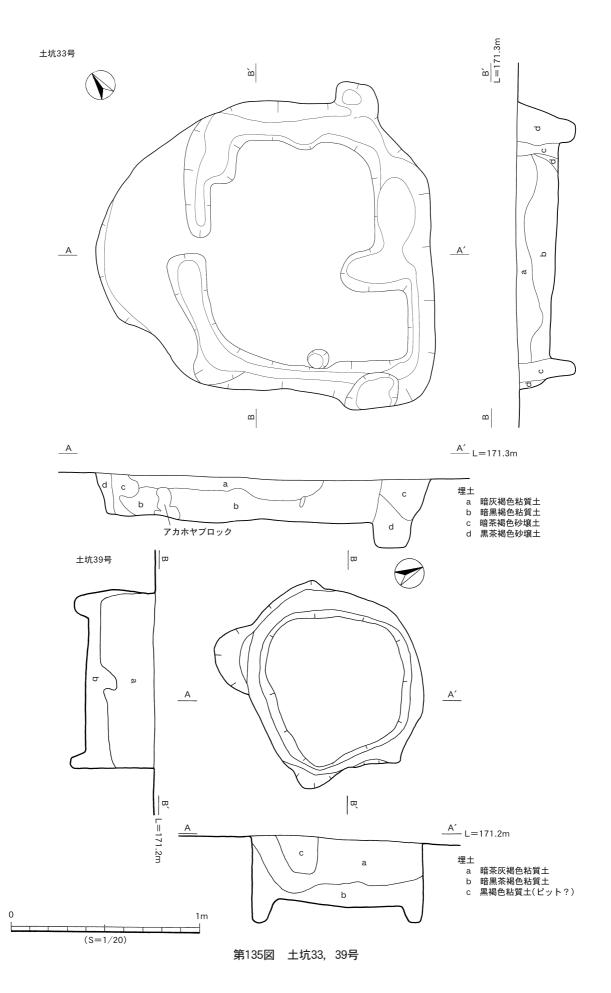
K-14区、W層上面で検出された。平面形態は長軸90cm×短軸73cmの楕円形を呈する。床面での長軸は75cm,短軸は63cmを測る。埋土は黄褐色粘土ブロックが少し混じる茶褐色土の単一である。検出面からの深さ8cmで、床面はほぼフラット、壁面は緩やかに立ち上がる。側壁北側半分に沿って、幅5cm程のごく浅い溝状の掘り込みが見られる。長軸方向は西に85度振れる。遺物は出土しなかった。

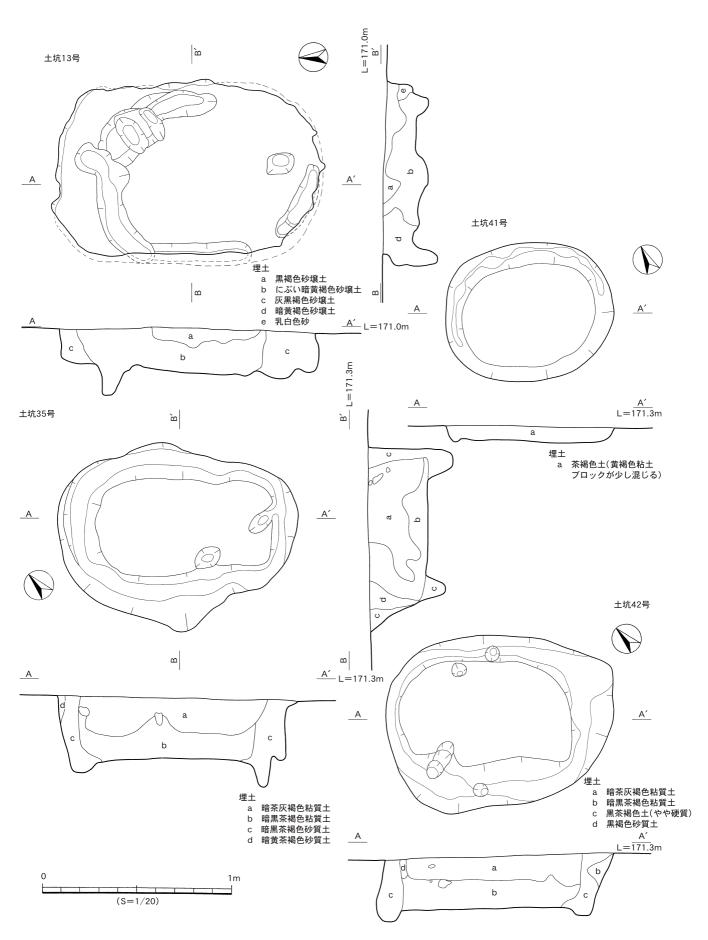
土坑42号(第136図)

K-14区、 122cm × 短軸91cm の楕円形を呈する。床面での長軸は 110cm, 短軸は77cmを測る。埋土は暗茶灰褐色から暗黒 茶褐色の粘質土が主体となり、側壁寄りにやや硬質な黒 茶褐色土が堆積する。検出面からの深さ27cmで、床面は ほぼフラット、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には 壁面に沿って幅10cmほどのごく浅い溝状の掘り込みが巡る。また長軸方向中央付近の溝内部に径5cm, 深さ10~15cmほどのピット状の掘り込みも見られる。長軸方向は



- 151 -





第136図 土坑13, 35, 41, 42号

西に56度振れる。遺物が6点出土し、内1点を図化した。

土坑1号(第137図)

L-11区、 IM層上面で検出された。平面形態は長軸 175cm×短軸110cmの長方形を呈する。床面での長軸は 147cm,短軸は75cmを測る。埋土は暗茶褐色土の単一である。検出面からの深さ35cmである。長軸方向は東に28 度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑 3 号 (第137図)

L-12区、個層上面で検出された。平面形態は長軸 146cm×短軸92cmの長方形を呈する。床面での長軸は87cm, 短軸は60cmを測る。埋土は暗褐色砂質土の単一である。 検出面からの深さは18cmで、床面はフラットで中央に径 40cm深さ50cmのピットが見られる。長軸方向は西に44.5 度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑10号 (第138図)

L-13区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸 106cm×短軸80cmの長方形を呈する。床面での長軸,短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は黒褐色土の単一である。検出面からの深さは45cmで、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面南側に深さ8cm~15cmのピットが3カ所短軸方向に並ぶようにみられる。長軸方向は東に14度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑11号 (第138図)

L-13区、 IM層上面で検出された。平面形態は長軸 153cm×短軸100cmの長方形を呈する。床面での長軸は 138cm,短軸は72cmを測る。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土の単一である。検出面からの深さ38cmで壁面の立ち上がりははっきりしている。床面中央付近と北側短軸側壁付近に若干,埋土の落ち込みが見られる。長軸方向は東に20.5度振れる。遺物が1点出土したが図化には至らなかった。

土坑12号 (第139図)

K-12区、 III 層上面で検出された。平面形態は長軸 160cm×短軸86cmの長方形を呈する。検出面がかなり低いと考えられ、床面での長軸、短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は茶褐色土の単一である。検出面からの深さは8cmである。長軸方向は東に4.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑19号 (第139図)

K-13区、Ш層上面で検出された。平面形態は長軸 140cm×短軸98cmの長方形を呈する。床面は長軸で132cm、 短軸で89cmを測る。埋土は茶褐色土の単一である。検出面の最も高いところからの深さは48cmである。床面はほぼフラットで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に8.5度振れる。遺物は甕形土器底部、壺形土器胴部片、口縁部片が出土した。また本土坑については図中1~7において埋土のサンプリングを行いリン・カル分析を行った。詳細については後述する。

土坑21号 (第140図)

K-13区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸 130cm×短軸66cmの長方形を呈する。床面は長軸で122cm, 短軸で53cmを測る。埋土は暗褐色砂質土の単一である。検出面からの深さは34cmである。床面中央付近には径 20cm深さ5cmほどの円形の掘り込みが見られる。壁面の立ち上がりはほぼ垂直であるが南側壁面だけは緩やかな傾斜をなす。長軸方向は東に9.5度振れる。遺物が2点出土したが図化には至らなかった。

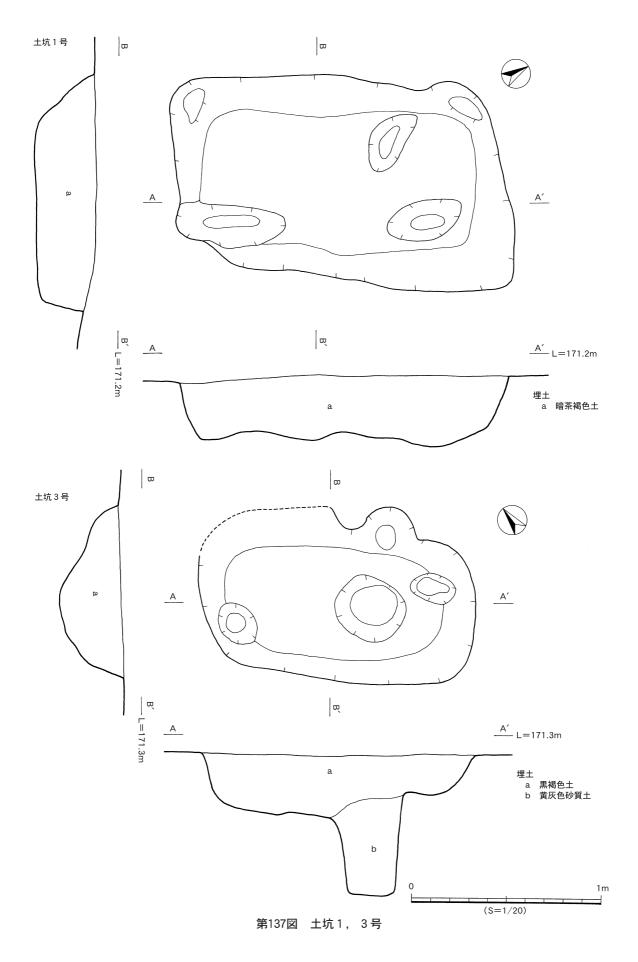
土坑22号 (第140図)

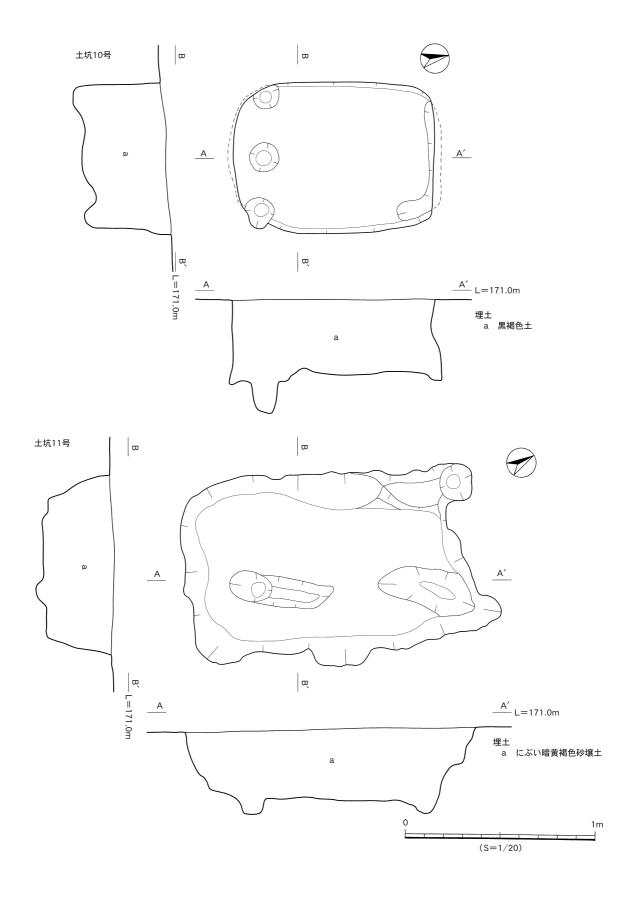
土坑24号 (第141図)

K-13区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸78cm×短軸60cmの長方形を呈する。床面は長軸で69cm,短軸で55cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂壌土を主体とし、側壁よりに同色のやや暗い埋土が堆積する。検出面からの深さ48cmで床面はほぼフラット、壁面もほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は西に7.5度振れる。遺物が5点出土し、内1点を図化した。

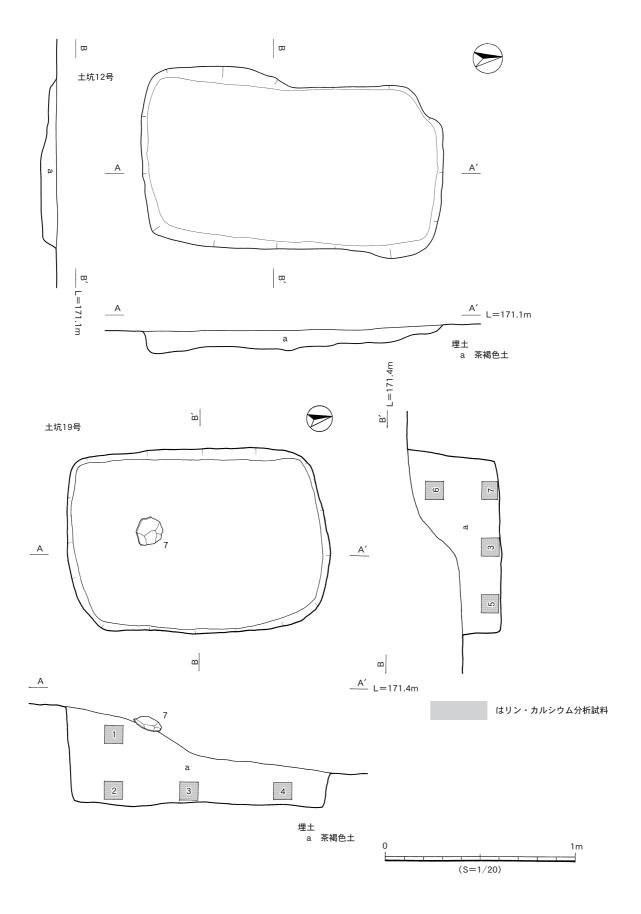
土坑25号(第141図)

K-13区、 IMM 上面で検出された。 遺構北側がやや削平を受けている。 平面形態は長軸93cm × 短軸71cmの長方形を呈する。 埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土を主体とし、側壁よりに同色の砂質の強い埋土が堆積する。 検出面の最も高いところからの深さは37cmである。 床面には径20cm深さ10cmほどの円形の掘り込みが見られ床面周縁がわずかに凹むが溝状とまではいえない。 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。 長軸方向は西に3度振れる。 遺物が2点出土したが図化には至らなかった。

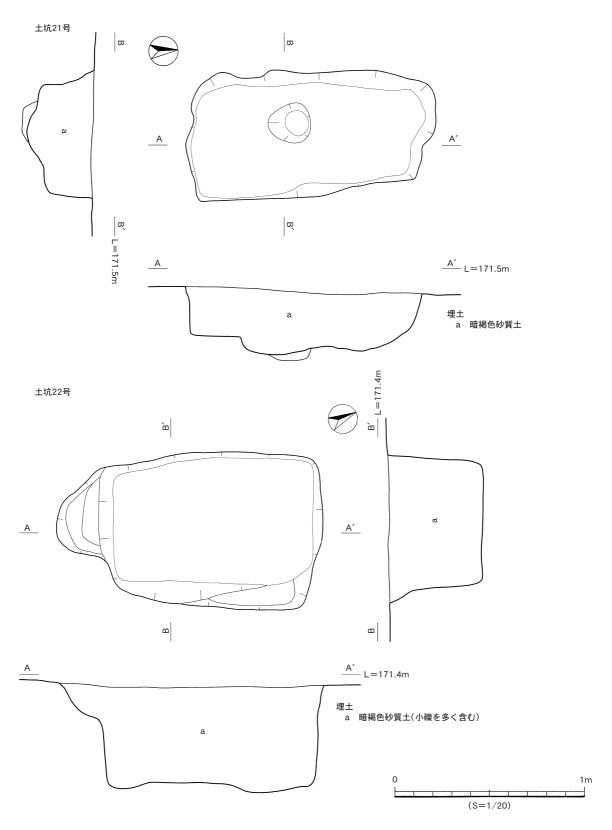




第138図 土坑10, 11号



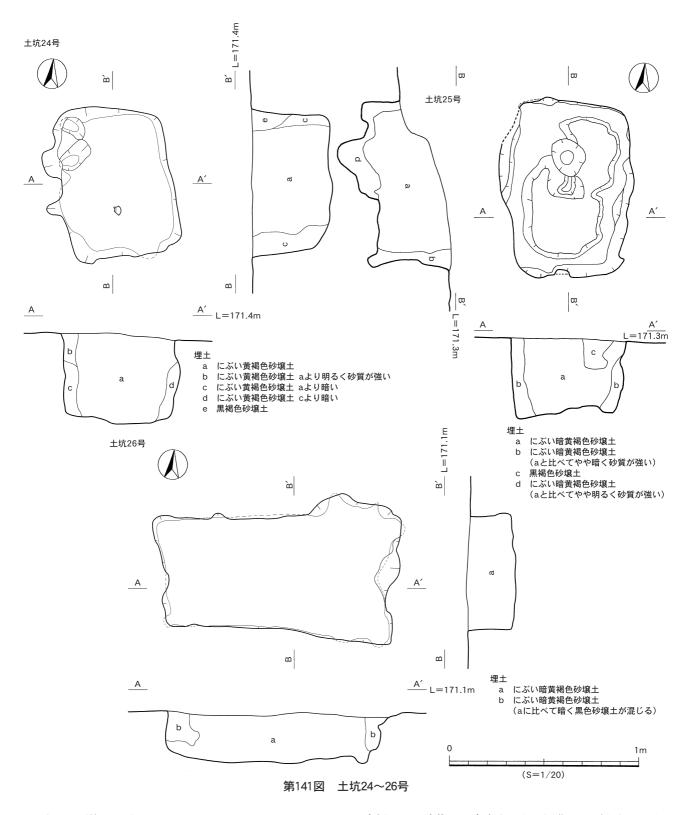
第139図 土坑12, 19号・19号遺物出土状況



第140図 土坑21, 22号

土坑26号 (第141図)

K-13区、Ш層上面で検出された。平面形態は長軸 120cm×短軸60cmの長方形を呈する。床面での長軸、短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はにぶい暗黄褐色 砂壌土を主体とし短軸側壁よりに同色のやや暗い埋土が 堆積する。検出面からの深さ25cmで床面はほぼフラット、 側壁もほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に80.5度振 れる。遺物が11点出土し、内3点を図化した。

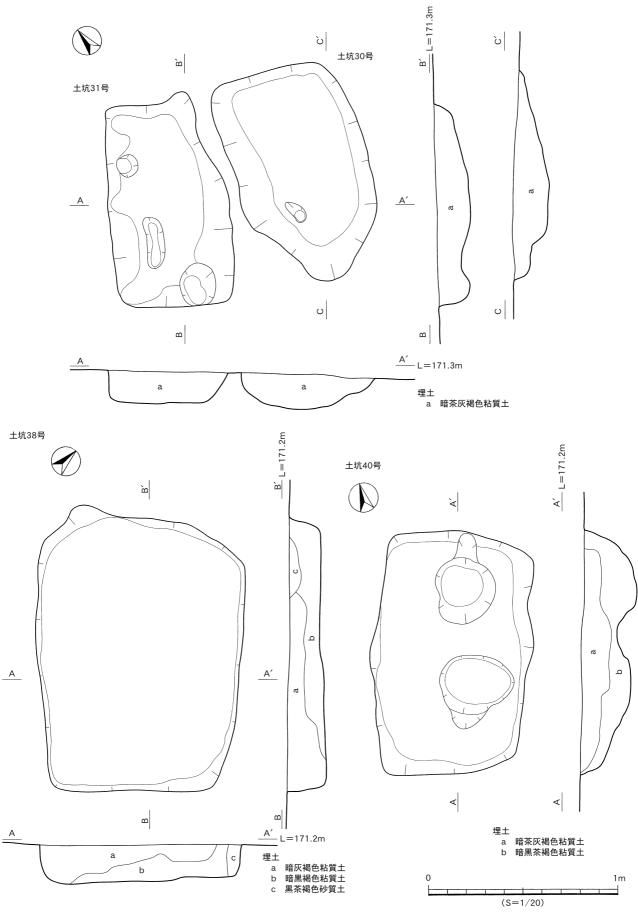


土坑30号 (第142図)

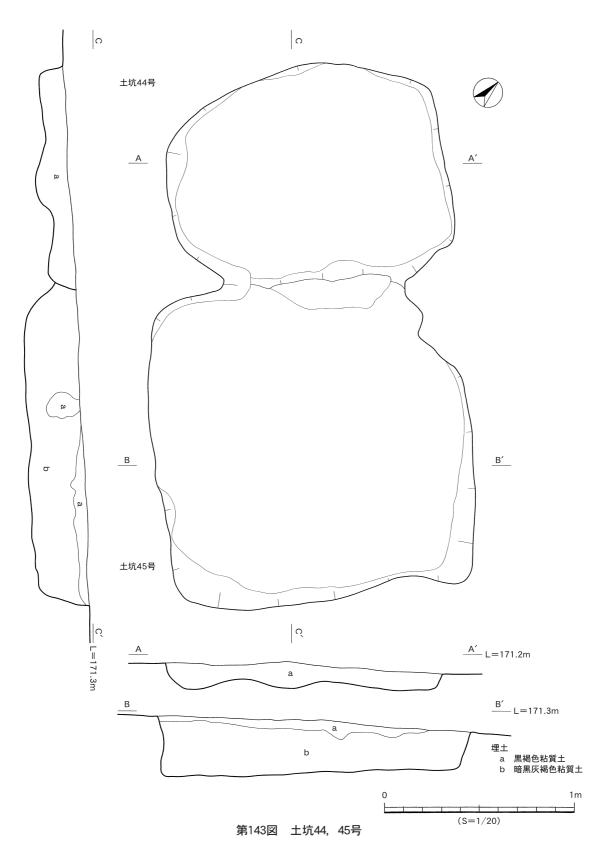
K-13区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸 115cm×短軸71cmの略長方形を呈する。床面での長軸は 90cm, 短軸は46cmを測る。埋土は暗茶灰褐色粘質土の単一である。検出面からの深さ18cmで床面は皿状を呈する。壁面の立ち上がりも緩やかである。長軸方向は東に20.5

度振れる。遺物が7点出土したが図化には至らなかった。 土坑31号 (第142図)

K-13区、 価層上面で検出された。平面形態は長軸 107cm×短軸65cmの長方形である。床面での長軸は90cm、短軸は50cmを測る。埋土は暗茶灰褐色粘質土の単一である。検出面からの深さ16cmで床面はほぼフラットである。



第142図 土坑30, 31, 38, 40号

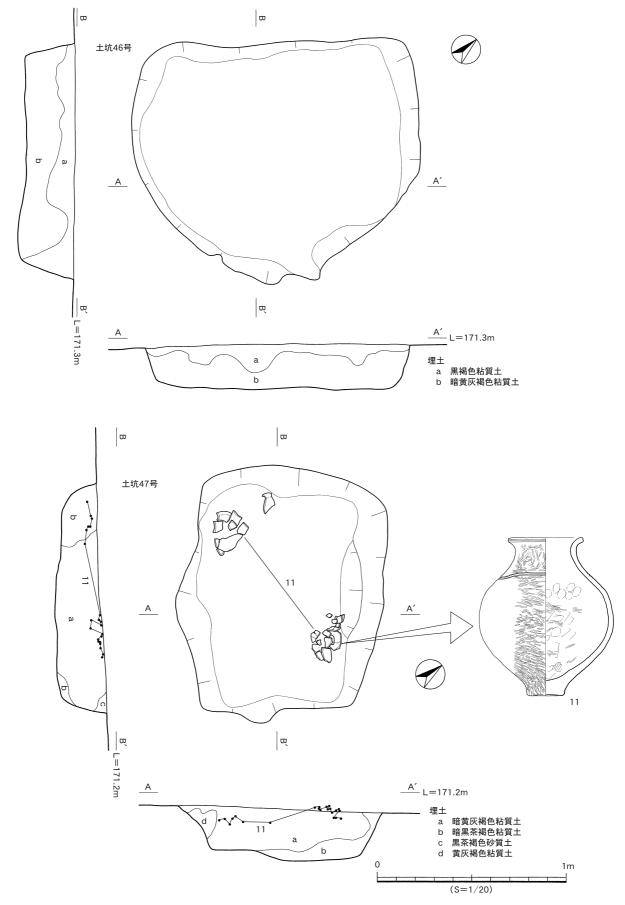


壁面の立ち上がりははっきりしている。長軸方向は東に 29度振れる。遺物は出土しなかった。

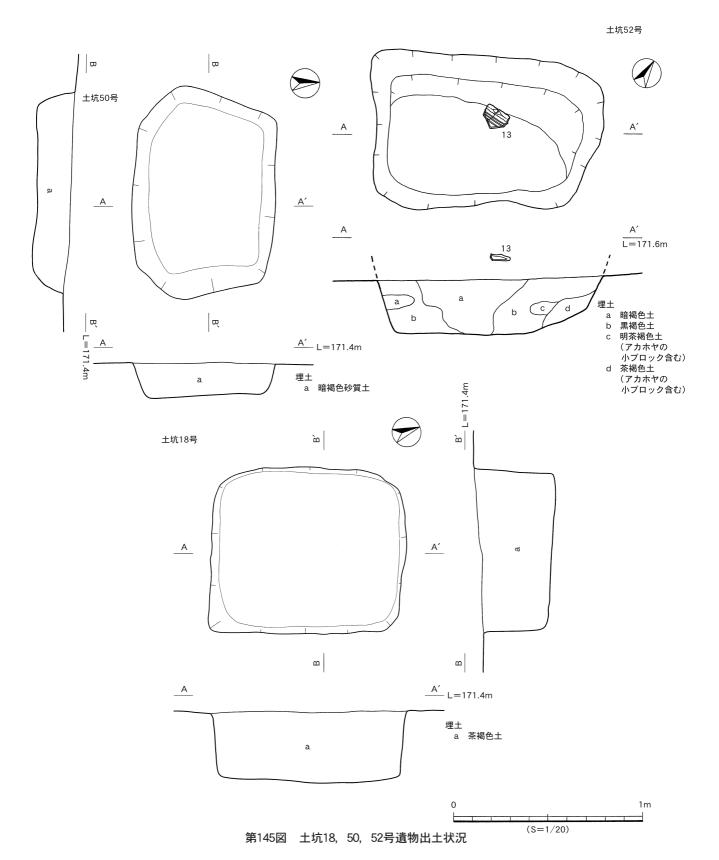
土坑38号(第142図)

K-14区、 W層上面で検出された。 平面形態は長軸

145cm×短軸107cmの長方形を呈する。床面での長軸は 137cm,短軸は102cmを測る。埋土は暗灰褐色から暗黒褐 色の粘質土を主体とする。検出面からの深さ20cmで,床 面はほぼフラットである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。



第144図 土坑46, 47号·47号遺物出土状況



長軸方向は西に51.5度振れる。遺物が5点出土したが図 化には至らなかった。

土坑40号(第142図)

K-14区、Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸

130cm×短軸87cmの長方形を呈する。床面での長軸は118cm,短軸は75cmを測る。埋土は暗茶灰褐色から暗黒茶褐色の粘質土である。検出面からの深さ20cmで,床面には径30cm前後の円形の浅い落ち込みが2カ所見られる。壁面は緩やかに立ち上がる。長軸方向は東に2.5度振れる。

遺物が1点出土したが図化には至らなかった。

土坑44号 (第143図)

L-14区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸 147cm×短軸114cmの長方形を呈し土坑45号と接する。床面での長軸は132cm,短軸は105cmを測る。埋土は黒褐色粘質土の単一である。検出面からの深さ13cmで、床面は多少起伏がある程度でほぼフラットである。壁面の立ち上がりははっきりしている。長軸方向は東に34.5度振れる。遺物が3点出土したが図化には至らなかった。

土坑45号 (第143図)

L-14区、 IM層上面で検出された。平面形態は長軸 170cm×短軸170cmの略長方形を呈する。床面での長軸は 162cm、短軸は150cmを測る。埋土は暗黄灰褐色粘質土を 主体とする。検出面からの深さ30cmで床面はほぼフラット、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に34.5 度振れる。遺物が3点出土したが図化には至らなかった。

土坑46号 (第144図)

L-14区、 IM層上面で検出された。 平面形態は長軸 152cm×短軸127cmの略長方形を呈する。 床面での長軸は 137cm, 短軸は106cmを測る。 埋土は暗黄灰褐色粘質土を 主体とする。 検出面からの深さ24cmで床面はほぼフラット,立ち上がりははっきりしている。 長軸方向は東に33.5 度振れる。 遺物が12点出土したが図化には至らなかった。

土坑47号 (第144図)

土坑50号 (第145図)

K-15区、個層上面で検出された。平面形態は長軸 106cm×短軸76cmの長方形を呈する。床面での長軸は85cm, 短軸は60cmを測る。埋土は暗褐色砂質土の単一である。 検出面からの深さ18cmで床面はほぼフラット, 壁面はや や緩やかに立ち上がる。長軸方向は東に61.5度振れる。 遺物は出土しなかった。

土坑52号 (第145図)

J-23区 Ⅵ層上面で検出された。平面形態は長軸120cm

×短軸80cmの略長方形を呈する。床面での長軸は90cm, 短軸は50cmを測る。埋土は暗褐色から黒褐色土の埋土を 主体とする。検出面からの深さ28cmで床面はほぼフラッ トで、壁面はやや緩やかに立ち上がり、北側は特に緩や かな立ちあがりを示す。長軸方向は東に71度振れる。遺 物が14点出土し、内1点を図化した。

土坑18号 (第145図)

土坑23号 (第146図)

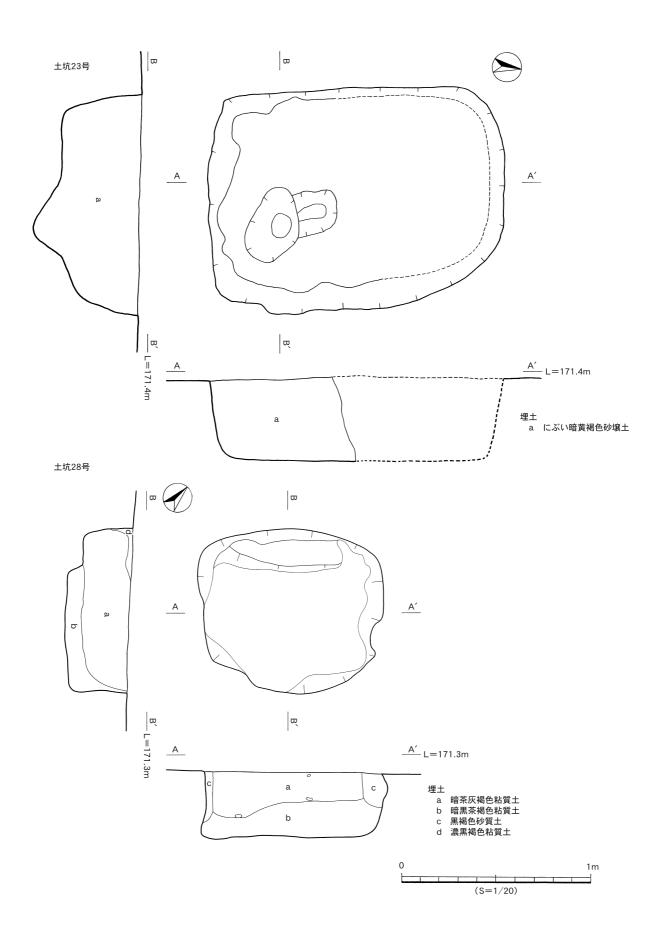
土坑28号 (第146図)

K-13区、個層上面検出された。平面形態は長軸95cm×短軸87cmの略方形を呈する。床面での長軸は85cm,短軸は80cmを測る埋土は暗茶灰褐色粘質土を主体とし、下位に暗黒茶褐色粘質土が堆積する、また東西側壁よりに茶褐色砂質土の堆積が見られる。検出面からの深さ34cmである。床面はほぼフラットで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に56度振れる。遺物が1点出土したが図化には至らなかった。

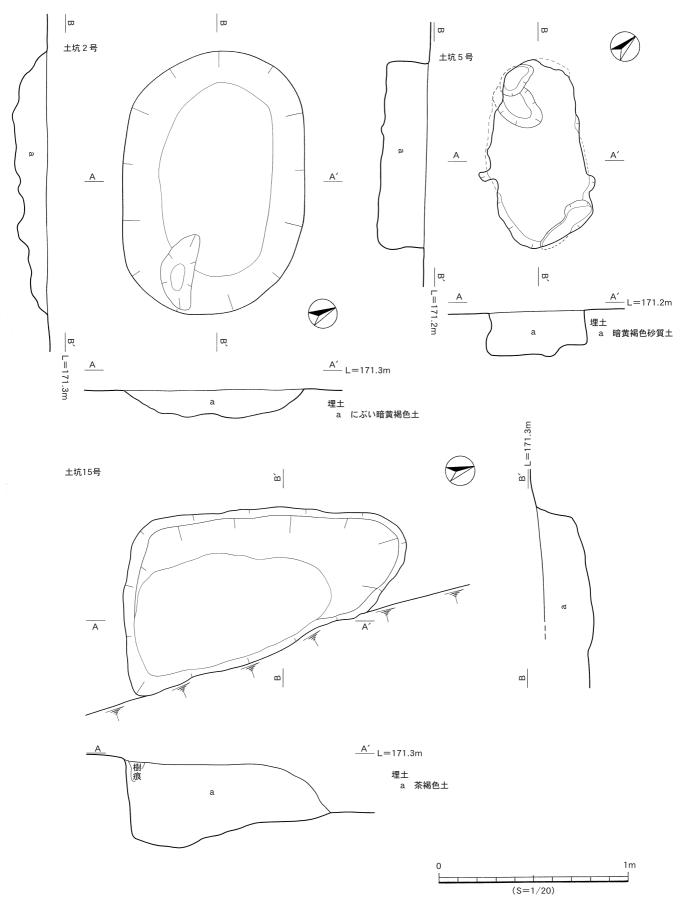
土坑 2 号 (第147図)

土坑5号(第147図)

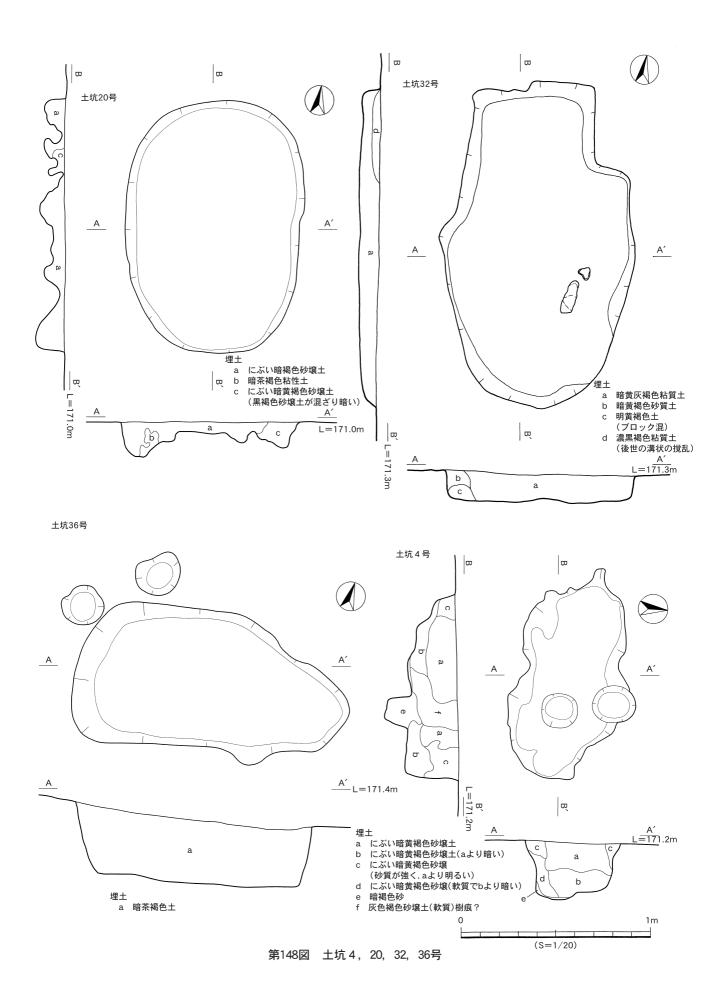
L-12区、W層上面で検出された。平面形態は長軸 100cm×短軸50cmの楕円形を呈する。床面での長軸、短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は暗黄褐色砂質土の単一である。検出面からの深さは24cmで床面はほぼフ

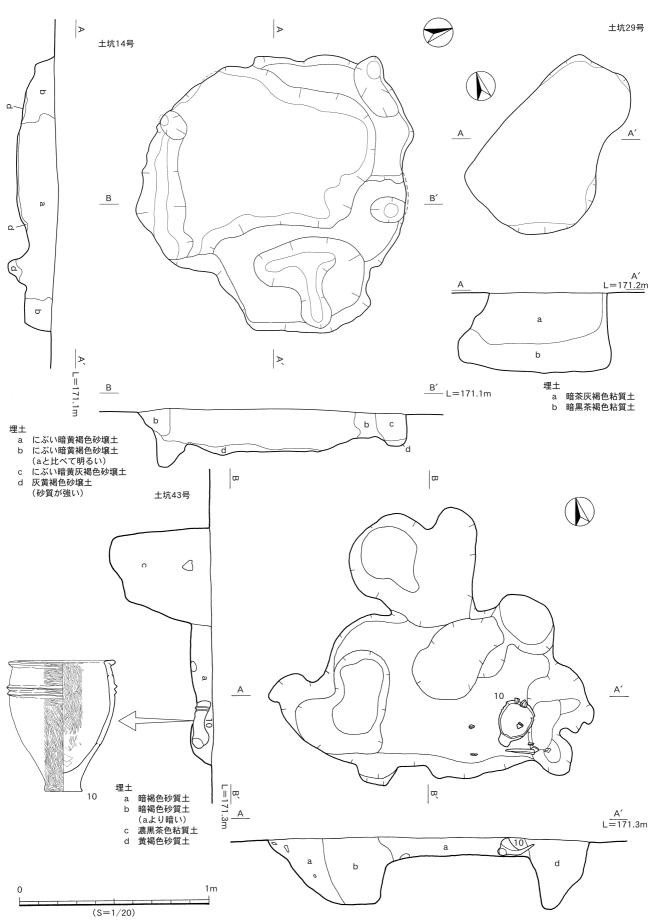


第146図 土坑23, 28号



第147図 土坑 2, 5号, 15号





第149図 土坑14, 29, 43号·43号遺物出土状況

ラットで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は西 に33度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑15号 (第147図)

土坑 4号 (第148図)

L-12区、個層上面で検出された。平面形態は長軸 100cm×短軸50cmの不定形を呈する。床面での長軸は95cm, 短軸は38cmを測る。埋土は、にぶい暗黄褐色砂壌土を主体とする。検出面からの深さは25cmで、床面中央付近に深さ10cm程度のピットがみられる。長軸方向は西に85度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑20号 (第148図)

K-13区、 W層上面で検出された。平面形態は長軸 138cm×短軸92cmの楕円形を呈する。床面は長軸で128cm, 短軸で81cmを測る。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土を主体とする。検出面からの深さは6cm程度であるが床面の凹凸が激しい。ほぼ床面直上での検出となった。長軸方向は東に21度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑32号 (第148図)

土坑36号(第148図)

土坑14号 (第149図)

K-12/13区、 畑層上面で検出された。 平面形態は長軸145cm×短軸145cmの略方形から不定形を呈する。 床面は長軸で132cm, 短軸で136cmで凹凸が激しい。 埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土が主体であり、壁面付近に同色のやや明るめの埋土が堆積する。 検出面からの深さは23cmで壁面の立ち上がりははっきりしている。 南側側壁下部に沿って溝状の浅い落ち込みが見られる。 長軸方向は東に13.5度振れる。 遺物は出土しなかった。

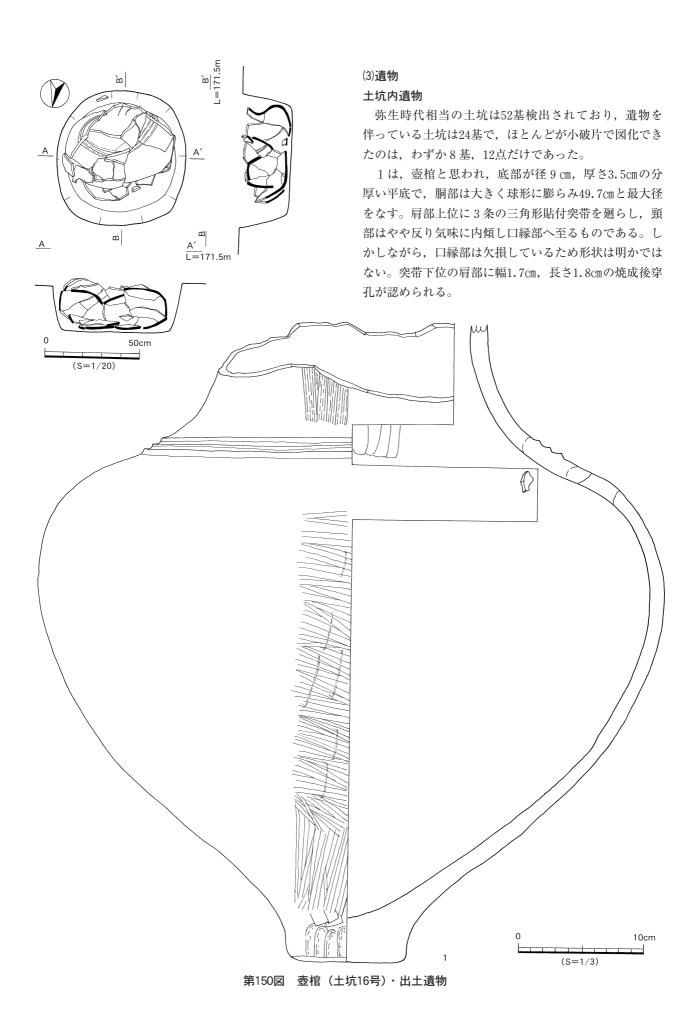
土坑29号 (第149図)

K-13区、 IM層上面で検出された。平面形態は長軸 100cm×短軸55cmの略長方形から不定形を呈する。床面での長軸,短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は暗灰褐色粘質土を主体とする。掘り込みはやや袋状を呈する検出面からの深さ43cmである。長軸方向は東に56度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑43号 (第149図)

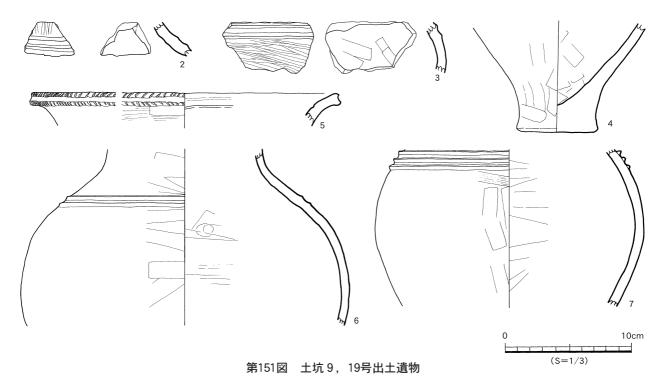
壺棺(土坑16号)(第150図)

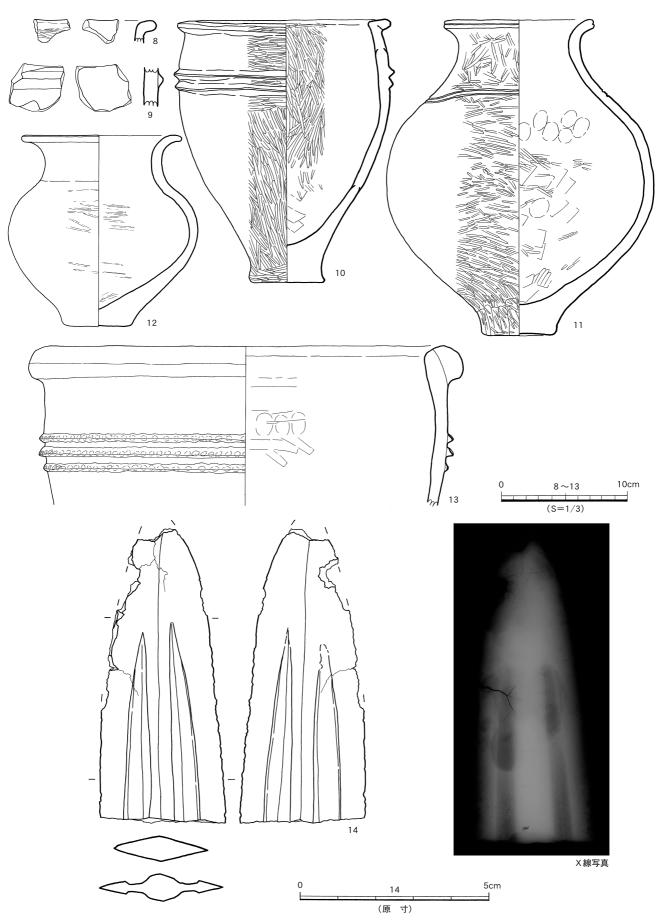
壺棺はK-12区 個屋上面において検出されたもので、 平面形態が72cm×69cmの円形の土坑内に納められていた ものである。土坑の深さは検出面から26cmである。壺棺 は土坑の中央よりやや北側の底部に置かれ、南側にわず かに傾斜した状態で置かれたものと想定される。土圧な どにより破砕しているが、ほぼ現況に近いものと思われ る。



2・3は9号土坑内出土である。いずれも壺形土器で ある。2は肩部である。現存で2条の三角突帯が廻らさ れている。外面調整はヘラミガキである。3は胴部上位 である。上位にやや小さめの三角突帯が現存で2突廻ら されている。外面は丁寧なヘラミガキで内面は工具ナデ である。小破片であり副葬及び供献の可能性は低い。 4 ~7は19号土坑内出土である。4は甕形土器の底部。充 実した脚台であるがあまり高くないものである。脚台か らあまり開かずに立ち上がるもので、外面はヘラミガキ, 内面は工具ナデである。5~7は壺形土器である。5は 口縁径24.3cmを測る。大きく外反するもので口唇部は凹 み,二叉状口縁状を呈する。また,斜行する細かな刻み 目が施される。6は胴部から頸部にかけての部分である。 最大径は胴部中位にあり胴部は球形状に膨らむ。肩部に 2条の細い三角突帯をめぐらし、頸部はゆるやかに立ち 上がるものと思われる。7は胴部中位に最大径を有する もので胴部は球形状に膨らむものである。肩部に3条の 三角突帯を廻らす。内外面共に工具ナデで、外面の一部 にススが付着する。8・9は26号土坑内出土である。い ずれも甕形土器である。8は口縁が逆L字状に外反する ものである。9は三角突帯を廻らす胴部である。外面に ススの付着が認められる。10は43号土坑内出土の甕形土 器である。口縁径16.8cm, 底径5.9cm, 器高20.7cmを測る。 底部は充実した脚台であるが、やや低いものである。ふ んばり気味の底部からややくびれて立ち上がるもので、 胴部はあまり張らず、肩部は内傾して口縁部へ至る。口 縁部は短く逆L字状に外反する。口縁端部は丸くおさめ る。胴部上位に三角突帯を2条廻らす。外面下位は縦方

向、上位は横方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラミ ガキと工具ナデである。また、外面にはススの付着が認 められる。11は47号土坑内出土の壺形土器である。口縁 径11.8cm, 底径6cm, 器高24.9cmを測る。厚めの底部よ り外方へ立ち上がり胴部中位に最大径を持ち胴部は球形 状に膨らむ。肩部から頸部へはゆるやかに内傾して口縁 部へ至る。口縁部もゆるやかに外反し、口唇部には沈線 上の凹みが認められる。肩部に2条の浅い沈線が廻らさ れる。外面はヘラミガキ,内面は一部ヘラミガキで胴部 は工具ナデ、肩部は指頭押圧の痕跡も認められる。12は 48号土坑内出土の壺形土器である。口縁径12.7cm, 底径 5.8cm, 器高15.1cmとやや小振りのものである。安定し た底部から大きく外方へ立ち上がり、胴部も大きく膨ら む。肩部はしまり、頸部は直行気味に口縁部へ至り、や や長めの口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は丸くおさ める。内外面共に一部に工具ナデが観察される。13は 52号土坑内出土の甕形土器で、口縁径34.4cmを測る。あ まり張らない胴部から頸部はわずかに内傾し、口縁部は 外反する。丸く大きな口縁部でいわゆる「ボテ口縁」と 呼称されるものである。胴部上位に指つまみ状の三角突 帯3条を廻らす。14は土坑34号内からの出土である。土 坑床面から10cm程度のところから出土しており、副葬品 と考えられる。銅戈片で,残存最大長7.85cm,最大幅 3.35cm, 最大厚 7 mmで切っ先先端部を欠損している。 切っ先が丸みを帯び、匙状の樋を有し、脊が細く薄いこ とから、細型銅戈と考えられる。このタイプの銅戈は、 樋の上端が整うのが特徴とされるが、本例は樋の上端が 一致しておらず,脊上に鎬を通す特徴が指摘できる。





第152図 土坑26, 34, 43, 47, 48, 52号出土遺物

包含層

弥生時代のものと思われる遺物は、他の時代と比べ点数は少ないものの、Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層を中心に弥生時代全般を通じたものが出土している。出土した遺物は甕形土器、壺形土器を中心とした土器が大部分を占めるが、土器以外にも磨製石鏃、石庖丁などの石器や石製品が認められた。これらは、古墳時代で詳細を扱う。また、鹿児島県内では約20例目となる抉入柱状片刃石斧や、破鏡が出土している。

土器に関しては、器種や口縁部の形態などから I ~ X II 類に分類した。 I 類は弥生早期甕, II 類は弥生前期甕, II 類は弥生中期甕, IV 類はボテ甕, V 類は黒髪式甕, VI類は甕全般底部, VI類は壺口縁部, VI 類は壺底部, X II 類は 重脈文を施す免田式土器, X I 類は鉢, X II 類は器種不明とした。

1 土器

I類(第154図15~34)

15は胎土に砂粒を多く含み、大きめの角閃石と石英の 粒子を含む。16は口縁部が内傾する器形で、口縁部と胴 部に突帯を施す。17は生地土に特徴があり、胴部は茶褐 色,口縁部上端と突帯が白色である。突帯の刻みが深く, 箱形を呈する。18は突帯に指で刻みを施している。 19,20は突帯が貼り付けられ、口縁上端にほぼ接してい る。21は内面にミガキ痕を残し、突帯の貼り付けは口縁 部下に施されている。22は外面にスス・炭化物の付着が 著しい。25は口縁部にかけて屈曲しており、径は小型で ある。26と27は同一個体と思われ、口唇端部に深い刻み を施し、口唇部に平坦面を残す。28の突帯は竹管状工具 による刻みが施されている。29は口縁部とその下に突帯 を施す。31は口唇端部に浅い刻みを施す。33は細沈線に より突帯間をつなぐ。詳細は不明だが、鋸歯文の可能性 が考えられる。34は口縁部上端を欠損するが、横位の突 帯間を斜位の突帯でつなぐ。

Ⅱ類 (第154図35~第155図47)

36は胴部にかけてすぼまるため、鉢の可能性も考えられる。39は三角突帯頂部に弱い刻みを施す。42は外面の 突帯下に刺突文が見られる。45は亀の甲タイプで、胴部 の器面調整はヘラみがきを縦方向に施す。口縁部に穿孔 が見られ、内面の穿孔の周りは器壁の剥落が見られるこ とから、焼成後の穿孔であると思われ、弥生期にはあまり見られない補修孔と判断した。46、47は如意状口縁を 呈し、口唇端部に刻みを施す。47は、胴部が膨らみを持ち平底の底部に至る。外面にススが著しく付着している。 全面に丁寧な工具ナデを施す。胎土に角閃石を多く含む 特徴を持ち、後述するボテ甕と類似している。

Ⅲ類 (第155図48~56)

48は口縁部の突帯はややふくらみ、下に垂れている。 年代測定の結果、弥生中期のものと判明している(科学 分析第4節参照)。49は小型の甕で、ふくらむ胴部に2条 の突帯を施す。50は口縁突帯が垂れ下がり、端部が尖る。 55は口縁が台形状で胴部はややふくらみを持ち、内面・ 外面とも入念なミガキを施す。56は口縁に刻み目があり、 口縁部下から粘土の貼り付けが垂下する。

Ⅳ類 (第156図57~63)

口縁部が丸く器壁が分厚い一群を分類した。弥生前期の後半から中期前半に位置づけられる。59は丸い口縁部内面に段を有するのに対し、57、58、60は段を有さない。61は口縁部を欠損するが、胴部突帯を一条残す。突帯の断面観は三角形を呈し、上下を指でつまむように調整していることから、絡縄突帯と思われる。62は胴部で、3条の突帯を持つが、作り付けは雑である。突帯間はナデにより調整が施される。内面に粘土の接合痕がある。63は分厚い底部である。充実した底部で外面にヘラけずりを入念に施している

V類(第156図64~73)

黒髪式と思われるものを時代順に掲載した。64,65は T字状の口縁で、64は凹み、胎土は細い角閃石が含まれる。65の胎土は肥後系の色調で白〜黄色をしている。66はL字状の口縁を呈する。68は胴部との接合面での剥落が見られる。67も肥後系の色調を呈し、粘土接合面を残している。口縁部上面にススが弧状に付着していることから、ふた等の痕跡の可能性がある。70はL字状に外傾する口縁で、外傾がやや立ち上がる特徴が見られる。口縁部上面に幅広のハケ目痕が見られる。71は胎土に特徴があり、小礫の他に雲母片を多く含む。73は70と類似しており、幅広のハケ目痕が見られる。

VI類(第157図74~77)

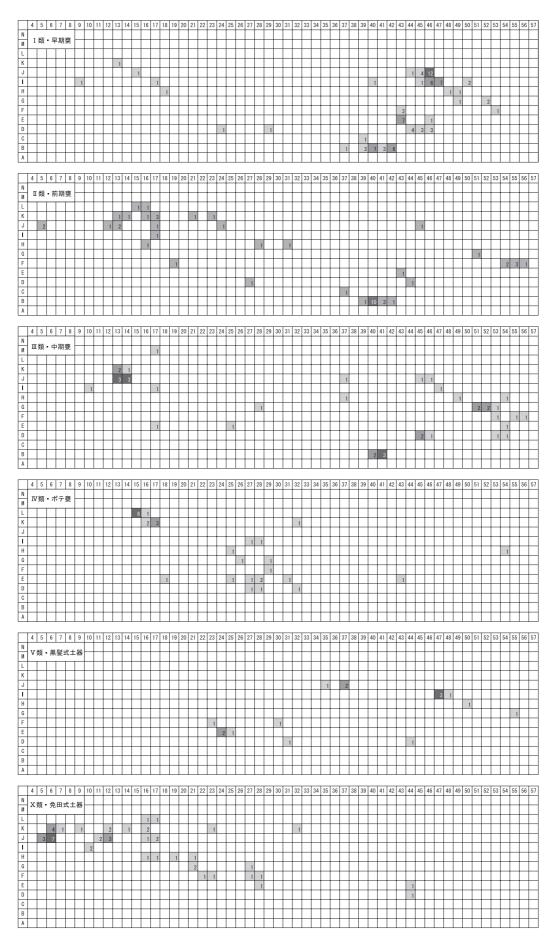
75は上げ底状の底部で、器壁が中心部に向かって細くなる。76は充実高台で、外端に粘土を貼り付け、指で押さえ張り出しを作っている。77は底面に細沈線が見られる。

垭類 (第157図78, 88)

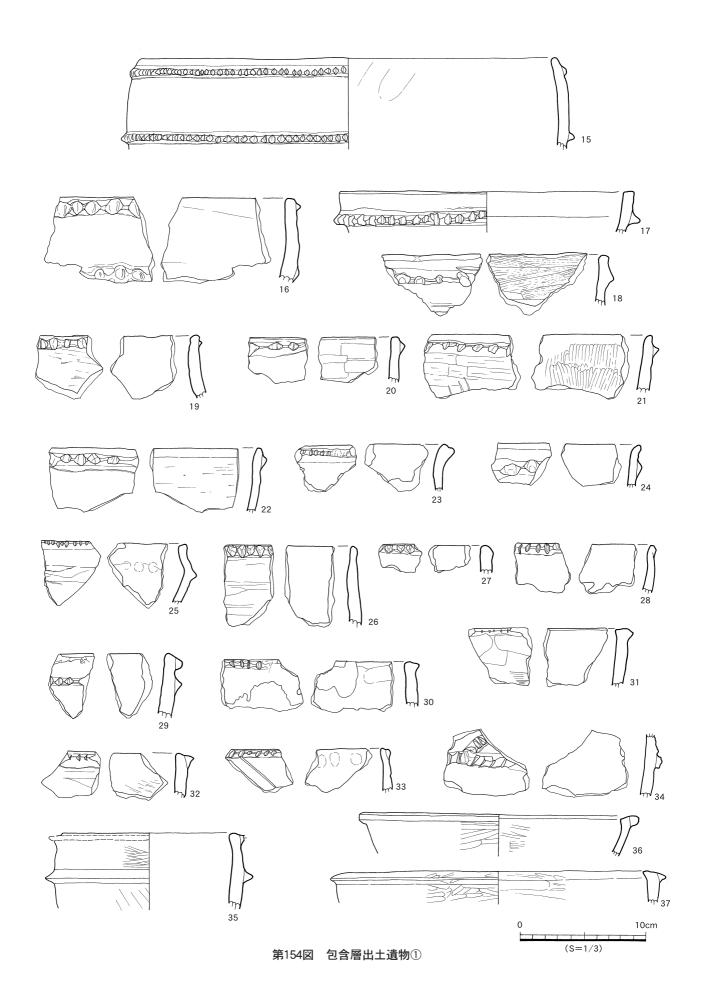
78は頸部に1条突帯を施し、口縁部に工具痕が見られる。88は内外面とも赤色顔料を施し、口縁内面に暗紋が見られる。

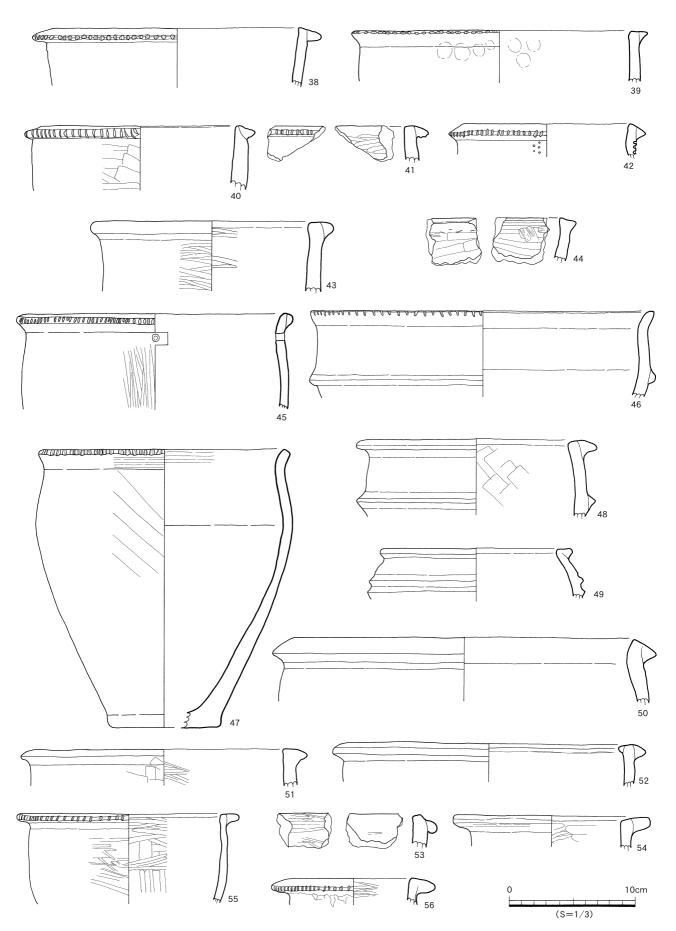
垭類 (第157図79~87, 89, 90)

79,80は壺頸部である。80は丹塗りの壺頸部であり,胎土に長くて大きい角閃石が含まれる。81は壺の肩から胴部上半にかけての破片で,ヘラみがきを施し,肩と胴部に沈線を施す。82は胴部片で,横に4条,その上に4条の沈線を鋸歯状に施す。81と82は同一個体と思われる。83,84は胴部突帯を施し,84は内外面とも丁寧なミガキ

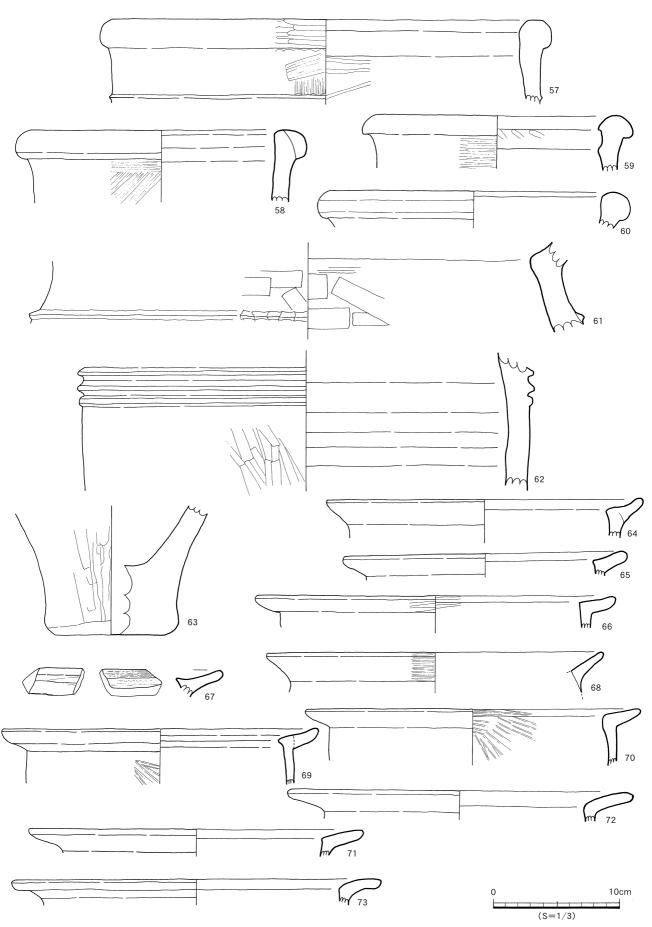


第153図 遺物出土状況

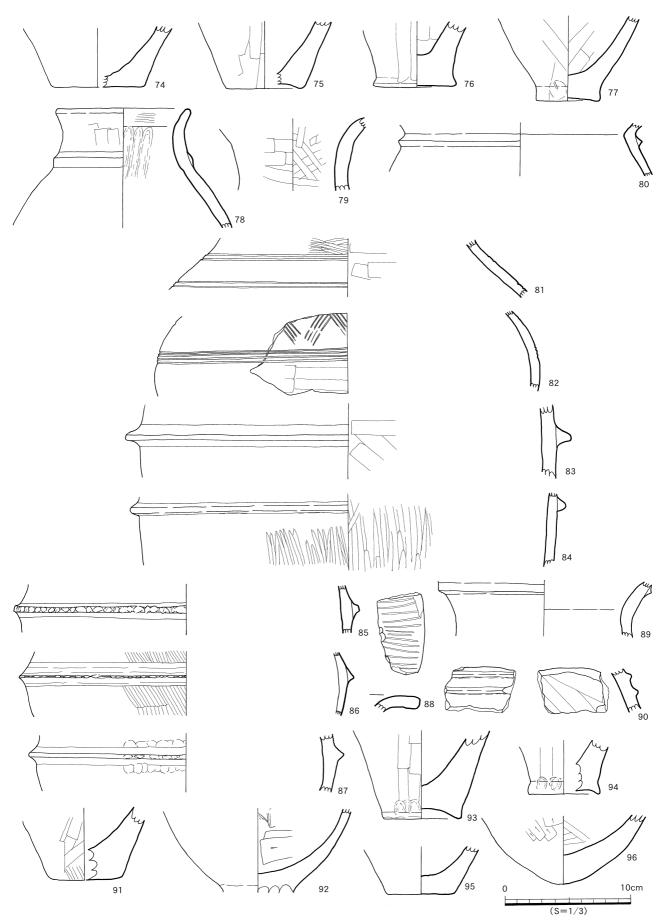




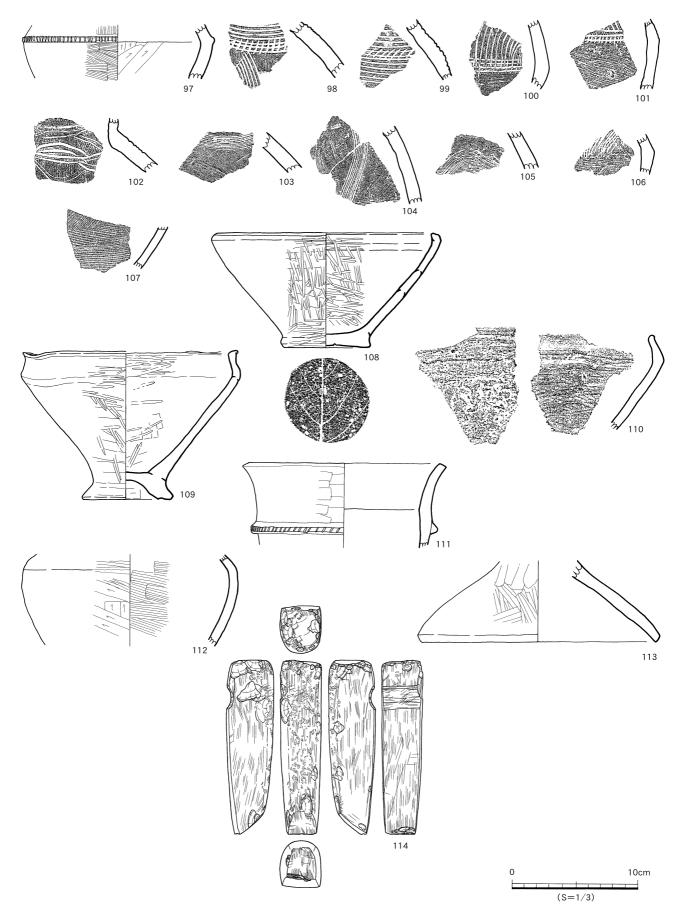
第155図 包含層出土遺物②



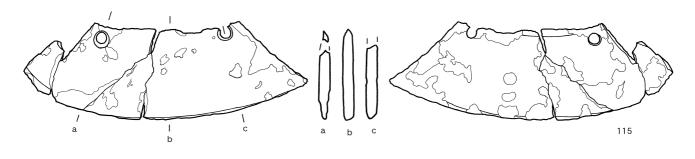
第156図 包含層出土遺物③

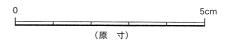


第157図 包含層出土遺物④



第158図 包含層出土遺物⑤





第159図 包含層出土遺物⑥

を施す。85,86は黒髪式の壺であり,86は内面の剥落が激しい。89は二叉状口縁と思われる。90は胴部突帯が2条残っている。

IX類 (第157図91~96)

91は壺底部からの立ち上がりは直線的であり、ハケ目のあとナデが見られる。92は生地土に特徴があり、白色と茶褐色の粘土がマーブル状に混ざり合う。接地面にわずかな削り痕が見られる。93、94は上げ底になる底部で、脚を意識した作りであり、作り出しは指によるつまみ上げとなっている。95は生地土が多孔質である。96は丸底で底面が分厚い作りである。

X類(第158図97~107)

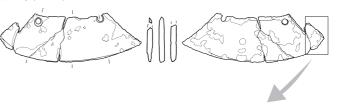
算盤珠状の胴部に重弧文を施した長頸壺を特徴とする 免田式土器と思われるものを分類した。97は屈曲する胴部の胴に、刻目突帯を施す。98は横位の沈線ののちに、 縦位の刻目を施す。100は横位の沈線ののち、縦位の沈 線を施す。縦位は弧状になると思われる。102は口縁部 への立ち上がりが残る。相対する弧状の沈線ののち、横 位の沈線が施される。104は胎土に金色の雲母を含んでいる。

X I 類 (第158図108~110)

108は内外面ともに丁寧なミガキを施し,底部には葉脈痕を残す。また口縁部は面取りをしているように思われる。109は口縁部が内傾し、端部をつまみ出している。底部が上げ底状になっており、内外面にミガキを施す。110も109と類似しており、口縁部を残す。

X Ⅱ類 (第158図111~113)

111は二重口縁壺の痕跡を残すが明確ではない。口縁部は外反し、突帯を有して頸部へ至る。内面は突帯のやや上位で段を有し、内弯ぎみに頸部へいたる。非常に丁寧な作りになっており、時期や胎土においても再検討する必要性がある。112は肩部が張る器形で、胴部は袋状を呈しているが、ススの付着が著しい。再検討を要する。113は高坏の脚と思われるが検討を要する。内外面の調整





側面拡大写真

から脚と判断し掲載した。外面に種子圧痕と思われる凹 みがある。

2 抉入柱状片刃石斧 (第158図114)

断面はほぼ方形で、全面を丁寧な研磨で仕上げている。 最大長が13.6cm、幅3.2cm、厚さ3.7cmで石材は頁岩と推 定される。基部に近いところに紐を掛けていたと思われ る抉りを有し、抉り部には段差が見られる。

3 破鏡 (第159図115)

残存する大きさは、長さ2.6cm,幅7.5cm,厚さ0.3cmである。推定復元径は約16cmであり、完形の1/6~1/7程度残存している状態である。色調は緑がかった黒色で、緑錆が確認でき、崩れやすい。穿孔が2つあるが、右側の穿孔が際で欠けている。左側面に面取りが確認できるが(顕微鏡写真参照)、右側面や穿孔のある方は研磨している部分があるかははっきりわからない。

3 古墳時代の調査

(1) 調査の概要

古墳時代の調査は、主に表土下のII層で行った。ただし、遺跡北側と南側とでは層の堆積等が異なっていることから、遺構検出面は北側では黄褐色砂礫層(WI層)上面、南側ではアカホヤ火山灰層(VI層)上面であった。このため、遺物包含層すなわち生活面から数十cm下層で遺構を捉えていることとなる。遺物包含層が残存している部分では、調査対象範囲のほぼ全域で当該期の土器が出土している。また、遺物包含層が削平等で消失していても、遺構の床面が残存している部分もあった。これらのことを勘案すると、本来はほぼ全域に遺構・遺物が存在していたと推察される。

包含層の調査は、大型の破片等はトータルステーションで出土地点の記録を行い、小破片はグリッド毎に一括取り上げを行った。

遺構は、各々遺構の輪郭を捉えた時点で、検出状況の記録写真を撮影した後、2本の直行するベルトを設定して掘り下げを実施していった。床面の判断は、焼土炭化物の堆積や硬化面等の把握に依ったが、不明なものも含まれている。これらの個々の遺構の詳細については各遺構の中で述べている。

遺構の調査で特に留意した点は、柱穴の時期判断である。埋土の特徴から、多くは古墳時代から古代の時間幅が想定できたが、遺構内から出土する遺物が極端に少ない点や、掘立柱建物跡の復元が困難であった点などから、時期判断が困難であった。このため、柱穴に関しては古墳時代の遺構配置図の中で一括して取り扱った。

なお, 竪穴住居跡の埋土の一部はふるいがけを実施す

ると共に、磁石による微細な鉄片等の抽出に努めた。

遺構内遺物は、包含層の遺物分類に準じて報告を行っていくが、各遺構内の遺物は小破片が多い。このため、必ずしも厳密ではなく、器種構成が充実しているものは極めて少ない。各器種ごとの細分の概念については包含層遺物を参照されたい。

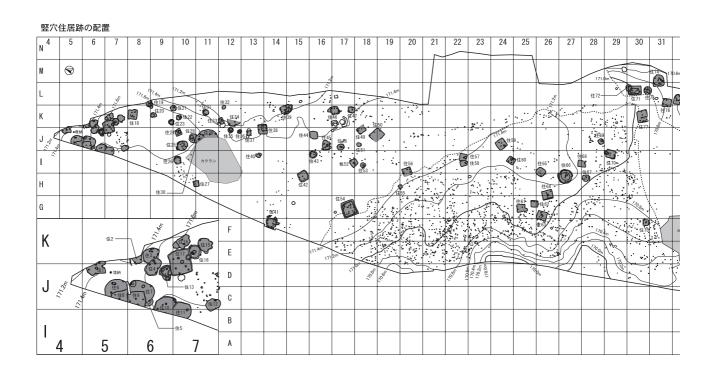
(2) 遺構

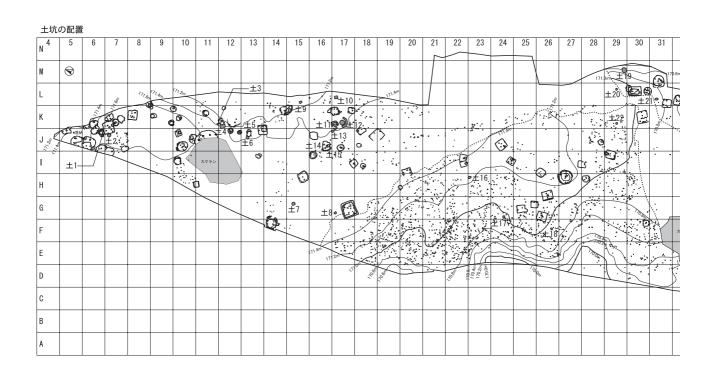
竪穴住居跡 1号 (第195・196図)

J・K-5区においてⅢ層上面で検出された。調査区 中最も北側で検出された竪穴住居跡である。東側半分が 羽月川への落ち込みによって消失している。検出時のプ ランは長辺4.3m, 短辺2.2mで, 本来は長辺4m程度の 方形を基調としていたと思われ、南側に間仕切りが見ら れる。調査は、遺構中央を通る2本の直行するベルトを 設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層で床面は北 側と東側へ傾斜していて不安定な部分も見られた。貼床 や硬化面等の変化は見られず、柱穴などの付帯施設の確 認は、床面を掘り下げながら確認し、結果4基の柱穴と 中央に1基の土坑が確認された。 炉・焼土や炭化物の広 がりは見られなかった。遺物は、総点で512点が出土し この内10点を図化した。1~4は甕である。1は、口縁 部が外反し、かき上げ状の調整痕で外面に段を有する。 口縁部内面は、調整痕に変化が見られ、段を意識したも のかと思われるが、段を有するには至らない。5は、壺 の口縁部片である。6は、壺の胴部片で、やや幅広の突 帯を貼り付け、鋸歯状にキザミが施されている。7は、 壺の頸部から胴部上半にかけての破片である。8は、坩 と思われる。工具調整を意識的に深く施して外面に段を 作り出している。

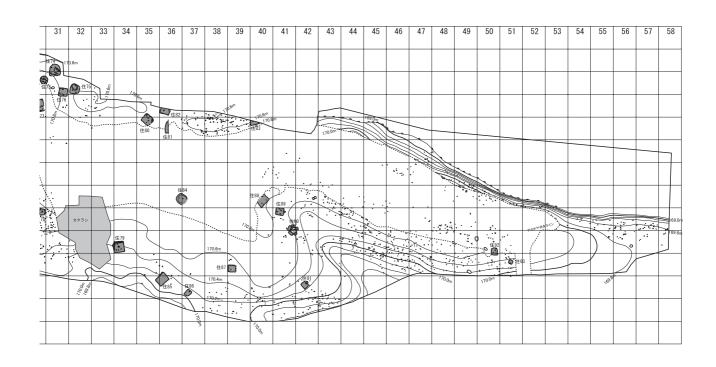


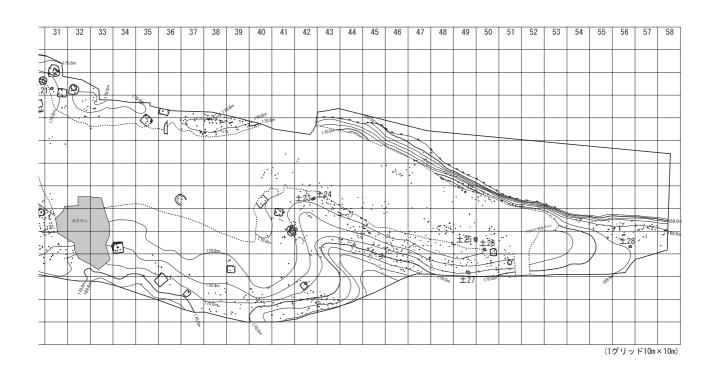
20~30区 周辺の状況



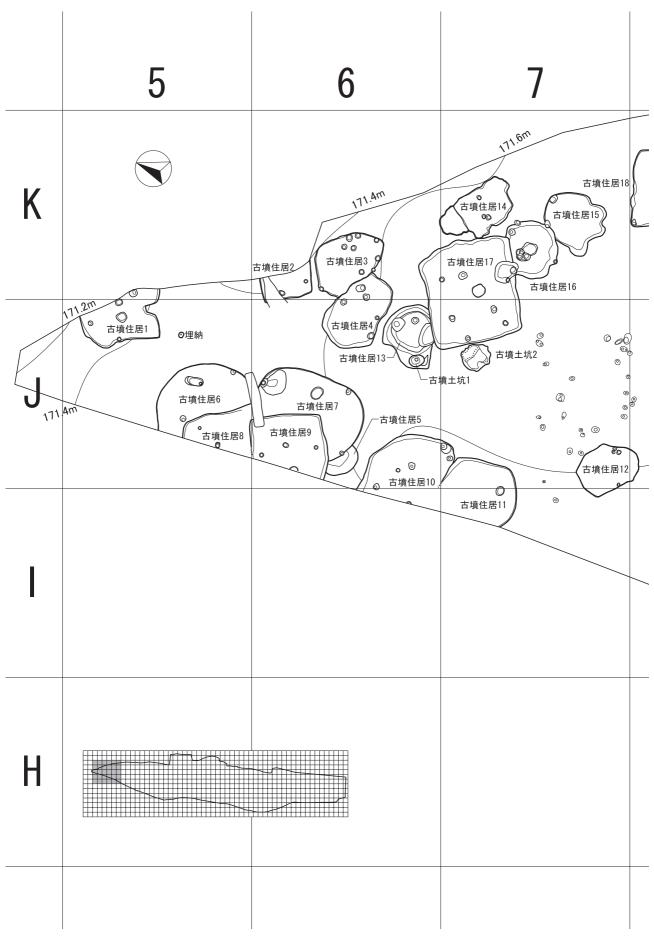


第160図 遺構配置図①

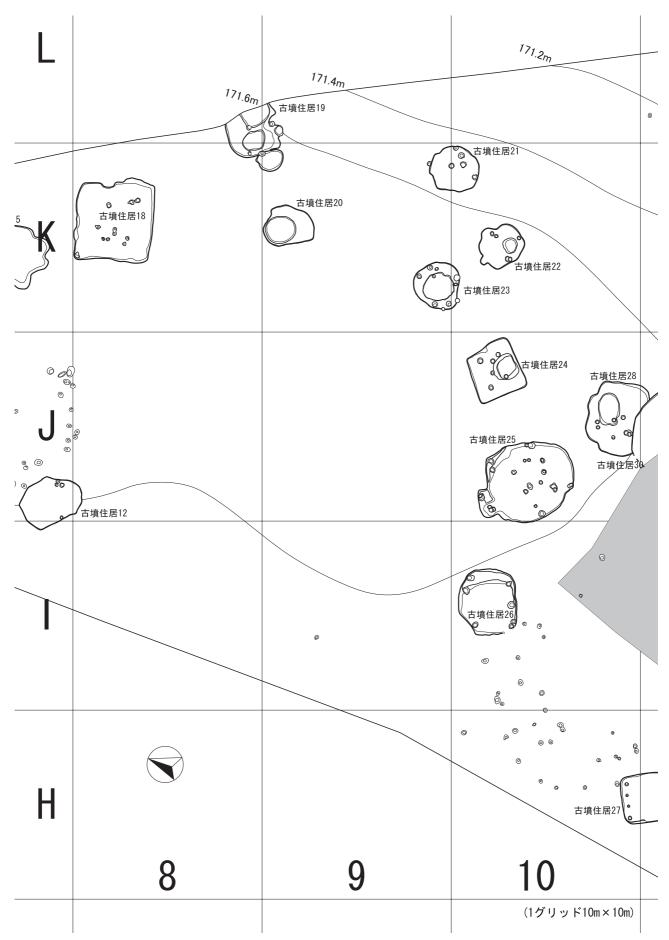




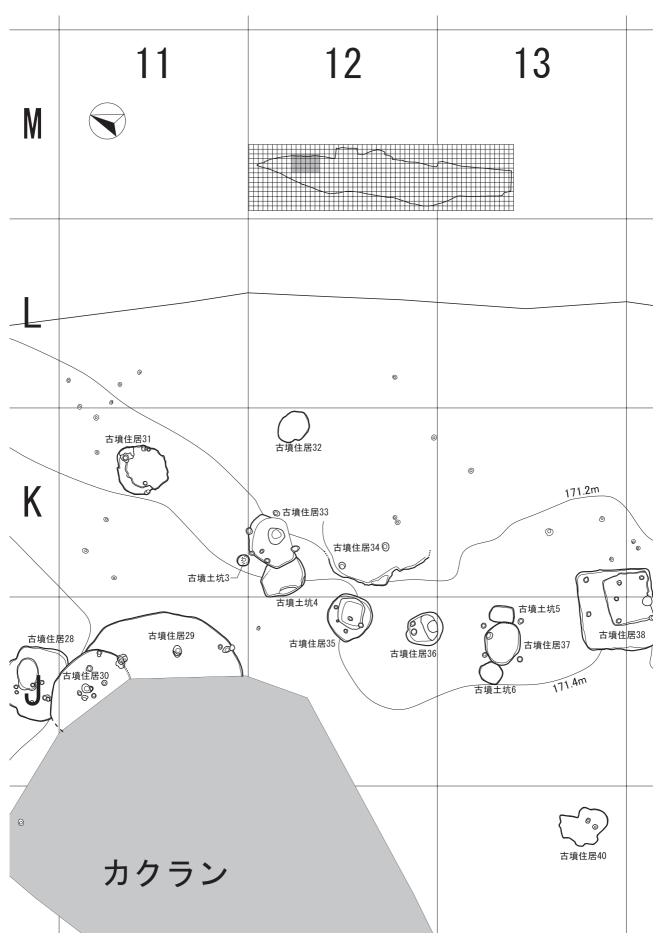
第161図 遺構配置図②



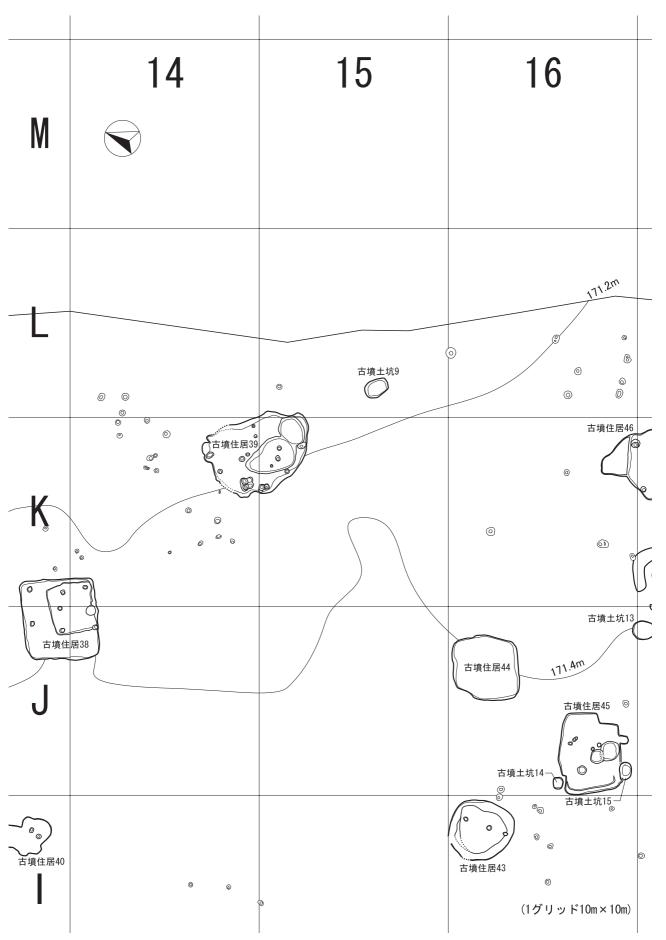
第162図 遺構配置図③



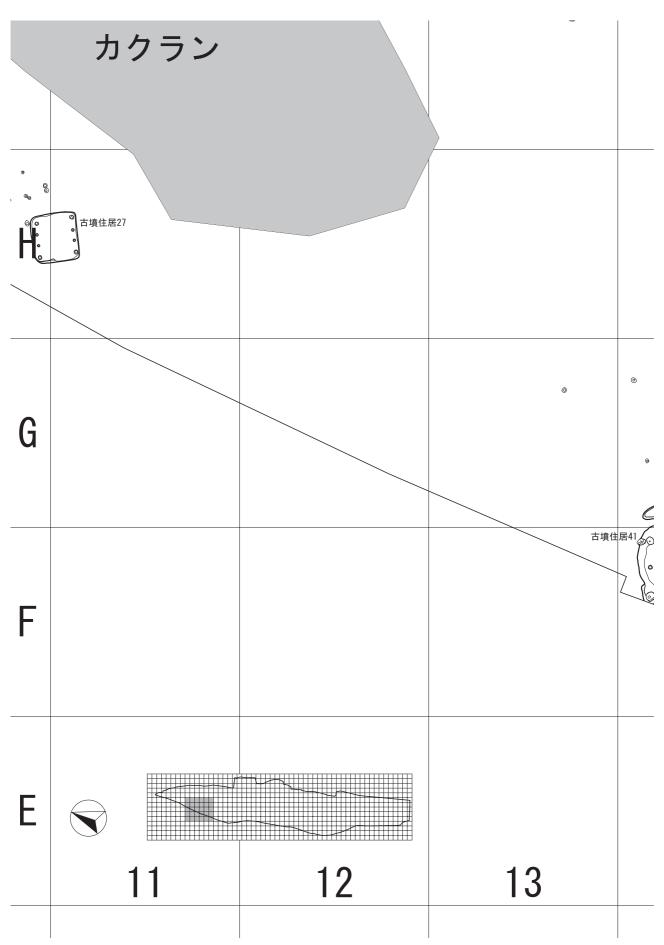
第163図 遺構配置図④



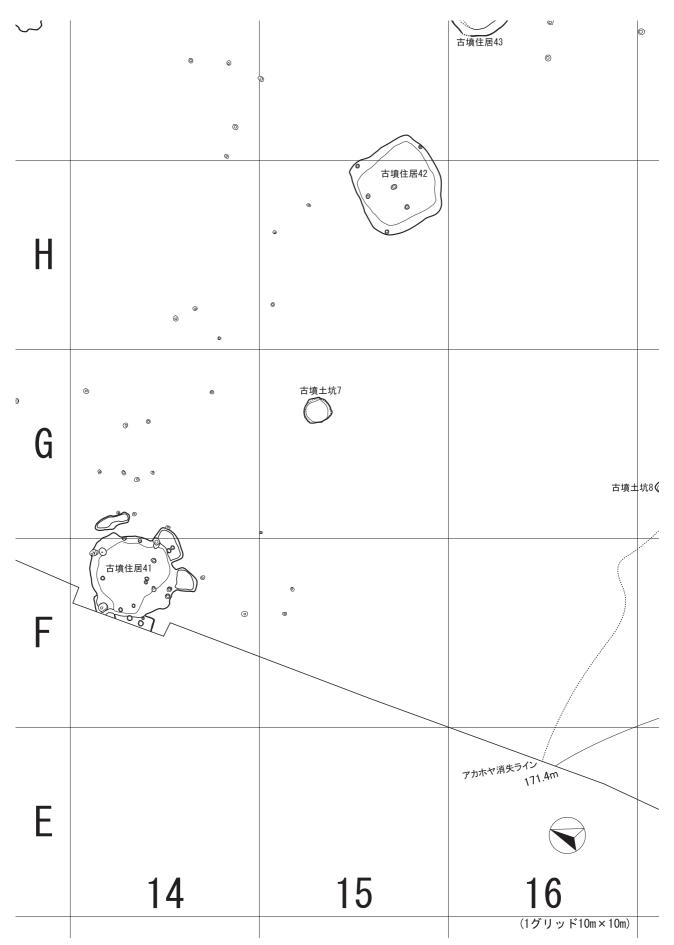
第164図 遺構配置図⑤



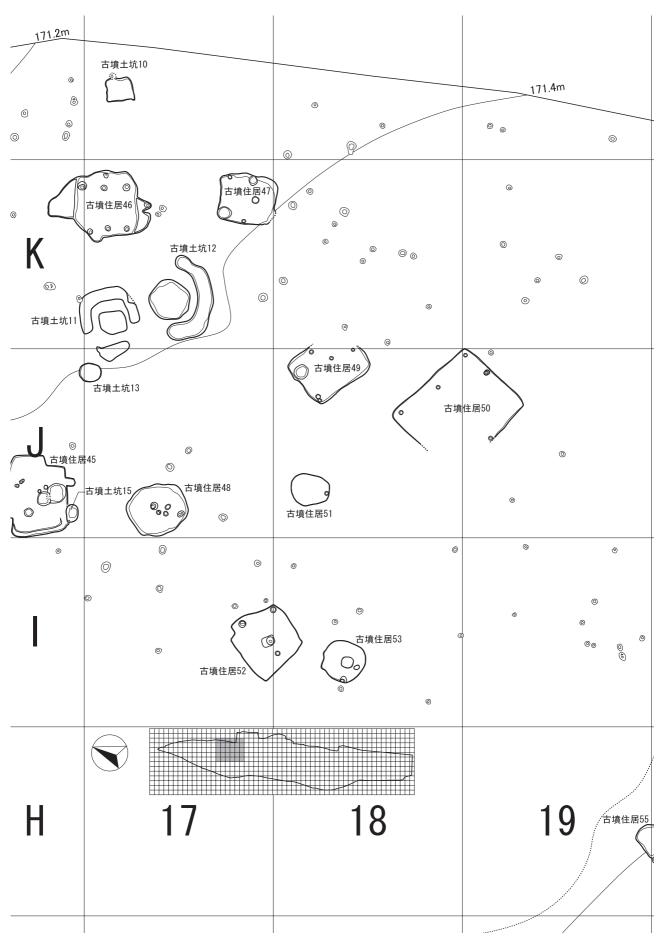
第165図 遺構配置図⑥



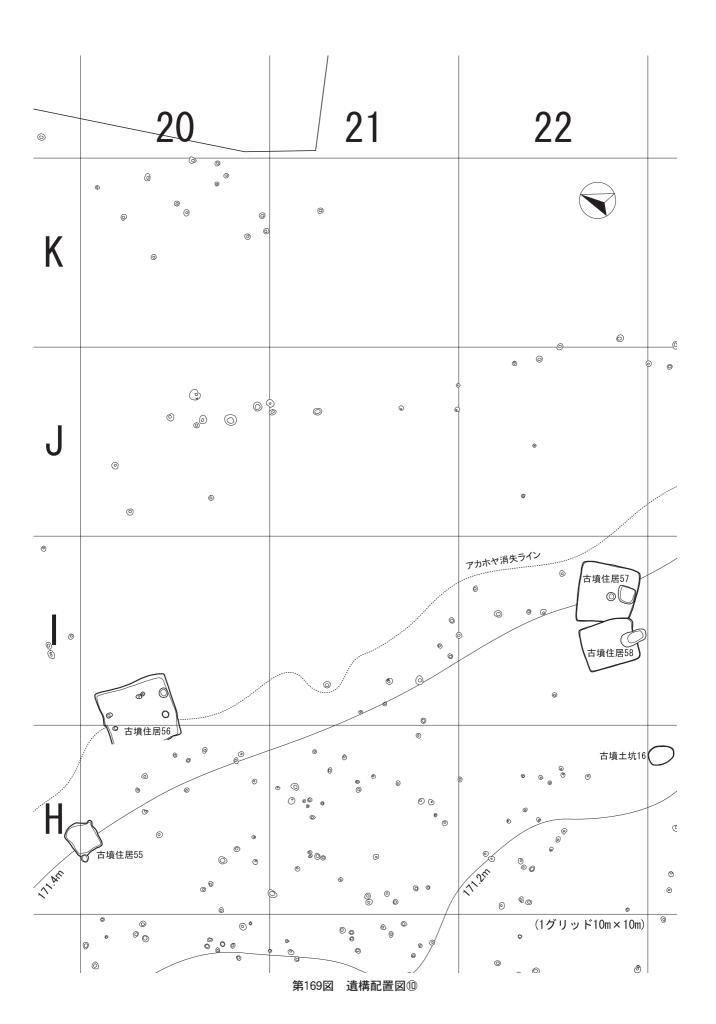
第166図 遺構配置図⑦

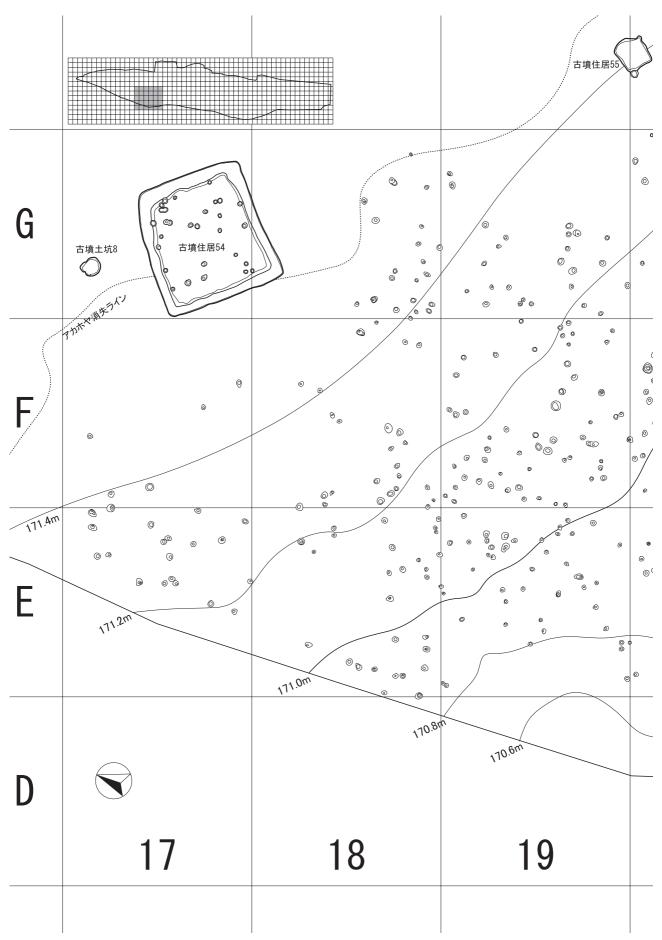


第167図 遺構配置図⑧

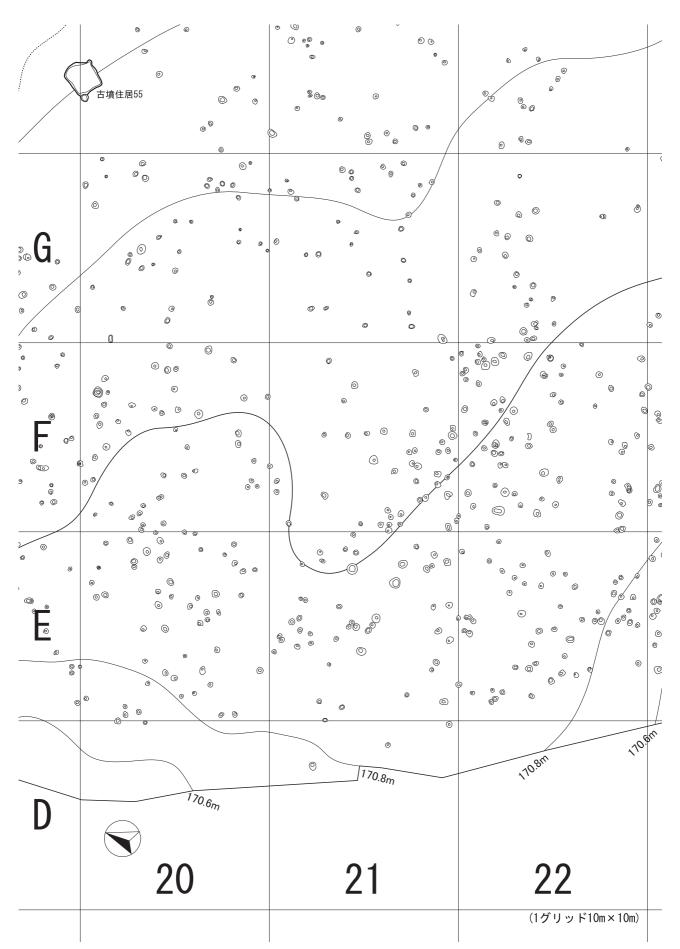


第168図 遺構配置図⑨

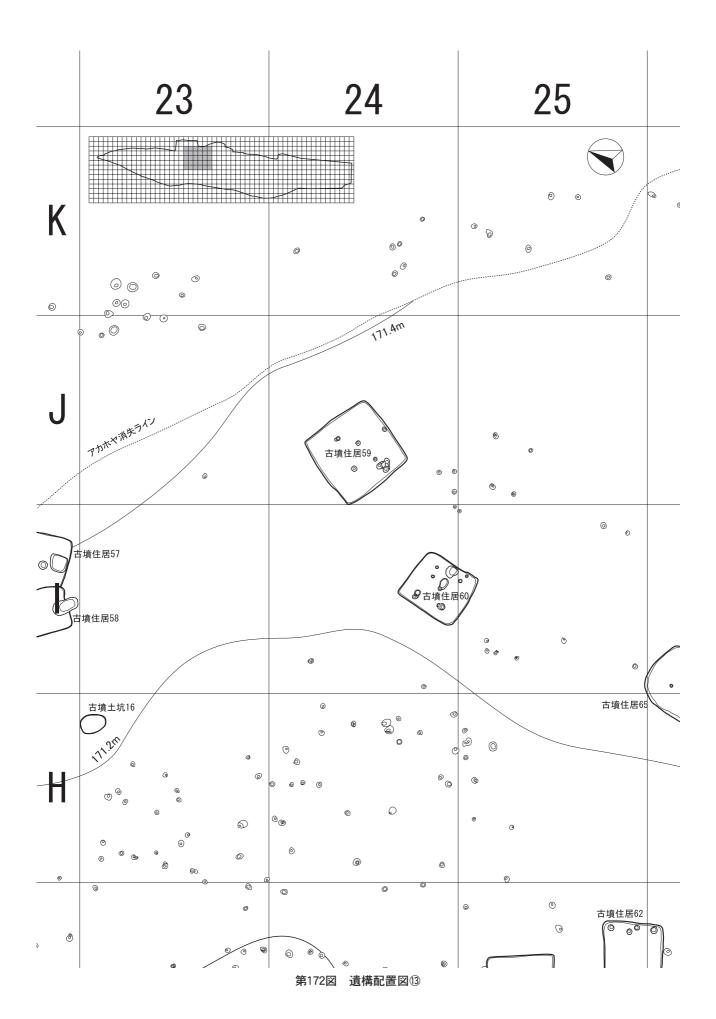


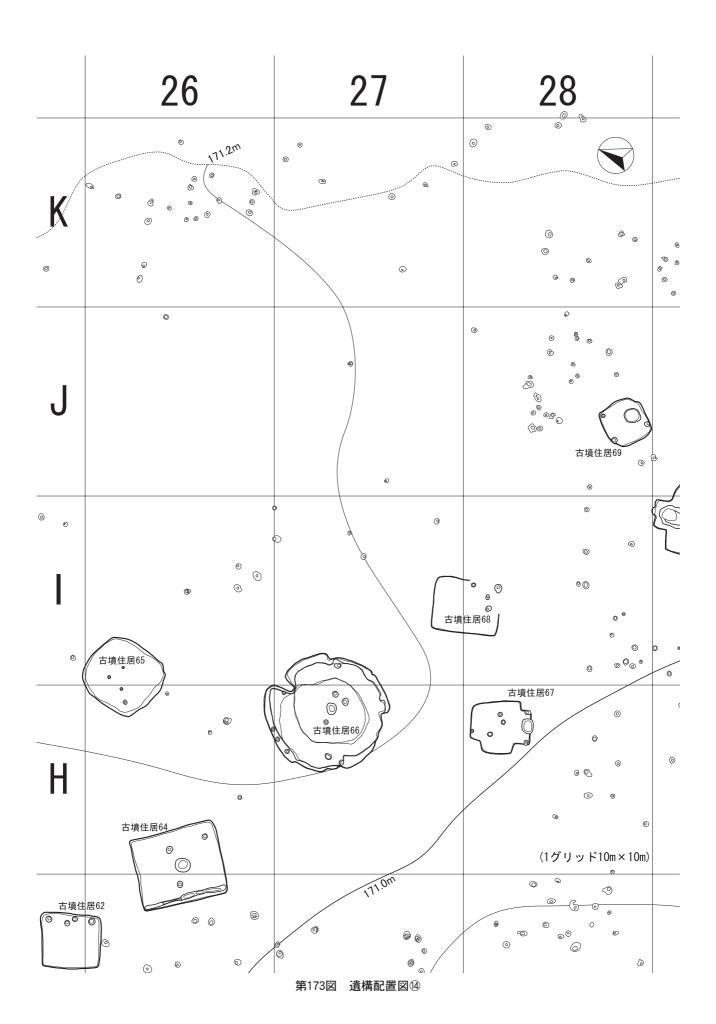


第170図 遺構配置図①

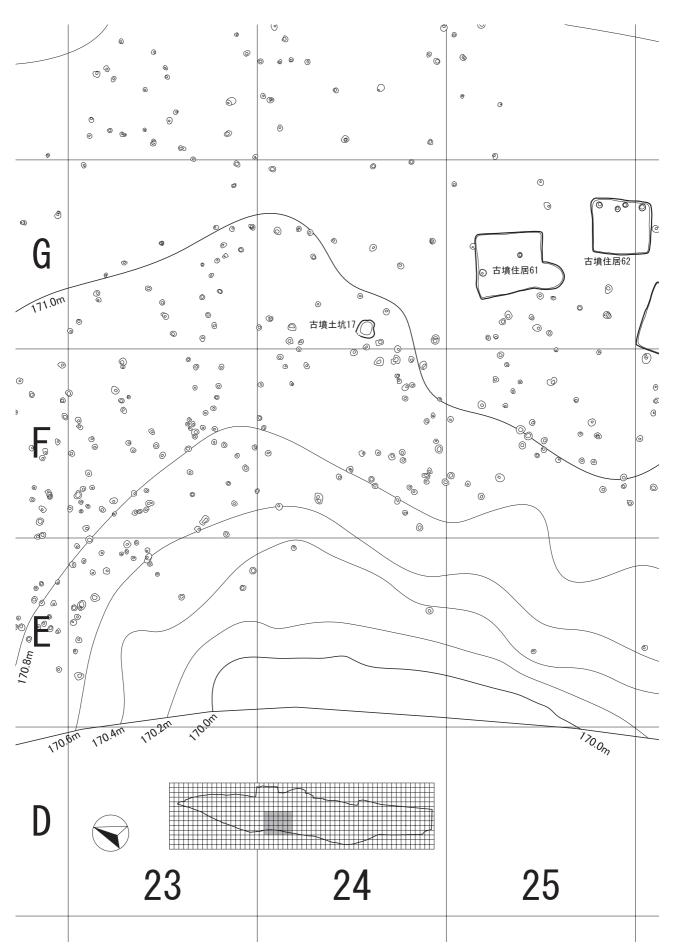


第171図 遺構配置図⑫

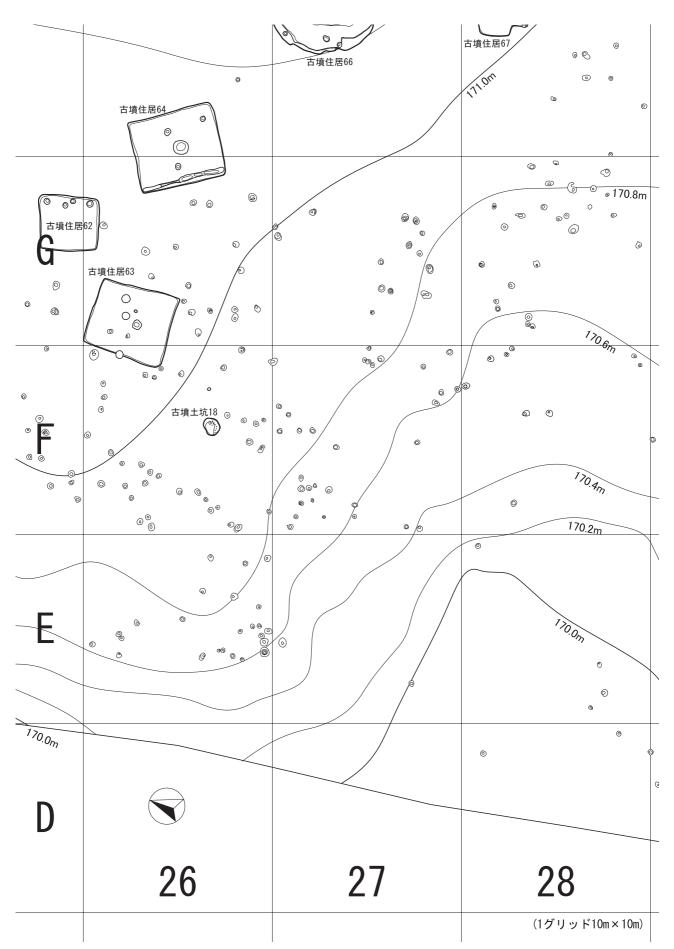




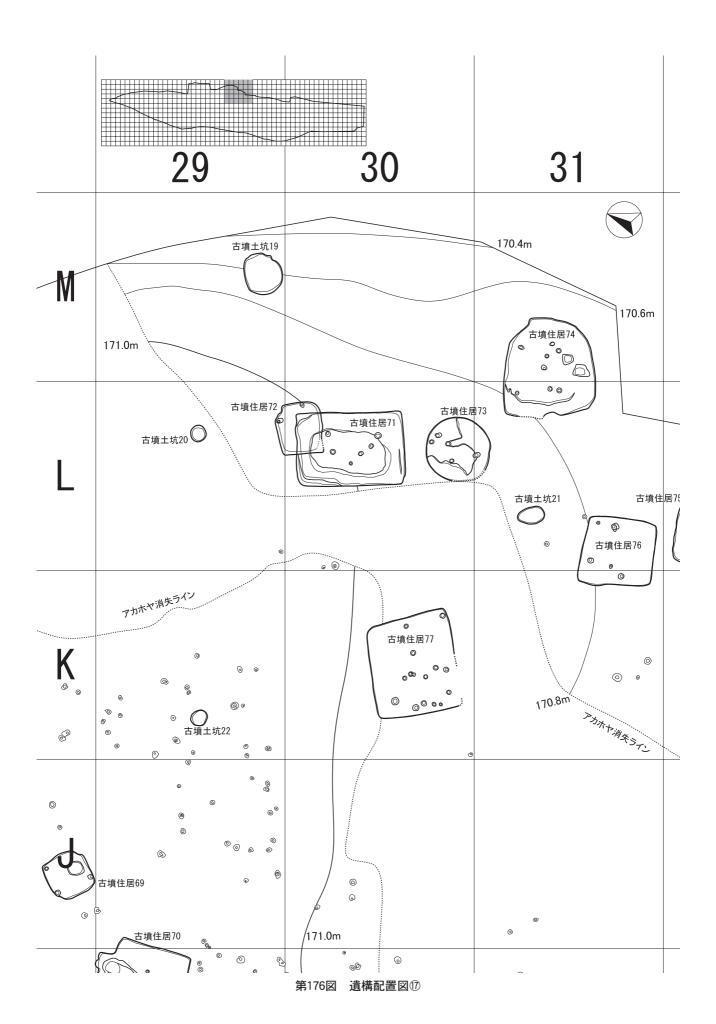
- 195 **-**



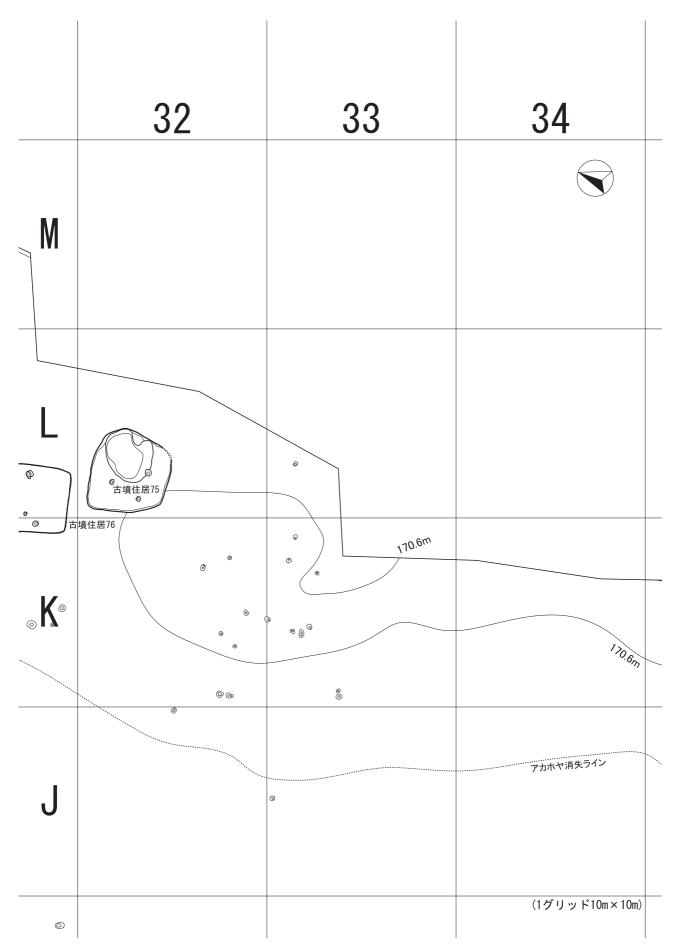
第174図 遺構配置図⑮



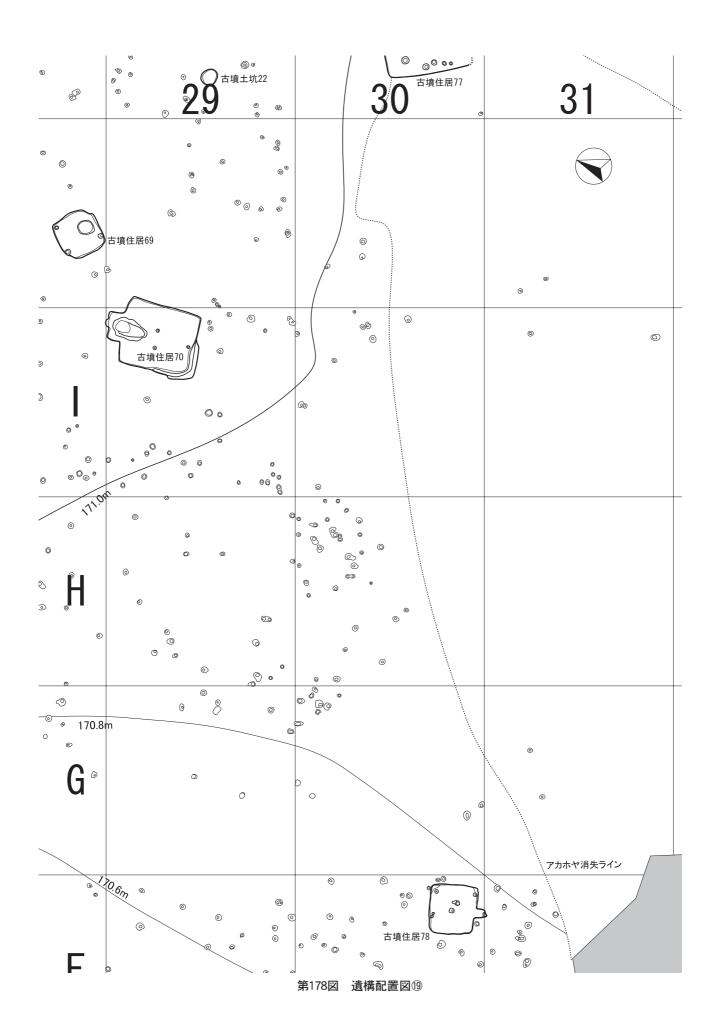
第175図 遺構配置図⑯



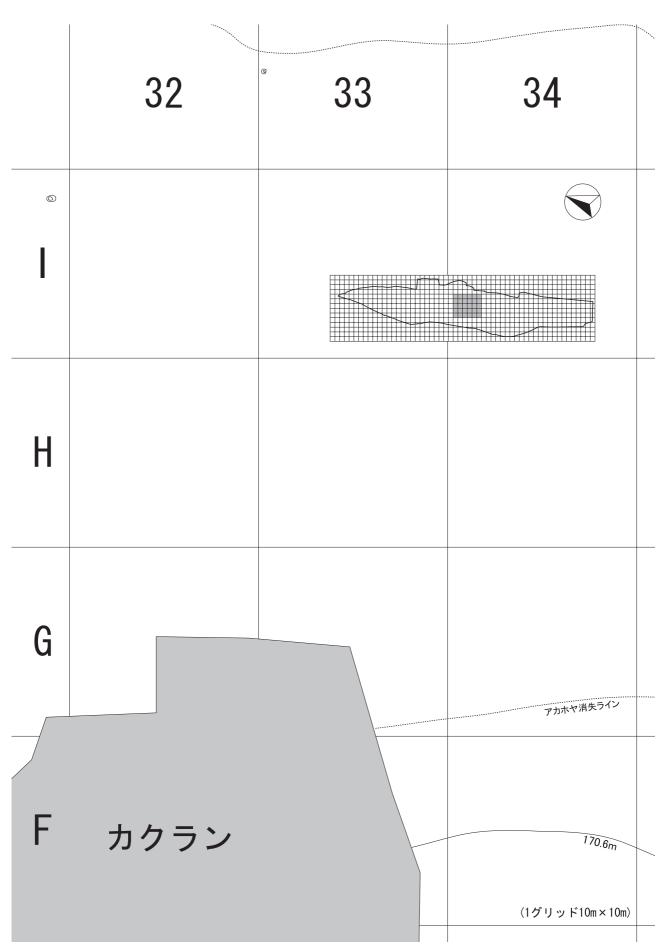
-198-



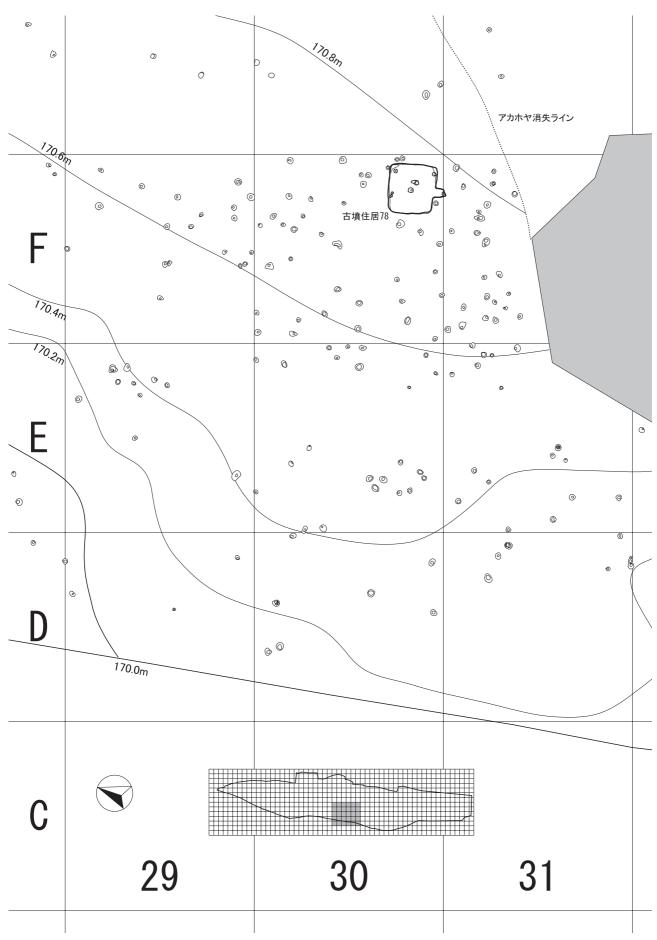
第177図 遺構配置図®



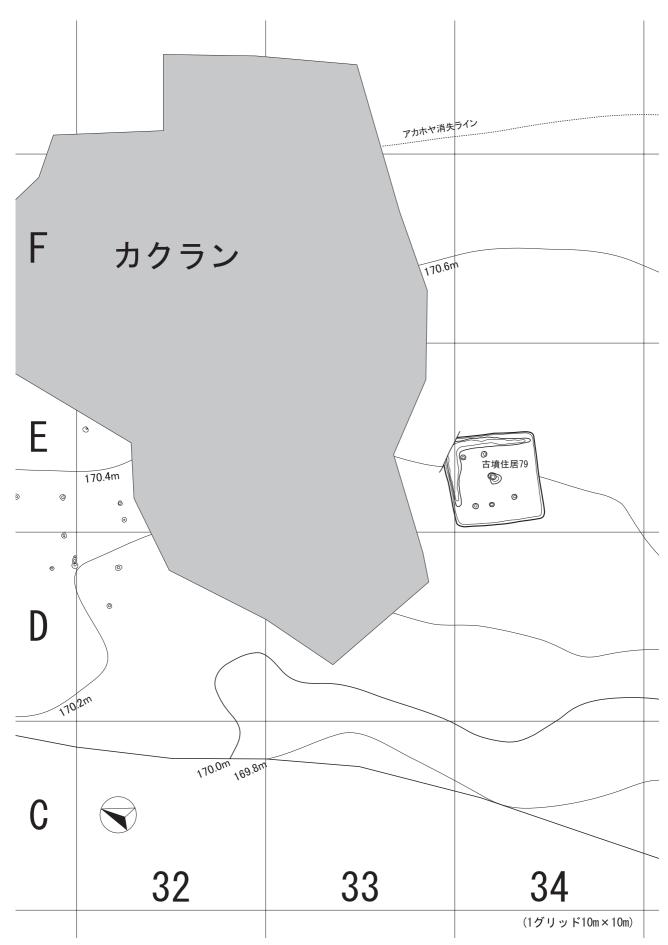
- 200 **-**



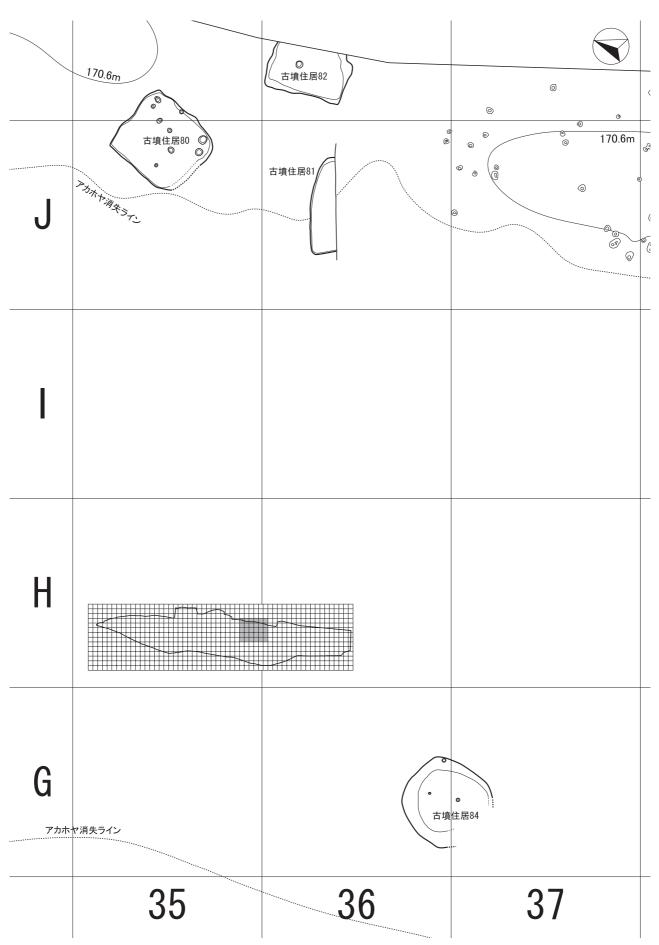
第179図 遺構配置図20



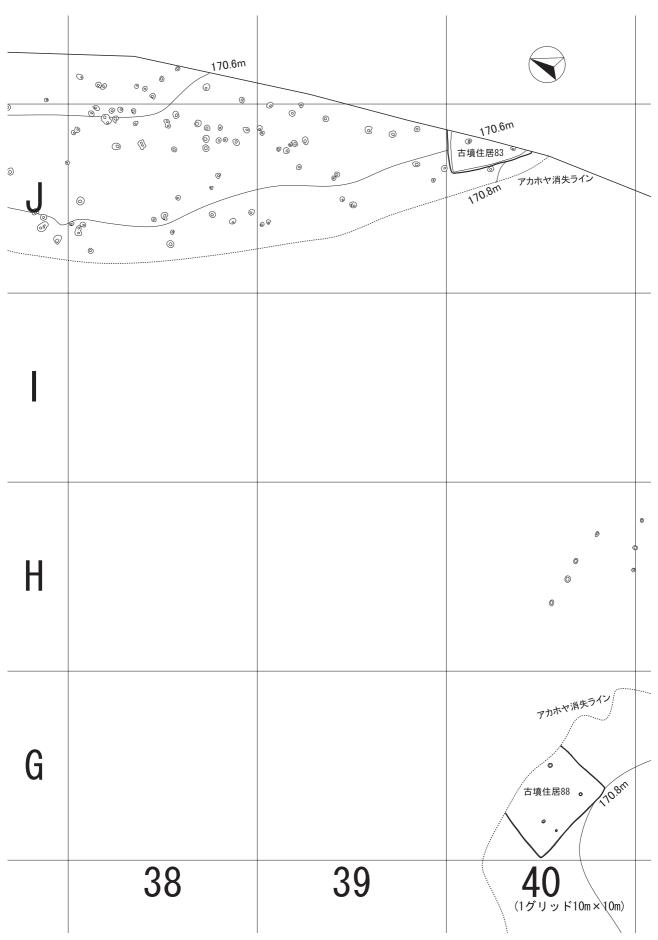
第180図 遺構配置図②



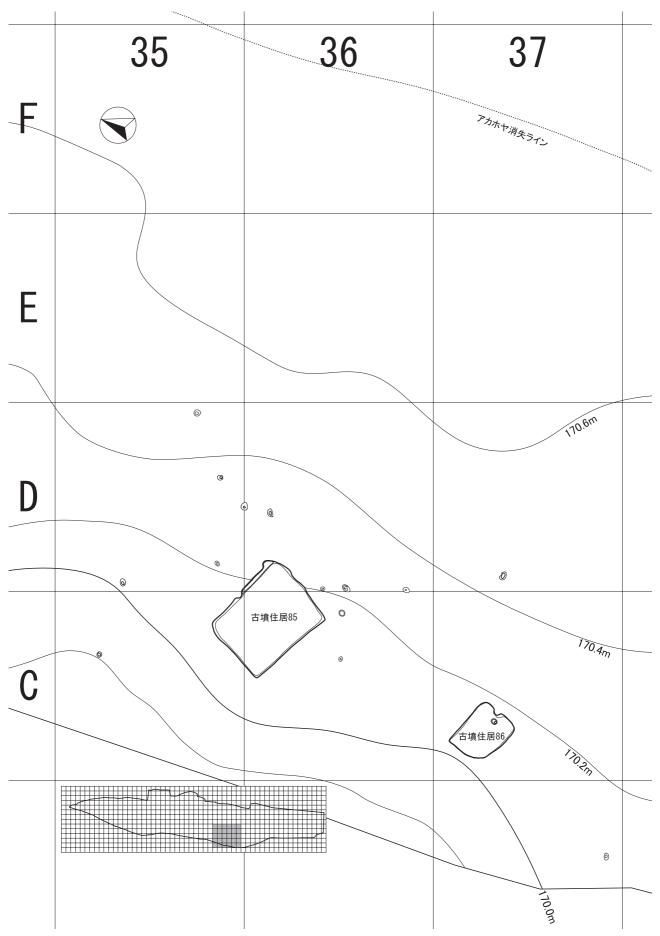
第181図 遺構配置図②



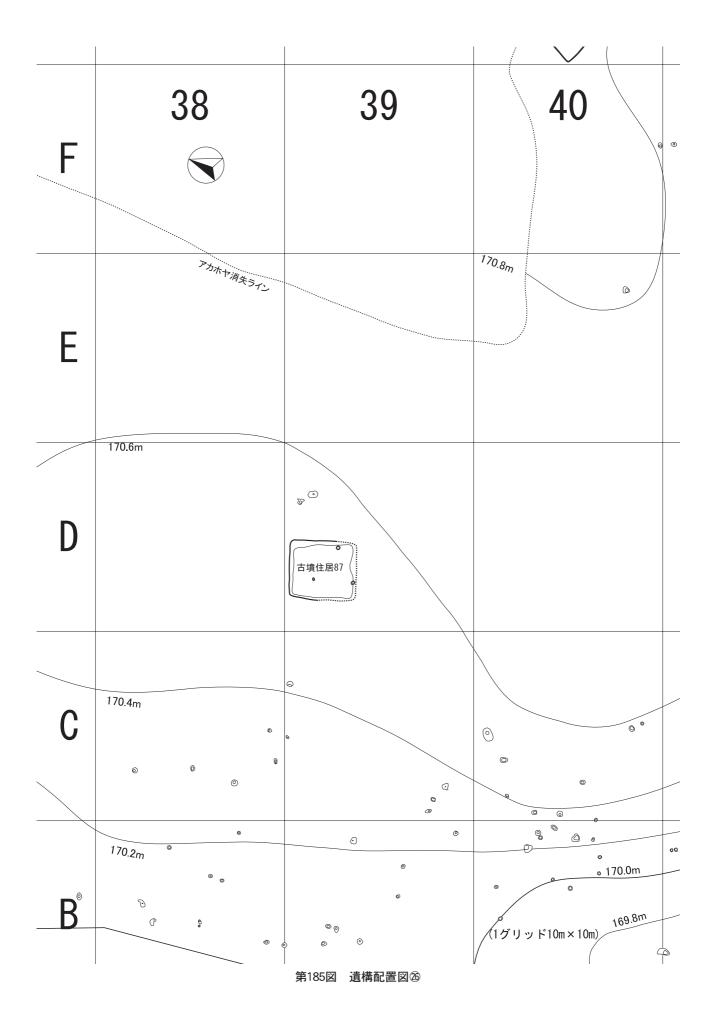
第182図 遺構配置図図

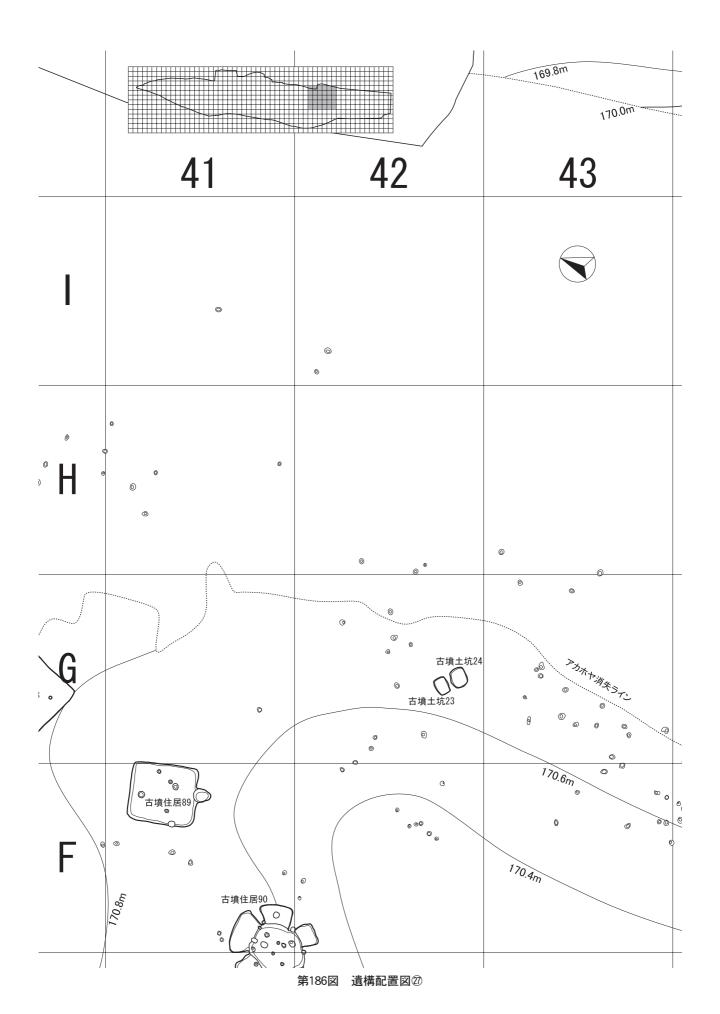


第183図 遺構配置図24

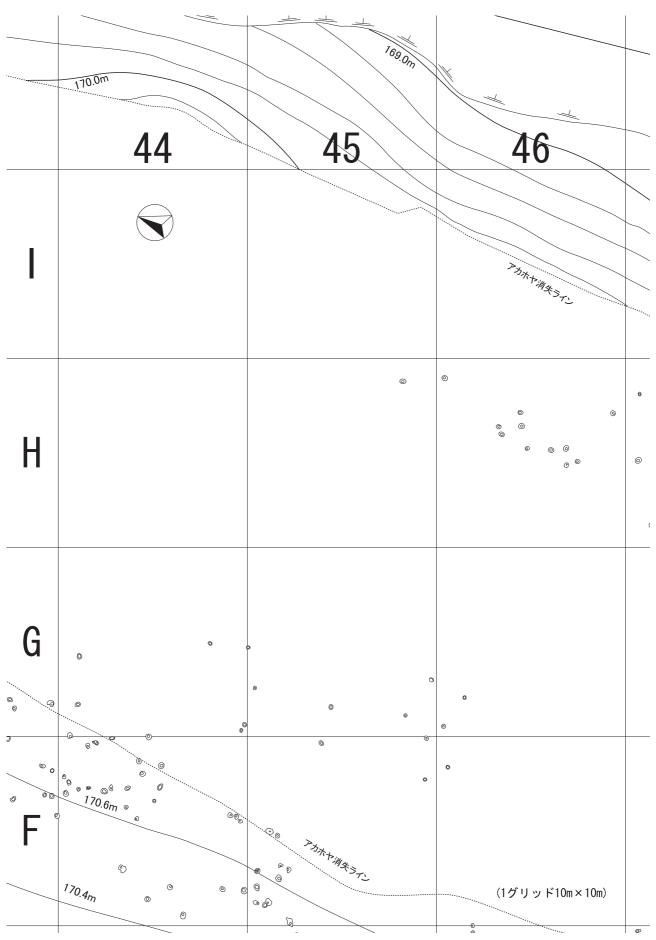


第184図 遺構配置図②

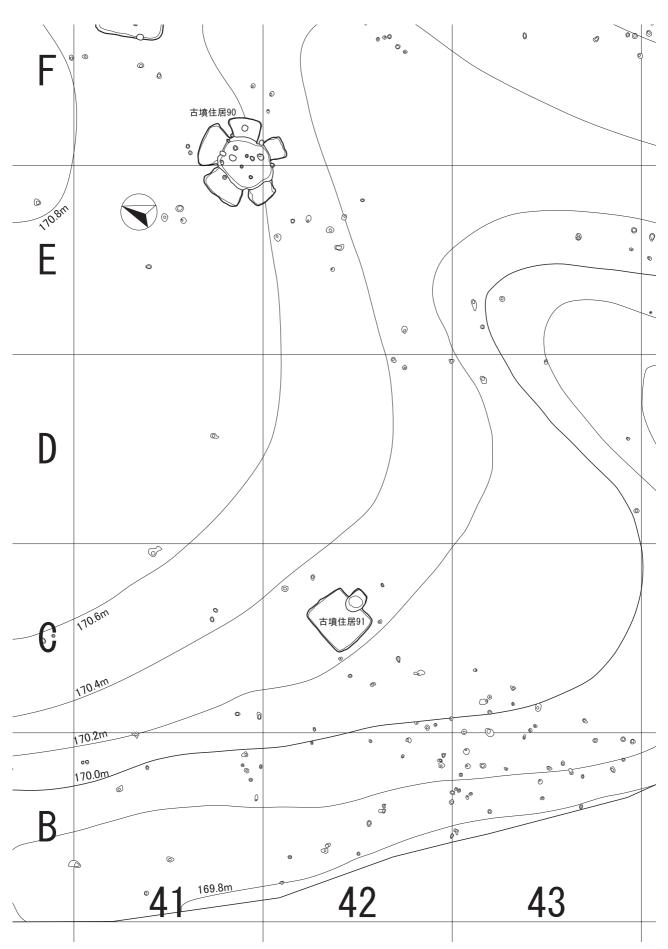




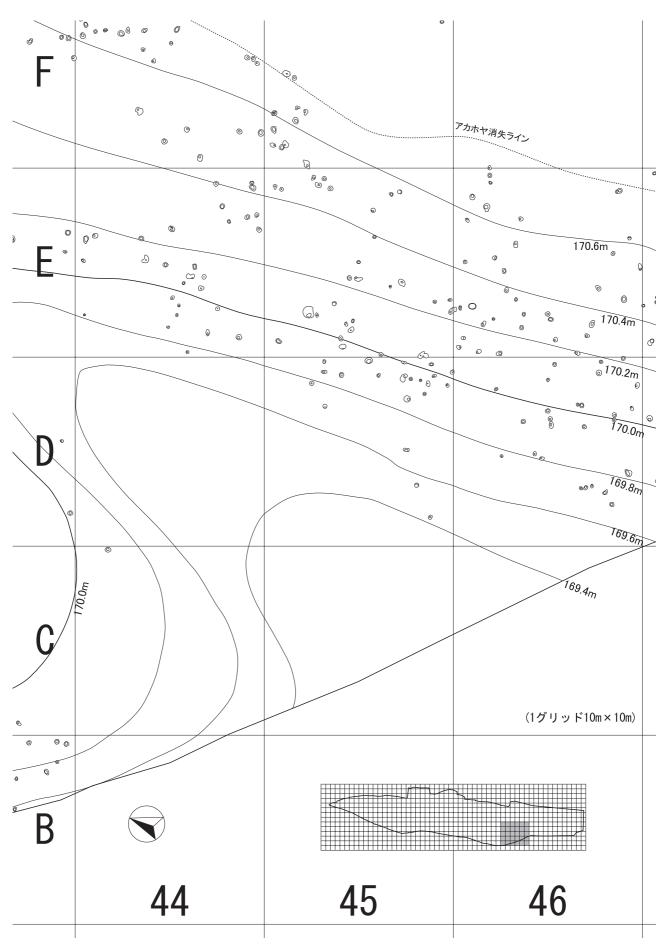
-208 -



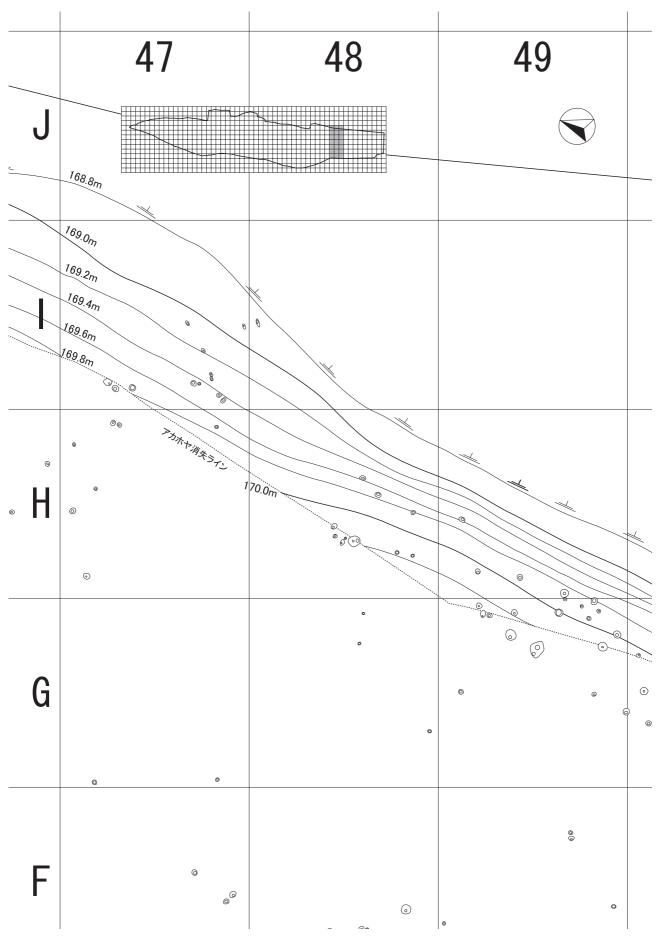
第187図 遺構配置図28



第188図 遺構配置図29



第189図 遺構配置図30



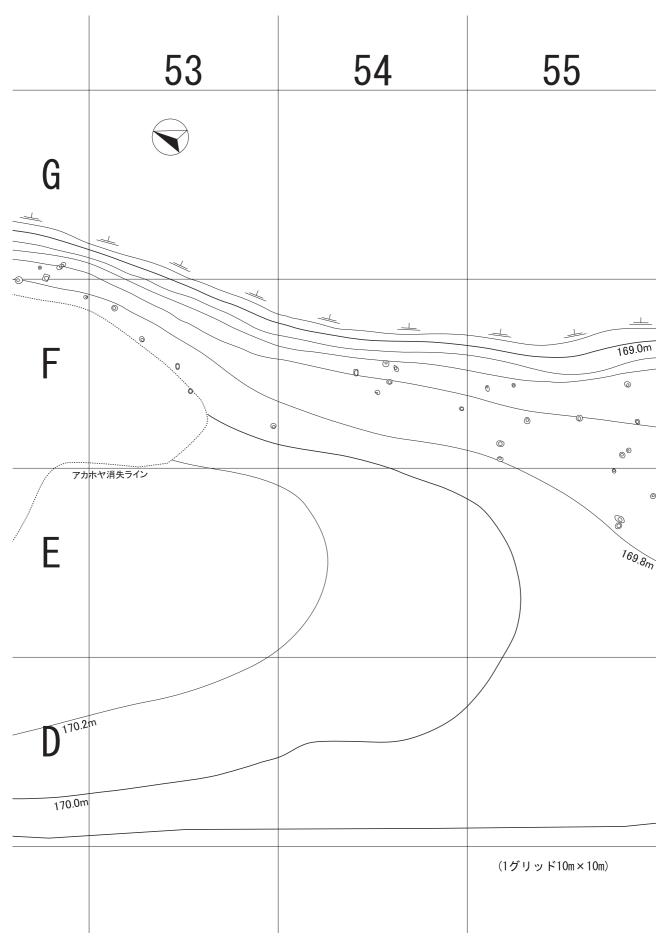
第190図 遺構配置図③

			770
		PA/K T	170.0m ©
	0	2757 T T T T T T T T T T T T T T T T T T	170
		73 .	
		•	
			(6)
		•	
G			© @
ч			
		•	
	⊚		
			© ©
F	©		
	<u> </u>		
	© ©	<u></u>	0
			8
			© ©
		0 v	0
	Ø •	_ 0	
Ø	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	© ©	
	• ©		◎ 古墳土坑25
Θ.	***************************************	0	© (
9	•		\
6	•	•	·\ / // // // / / / / / / / / / / / /
<u> </u>	0 0	© ©	るが、ヤガキライン の
Ĭ 0 ,		•	•
	0 0		0
	8.	•	٥
_ 0		0	0
9	0		
€	•		o • 170.6m
. 0		8	6 ⁶ 6
			0
\mathbf{D}		0	9
U		6 6	© 170.4m
			o ° 170.4m
0	0	0	古墳土坑27
0	•	• •	
_			170.2m
	169.8 _m	170.0m	
	3.6 _{/22}		
_	47	48	49
		→ ()	+ 3
	T /	10	(1グリッド10m×10m)

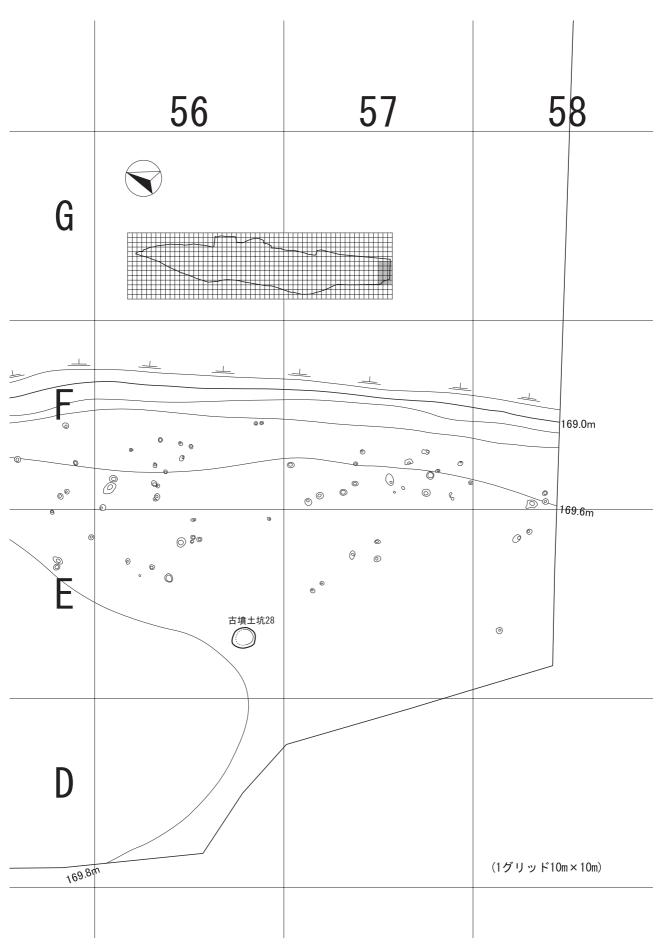
第191図 遺構配置図②



第192図 遺構配置図33



第193図 遺構配置図34



第194図 遺構配置図③